ISSN 0918-1334

考古論叢 神奈河

第5集

相模野地域における縄文時代草創期遺跡のあり方……桜井　準也
—隆線文期の評価をめぐって—

槍と土器……坂本　彰
—都筑における縄文時代草創期の遺跡—

三浦半島南部の海蝕洞穴遺跡とその周辺の遺跡について……釼持　輝久
—洞穴遺跡の共通性と特殊性および周辺遺跡との関連—

大磯町の横穴墓群……鈴木　一男・國見　徹
—詳細分布調査の成果と課題—

胞衣容器についての一考察……戸田　哲也・小松　清
—横浜市今井町出土土器を中心として—

資料紹介　藤沢市No.220遺跡B4層出土の石器について……加藤　信夫
安達　尊伸

平成8年(1996)4月
神奈川県考古学会

誌名中の「神奈河」は，鶴岡八幡宮文書のうち，北条時宗が文永３年（1266）５月２日に武蔵目代殿あて発給した下文中の「神奈河」に拠るもので，これが地名神奈川の初出文書である。

考古論叢 神奈河

第５集

平成８年４月

＊目　　次

相模野地域における縄文時代草創期遺跡のあり方……桜井　準也　1
── 隆線文期の評価をめぐって ──

槍と土器……坂本　彰　21
── 都筑における縄文時代草創期の遺跡 ──

三浦半島南部の海蝕洞穴遺跡とその周辺の遺跡について……釼持　輝久　51
── 洞穴遺跡の共通性と特殊性および周辺遺跡との関連 ──

大磯町の横穴墓群……鈴木　一男・國見　徹　67
── 詳細分布調査の成果と課題 ──

胞衣容器についての一考察……戸田　哲也・小松　清　89
── 横浜市今井町出土土器を中心として ──

資料紹介　藤沢市№220遺跡Ｂ４層出土の石器について……加藤　信夫　114
安達　尊伸

神奈川県考古学会

相模野地域における
縄文時代草創期遺跡のあり方

── 隆線文期の評価をめぐって ──

桜　井　準　也

1．はじめに

相模野台地およびその周辺の丘陵地帯で構成される相模野地域には，多くの縄文時代草創期の遺跡[(1)]が分布している。このうち，大和市や綾瀬市を中心とする地域には縄文文化の遡源を探るうえで重要な遺跡群が集中している。無文土器と隆線文土器が文化層を異にして出土した大和市上野遺跡（大和市教育委員会1986）をはじめ，刺突文土器が出土した大和市相模野第149遺跡（大和市教育委員会1989），刺突文土器と尖頭器群が出土した綾瀬市寺尾遺跡（神奈川県教育委員会1980），無文土器と細石刃石核が共伴した相模原市勝坂遺跡（相模原市市道磯部上出口改良事業地内遺跡調査団1993），多量の尖頭器群が出土した座間市栗原中丸遺跡（神奈川県立埋蔵文化財センター1984）や綾瀬市吉岡遺跡群（白石・砂田1992）などである。また，後続する隆線文土器の時期では大和市上野遺跡や長堀北遺跡（大和市教育委員会1990）などがあるが，この時期には南部の藤沢市域で遺跡が急に増加する。藤沢市代官山遺跡（神奈川県立埋蔵文化財センター1986），慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡（慶応義塾1992・1994），南鍛冶山遺跡（藤沢市教育委員会1994），柄沢遺跡群（柄沢遺跡調査団1991）などである。さらに，爪形文土器や多縄文土器の時期の遺跡としては，大和市深見諏訪山遺跡（大和市教育委員会1983），海老名市柏ケ谷長ヲサ遺跡（柏ケ谷長ヲサ遺跡調査団1983），藤沢市代官山遺跡，今田遺跡（今田遺跡発掘調査団1992），南葛野遺跡（南葛野遺跡調査団1995），柄沢遺跡群などがあげられる。この他にも有茎尖頭器が単独で出土する遺跡も多く，全国的にみて本地域は草創期の遺跡が集中する地域であるといえる。

また，本地域は草創期の遺構検出事例も多く，住居状遺構が勝坂遺跡，慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡，南鍛冶山遺跡で検出されている。また，広範囲に調査が行われたという点では慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡は約12万m²にわたる調査がなされた遺跡であり，数多くの遺物集中部や遺物が出土し，隆線文期の遺跡のあり方やセツルメントシステムを検討することが可能な遺跡である。

このように，草創期研究において相模野地域は全国的にみても注目される地域であり，遺跡論や領域論を展開できる地域でもある。そこで本稿では本地域で検出された遺構や遺物集中部のあり方について検討するとともに，遺跡の分布や立地についても触れ，旧石器（岩宿）時代から縄文時代に至る過渡期として位置づけられる隆線文期の評価を試みて

みたい。

2．相模野地域の住居状遺構

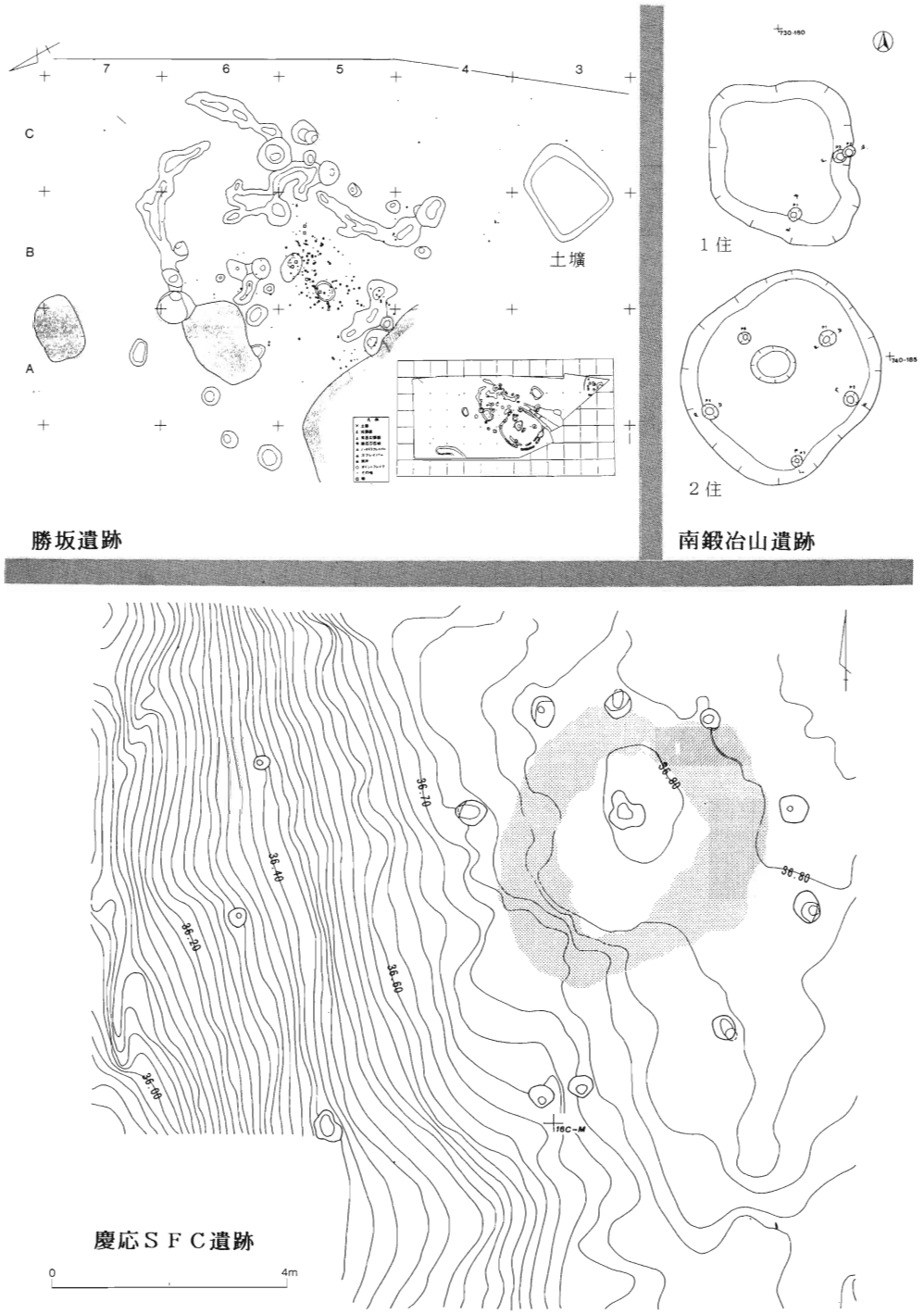
関東地方における縄文時代草創期の住居ないし住居状遺構とされる遺構としては，東京都秋川市前田耕地遺跡（前田耕地遺跡調査会1983），練馬区もみじ山遺跡（東京外かく環状道路練馬地区遺跡調査会1993），埼玉県花園町宮林遺跡（埼玉県埋蔵文化財事業団1985），神奈川県横浜市花見山遺跡（横浜市ふるさと歴史財団1995）などがある。近年，静岡県沼津市葛原沢第Ⅳ遺跡（池谷他1995）や長野県上松町お宮の森裏遺跡（上松町教育委員会1995）などでも住居状遺構が検出され，草創期の住居跡の検出例は確実に増加している。相模野地域でも勝坂遺跡をはじめ慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡，南鍛冶山遺跡で住居状遺構が検出されている。以下で詳細に検討してみたい。

勝坂遺跡（第1図左上）

本遺跡では約14m×10mの範囲で草創期前半期の住居状遺構や遺物集中区（第１～３）が分布している。このうち住居状遺構は第１集中区に位置し，硬化した床面とピットで構成される。規模は約６m×４mの台形を呈し，10基のピット，浅い溝，炉址が存在する。このうちピットについては，漸移層を覆土とし，大ピット（直径約40cm）４基，小ピット（直径約10cm）９基，中央ピット（直径約30cm）１基があり，大ピットの中には中込め石と考えられる拳大の礫を規則的に配したものがある。炉址は硬化面上の礫２個を組み合わせた施設で礫は被熱しており，周囲に焼土もみられる。出土遺物は無文土器１点，細石刃石核１点，尖頭器１点などである。また，本住居状遺構の南西約２mの位置に土坑，北東約２mの位置に礫群が検出されている。このうち，土坑は台形の形状を呈し，長さ1.48m，幅1.15m，深さ0.4mを測る。遺物は出土していない。礫群は17個の礫で構成され，直径約１mの範囲に散漫に分布している。すべての礫が被熱しており，タールが付着している。ハンマーストーン２点，大形剥片1点が伴出している。

南鍛冶山遺跡（第1図右上）

本遺跡では遺跡南西部に草創期１号遺物集中部が分布し，約25m×10mの範囲に草創期の遺構や遺物が分布している。[(2)] 本遺物集中部からは住居状遺構２軒，配石遺構２基，炭化物集中２ケ所，砕片集中１ケ所，土器集中１ケ所，礫集中３ケ所の遺構群とともに，遺物が多量に出土している。このうち，隆線文土器は３個体71点，石器類は尖頭器１点，有茎尖頭器10点，打製石斧７点，削器１点，磨石２点，礫器１点，ハンマーストーン１点，台石１点，剥片630点，砕片451点，礫154点の計1330点の遺物が出土している。２軒検出さ



第１図　相模野地域の住居状遺構

れた住居状遺構はともに竪穴状の遺構であり，１号住居状遺構は１・２号炭化物集中や砕片集中に囲まれているが，１・２号配石遺構の直下で検出されていることや覆土の状況などから他の遺構群より形成時期が古いと思われる。長径3.3m，短径2.8mの不整楕円形を呈し，南東側に２基の柱穴（東側の１基は内側に移動）を伴っている。床面に硬化面や炉址はみられず，床面と壁面の区分も不明瞭である。土層の落ち込みや柱穴が明瞭であったため住居状遺構と認定したが，自然の落ち込みに若干手を加えた上で斜面下側に２本の柱を建てたテント状の住居であった可能性が高い。出土遺物は剥片15点，砕片１点，礫１点，計17点である。２号住居状遺構は１号住居状遺構の南西約10mに位置し，長径3.4m，短径3.2mの楕円形を呈し，中心よりやや北西にずれた位置に若干の炭化物を含む炉址状の落込みと５本の柱穴を伴う。床はしっかりしており，柱穴も存在することから竪穴住居状の遺構と判断した。出土遺物は隆線文土器１個体９点，礫２点，計11点である。

慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡（第１図下）

本遺跡では遺跡南西部のⅡ区のＢ遺物集中部より草創期の住居状遺構が検出された。長径約７m，単径約６mで９基の柱穴が円形に配列されている。内側は床面状の硬化面，ドーナッツ状の落込み，炭化物を伴う中央の落込みで構成される。このうち柱穴については，漸移層を覆土とし，床面上から下部のハードロームまで掘り込まれている。また，ピットの形態・規模・深さもほぼ揃っており，配列も規則的である。床面を想定している硬化面は，ピットの配列と合致した楕円形を呈し，ドーナッツ状の落ち込み部分を除いてほぼ平坦であり，出土した大形礫の底面と床面レベルが一致する。中央の炭化物を伴う落込みは，形態はやや不定形ながら，遺構の中心に位置すること，周囲の礫の中心部を向く面が赤化していることや古地磁気測定でも最も被熱を受けた可能性が高いことから，炉址と考えられる。また，南西方向にピットが認められなかったことから，この方向に入口が存在した可能性がある。出土遺物は隆線文土器２個体72点，石器類は有茎尖頭器１点，磨石１点，打製石斧２点，磨石１点，石核１点，剥片５点，砕片15点，礫16点の計114点である。遺物の分布状況は隆線文土器が住居北東部に中心を持ち，打製石斧や磨石が中央部炉東側にまとまり，石器の調整等によると考えられる微細な砕片が南西部から遺構硬化面の南西側斜面にかけて分布している。

また，報告書作成時には住居状遺構とは認定しなかったが，本遺跡ではⅠ区およびⅢ区で円形に廻るピット群が検出されている。このうち，Ⅰ区のピット群はⅠ区Ａ遺物集中部の中央部で検出された。深さは一定しないが漸移層を覆土とするピットは12基あり，径約3.3mで円形に配列する。その東側にも半円状に並ぶ同様のピット群がみられ，関連する可能性がある。ピット群周辺の遺物分布状況としては北側に礫の集中区域，南側に石器や剥片の集中区域がみられ，その間に隆線文土器片４個体がまとまって出土している。Ⅲ区

のピット群はⅢ区Ｄ遺物集中部の中央部で検出された。黒土層下層を覆土とするピットが20基程あり，径約6.5mで円形に配列する。また，ピット群の西側はピットが少なく，入口とも考えられる。ピット群内部から遺物は出土しなかったが，西側にピット群と重なるように土器片が狭い範囲に分布し，さらに西側には石器や剥片，礫などが高い密度で分布している。このようなピット群の配置や遺物分布との関係をみると，これらのピット群が居住施設の一部であった可能性が高い。(3)

旧石器（岩宿）時代から縄文時代初頭にかけての住居状の遺構については，既に様々な論考がみられる。旧石器（岩宿）時代においては北海道中本遺跡，山形県越中山遺跡Ａ’地点，神奈川県上和田城山遺跡，長野県駒形遺跡，大阪府はさみ山遺跡，広島県西ガガラ遺跡，福岡県椎木山遺跡，鹿児島県上場遺跡などの事例があげられるが，その多くは疑問視され，確実な事例はそれほど多くはないとされている（鈴木1983a・1995，稲田1986，栗島1989)。これに対し，草創期の住居状遺構は，葛原沢遺跡やお宮の森裏遺跡の事例にみられるように，ここ数年確実に検出例が増加している。しかし，草創期の住居状遺構は規模にかなりバラツキがあり，構造や付帯施設の検出状況も一定していない。形態的には柱穴とみられるピットの廻るタイプと掘り込みを持つ竪穴住居タイプがある。現段階での検出事例をまとめると，草創期前半期から隆線文期にかけて両タイプがみられ，爪形文・多縄文期になると竪穴住居に統一されるようである。また，爪形文・多縄文期では，お宮の森裏遺跡で９軒の竪穴住居からなる集落が検出されている。このように，草創期になると旧石器（岩宿）時代に比べ住居をはじめとする遺構の検出例が増加し，草創期前半期から隆線文期にかけてが過渡期となり，爪形文・多縄文期に住居構造が安定し，集落の萌芽がみられる。これに対し，草創期に後続する撚糸文期の竪穴住居については原田昌幸の一連の論考（原田1983•1984•1988）がある。この中で原田は撚糸文期以前の前田耕地遺跡や宮林遺跡の事例を検討した結果，壁と床が未分化であることや柱穴配置等からこれらの住居が仮設のテントや準平地住居の枠内にとどまっているとしている。しかし，その後検出状況の良好な事例が増加しており，その解釈には変更を要すると思われる。いずれにしろ，住居の存在は定住性の問題と大きく関わる重要な事項であり，住居構造や耐久性の問題だけでなく，遺物の出土状況や他の遺構群との関係，さらには集団の移動様式やセツルメントの問題など，より総合的な視点で捉えてゆく必要がある。(4)

３．草創期の居住活動とセツルメント

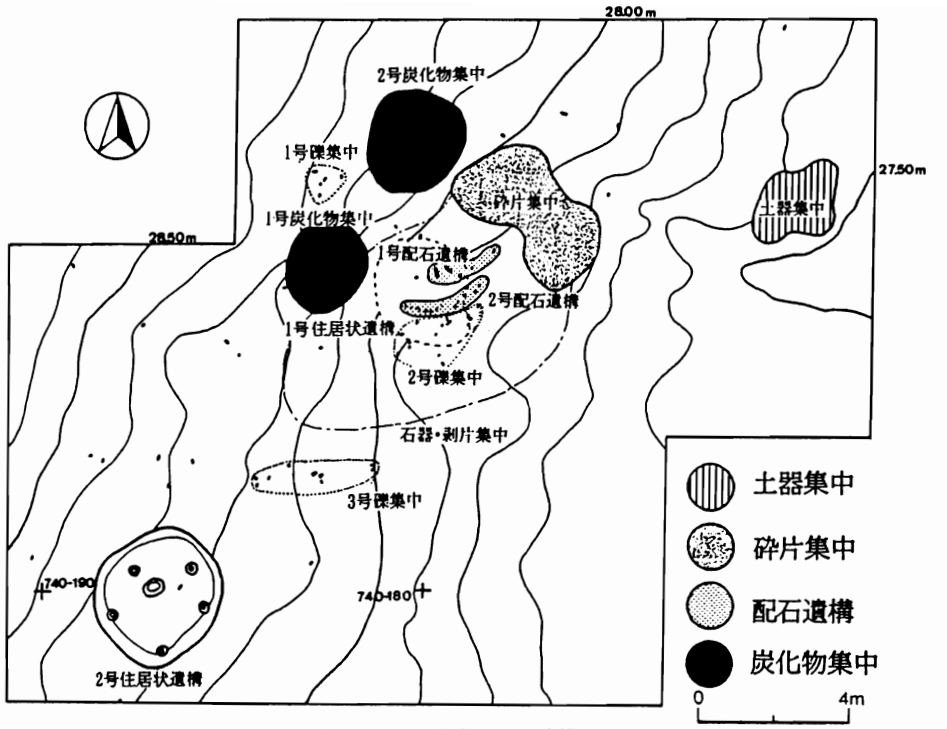
相模野地域においては，草創期の居住活動の実体を探るうえで重要な遺跡がいくつか存在する。このうち南鍛冶山遺跡は草創期の遺物集中部内の居住活動を考える上で好都合な

遺跡であり，慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡は広範囲にわたる調査を行い，遺物集中部のセツルメントとしての位置づけが可能な遺跡である。ここでは，これらの事例を検討することによって草創期の居住活動やセツルメントについて若干検討してみたい。

(1) 南鍛冶山遺跡の遺構群分布

本遺跡で遺構群が検出された1号遺物集中部（隆線文期）は遺跡の南東部にあたり，南東に傾斜する緩斜面上に位置し，遺構や遺物は28mの等高線に沿って約25m×10mの範囲に分布している（第2図)。本遺物集中部からは住居状遺構2軒，配石遺構2基，炭化物集中2ケ所，砕片集中1ケ所，土器集中1ケ所，礫集中3ケ所が検出されている。既に述べたように，住居状遺構は2軒とも竪穴住居状の遺構であり，1号住居状遺構は長径3.3m，短径2.8mの不整楕円形を呈し，南東側に柱穴を伴っている。2号住居状遺構は長径3.4m，短径3.2mの楕円形を呈し，中心よりやや北西にずれた位置に炉址状の落込みと5本の柱穴を伴っている。また，1号住居状遺構埋没後，1号配石遺構が形成されていることや礫の接合状況などから1号住居状遺構は他の遺構群とは時期を異にしていると考えられる。1号住居状遺構を除く遺構群の配置は，遺物集中部のほぼ中央に1・2号配石遺構，その西側に1号炭化物集中，北側に2号炭化物集中，北東部に砕片集中，東側約10mに1号土器集中が存在し，2号住居状遺構は南西方向約10mに位置している。このうち，1・2号配石遺構は同一方向に礫が弧状に配列され，内側には比較的大形の礫や隆線文土器片も2点が出土しており，遺物の集中する地点の中心に位置していることから，テント状の作業小屋の関連施設であった可能性がある。炭化物集中については2号炭化物集中部で直下に径30cm，深さ20cm程度の土壙が多数重なりあって検出され，覆土中に比較的大形の炭化物がみられることから燃料材の廃材を廃棄したものと考えられる。砕片集中については，ほとんどが尖頭器類の素材として用いられる安山岩の長さ2cm以下の微細な砕片であることから，この地点が本集中部では尖頭器類の製作が行われた地点あるいは製作の際に飛散した砕片を廃棄した地点であると考えられる。土器集中については，集中に粗密があり，小破片のみであることや周囲から遺物が出土していないことから土器の廃棄場所と考えられる。また，3ケ所検出された礫集中のうち，1号礫集中については，土器の煮炊きの際，五徳として用いられた可能性のある一端が明瞭に赤化した棒状礫で構成されていることや炭化物集中の脇であることから，この地点で煮炊きが行われた可能性がある。また，有茎尖頭器や打製石斧など石器類の多くが1・2号配石を中心とする約8m×6mの範囲から出土しており，この地点で道具の製作や保守などが行われていたと思われる。

このように，本遺跡では隆線文期の遺物集中部内の遺構群分布から諸活動の場が想定できる。具体的には「作業空間（1・2号配石遺構周辺)」「尖頭器製作空間あるいは砕片廃棄空間（1号砕片集中)」「居住空間（2号住居状遺構)」「煮炊き空間（1号礫集中)」「燃



第２図　南鍛冶山遺跡遺構分布

料材廃棄空間（１・２号炭化物集中)」「土器廃棄空間（１号土器集中)」である。このことは当時は，道具類の製作→使用→片付け・廃棄が同じ場所ではなく，それぞれ決まった場所で行われていたことを意味し，隆線文期には居住地の空間利用に一定の規則があったことを示している。

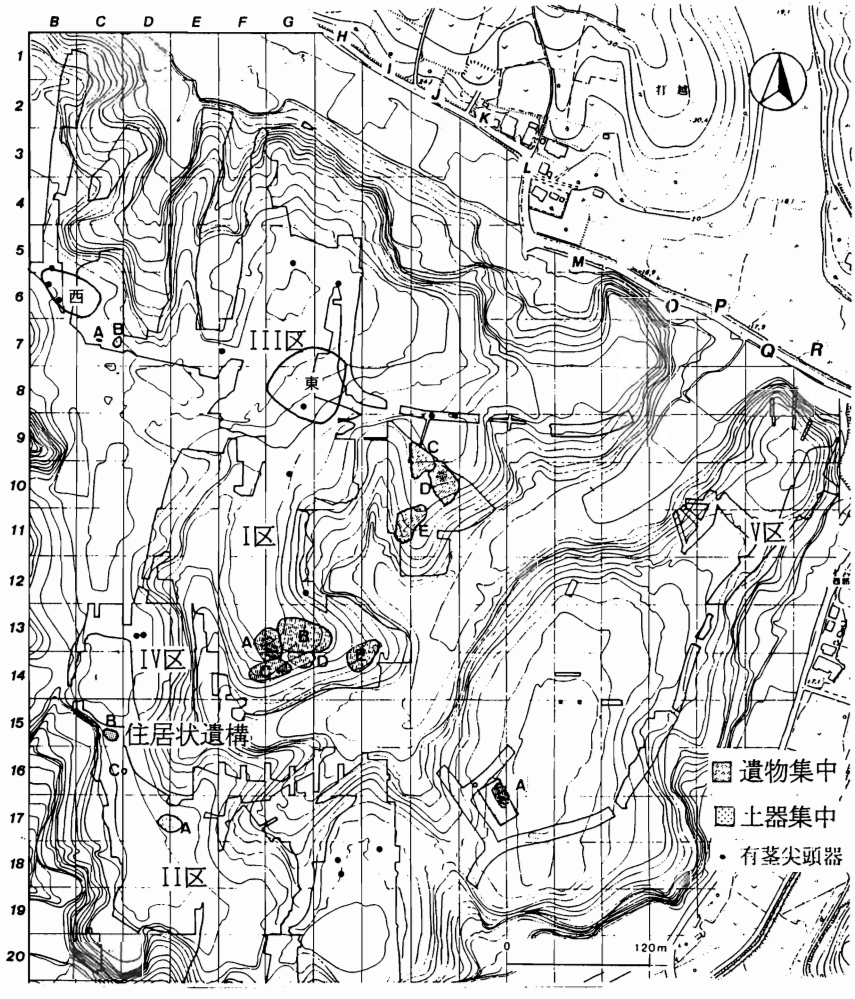
(2)　慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡の遺物集中部のあり方

本遺跡の草創期第２文化層（隆線文期）では，14ケ所の遺物集中部および住居状遺構など多数の遺構群が検出されている。このうち，Ⅰ区ではＡ～Ｅ集中部の5遺物集中部および円形に廻るピット群１ケ所（Ａ遺物集中部）が検出され，Ⅱ区ではＡ～Ｃの３遺物集中部および住居状遺構（Ｂ遺物集中部）と炭化物集中２ケ所（Ａ遺物集中部），Ⅲ区ではＡ～Ｅの５遺物集中部および円形に廻るピット群（Ｃ遺物集中部）が検出されている（慶応義塾 1992)。また，その後２回にわたって追加調査が行われ，Ⅴ区で遺物集中部（Ａ遺物集中部）が新たに検出された（慶応義塾1994)。

このように約12万m²の広範囲にわたる調査が行われた結果，多数の遺物ととも住居状遺構をはじめとする遺構群や多くの遺物集中部が検出された本遺跡は草創期の居住活動や生業活動のあり方を探るうえで貴重なデータを提供する。今回は草創期の遺物集中部の規模や分布構造から遺物集中部の類型化を試み，遺物集中部のあり方について考察してみたい。

第１表　慶応ＳＦＣ遺跡の遺物集中部

集中部	規　模(m)	面積(m²)	遺物数	遺物密度	土器(個体)	狩猟具	他の石器	剥片類	礫	遺　構	分布構造	類型
Ⅰ区A～D	76.1×44.4	2303	547	0.24/m²	74(6)	27(9.4%)	36(12.5%)	224(78.0%)	186	ピット群	重層的	A１
Ⅱ区 A	19.9×13.1	176	113	0.64/m²	0(0)	3(3.8%)	20(25.3%)	56(70.9%)	34	炭化物集中	単層的	B２
B	12.5× 7.5	66	107	1.62/m²	66(4)	1(4.0%)	4(16.0%)	20(80.0%)	16	住居状遺構	重層的	B１
C	5.6× 3.0	10	13	1.30/m²	0(0)	0(0.0%)	3(33.3%)	6(66.7%)	4	な　し	単層的	C２
Ⅲ区A～B	21.1×10.0	136	138	1.01/m²	11(1)	4(6.7%)	10(16.7%)	46(76.7%)	67	な　し	重層的	B１
C～D	55.2×25.2	1980	451	0.22/m²	13(2)	11(7.2%)	24(15.7%)	118(77.1%)	285	ピット群	重層的	A１
E	36.5×19.9	470	34	0.07/m²	0(0)	4(28.6%)	5(35.7%)	5(35.7%)	20	な　し	単層的	D２
Ⅲ区西側	64.1×32.4	1387	27	0.02/m²	0(0)	3(11.1%)	4(14.8%)	20(74.1%)	0	な　し	単層的	D２
Ⅲ区東側	65.3×63.5	2497	26	0.01/m²	0(0)	4(15.4%)	5(19.2%)	17(65.4%)	0	な　し	単層的	D２
Ⅴ区 A	17.1×11.4	121	119	0.98/m²	42(3)	10(13.7%)	2(2.7%)	61(83.6%)	4	な　し	重層的	B１
集中部外	－	117000	63	0.0005/m²	5(1)	16(30.8%)	15(28.8%)	21(40.4%)	6	な　し	－	E２



第３図　慶応ＳＦＣ遺跡の遺物集中部分布

なお，草創期第２文化層の遺物集中部については，報文では視覚的なまとまりで区分したが，今回は遺物集中部の分布状況や遺物の接合状態を再検討し，同一集団が残した可能性が高い遺物集中部はまとめて取り扱うこととした。具体的には，Ⅰ区Ａ～Ｄ集中部[5]，Ⅲ区Ａ・Ｂ集中部，Ｃ・Ｄ集中部は一つのまとまりとして扱った。さらに，報文では遺物集中部と認定しなかったが，遺物集中部外の中でも集中度は低いが遺物が集中する地点がⅢ区に２ケ所（Ⅲ区西集中部，東集中部）存在するため，今回はこれらも分析対象とし，有茎尖頭器などが単独出土した遺物集中部外についても議論の対象とした。また，追加調査により検出されたⅤ区のＡ遺物集中部の事例も追加した（第３図，第１表）。

まず，遺物集中部の類型化を行うにあたり，これら８ケ所の遺物集中部および遺物集中部外について，遺物集中部の面積と遺物密度の比較を行った。その結果，遺物集中部外も含め次の５つに分類することができた（第４図左下）。

Ａ類：面積が2000m²程度と大規模であるが遺物密度は0.2個／m²程度と低い（Ⅰ区Ａ～Ｄ遺物集中部，Ⅲ区Ｃ・Ｄ遺物集中部）

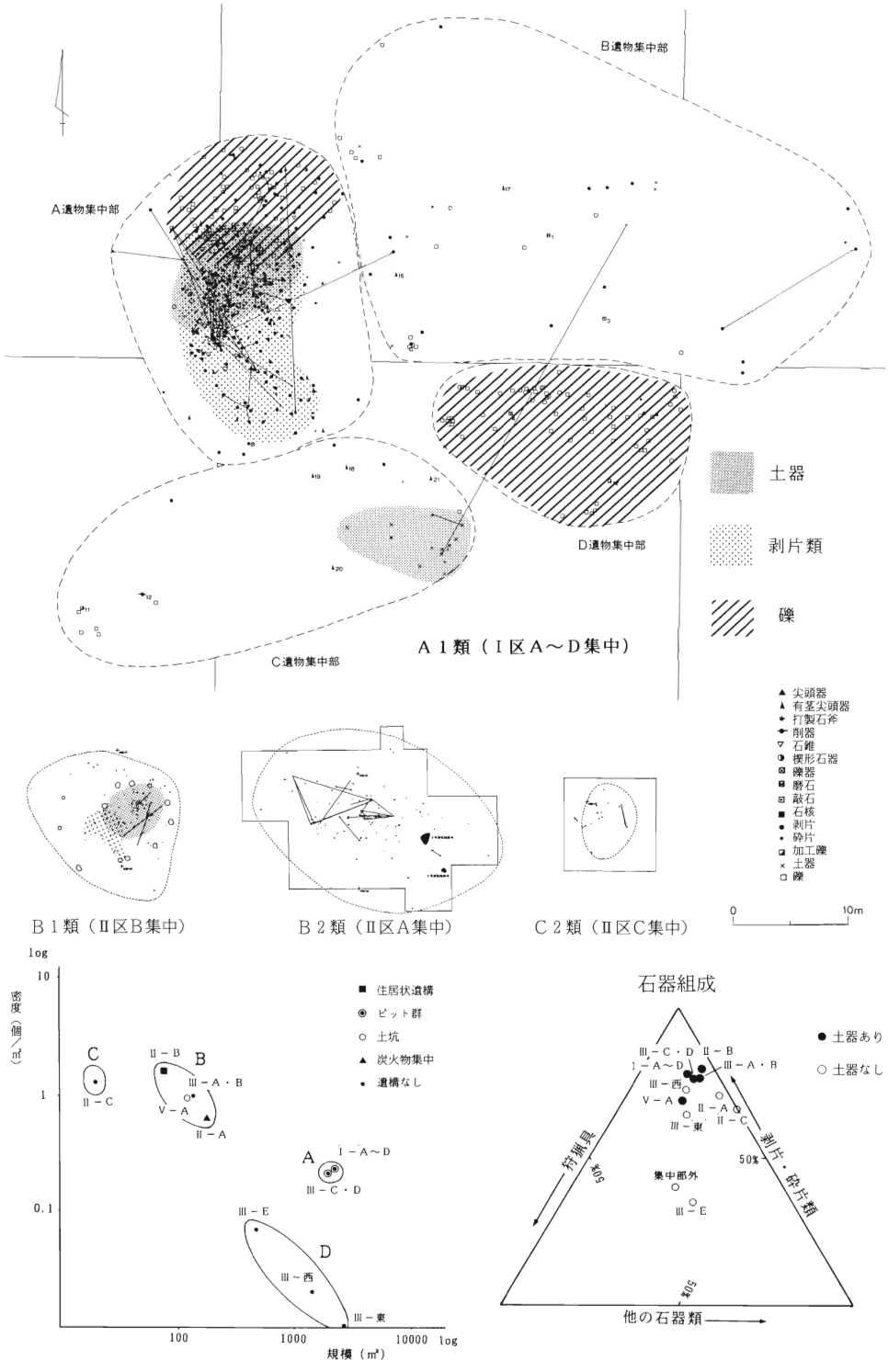
Ｂ類：面積が100m²～200m²程度と中規模であるが遺物密度は1個／m²前後と高い（Ⅱ区Ａ遺物集中部，Ｂ遺物集中部（住居状遺構），Ⅲ区Ａ・Ｂ遺物集中部，Ⅴ区Ａ遺物集中部）

Ｃ類：面積が20m²程度と小規模であるが遺物密度は1個／m²程度と高い（Ⅱ区Ｃ遺物集中部）

Ｄ類：面積が500m²～2500m²程度と大規模であるが，遺物密度は0.1個／m²未満とかなり低い（Ⅲ区Ｅ遺物集中部，西遺物集中部，東遺物集中部）

Ｅ類：遺物密度は0.0005個／m²と極端に低い（遺物集中部外）

また，遺物集中部内の遺物の分布状況について詳細に検討すると，遺物集中部内に土器や石器類がまとまって分布している事例があることがわかる。このような遺物集中部内の分布構造は，重層的・単層的として類型化することができる。ここで重層的（１類）とは遺物集中部内部にさらに土器・石器・剥片・礫のまとまりが存在し，分布が二重構造を呈している場合である。具体的にはⅠ区Ａ～Ｄ遺物集中部，Ⅲ区Ｃ・Ｄ遺物集中部，Ⅱ区Ｂ遺物集中部（住居状遺構），Ⅲ区Ａ・Ｂ遺物集中部，Ⅴ区Ａ遺物集中部がこれにあたる。これに対し，単層的（２類）とは遺物集中部内に遺物の種類による特定のまとまりがみられず，全体的にランダムに遺物が分布している場合である。具体的にはⅡ区Ａ遺物集中部，Ⅱ区Ｃ遺物集中部，Ⅲ区Ｅ遺物集中部，西遺物集中部，東遺物集中部がこれにあたる。以上の遺物集中部の類型の組み合わせによって本遺跡の遺物集中部はＡ１類，Ｂ１類，Ｂ２類，Ｃ２類，Ｄ２類，Ｅ２類の６類型に分類できる（第４図上，第２表）。



第４図　慶応ＳＦＣ遺跡の遺物集中部類型

第２表　慶応ＳＦＣ遺跡の遺物集中部類型

類型	規模	密度	分布構造	遺　構	居住	土器	石器製作	性　格	事　例
Ａ１	大	中	重層的	ピット群	○	○	◎	居住地	Ⅰ区Ａ～Ｄ集中部、Ⅲ区Ｃ～Ｄ集中部
Ｂ１	中	高	重層的	住居状遺構	○	○	○	居住地	Ⅱ区Ｂ集中部、Ⅲ区Ａ・Ｂ集中部、Ⅴ区Ａ集中部
Ｂ２	中	高	単層的	炭化物集中	△	×	○	居住・野営地	Ⅱ区Ａ集中部
Ｃ２	小	高	単層的	な　し	×	×	◎	石器製作址	Ⅱ区Ｃ集中部
Ｄ２	大	低	単層的	な　し	×	×	△	野営地	Ⅲ区Ｅ集中部、Ⅲ区西側集中部、Ⅲ区東集中部
Ｅ２	―	散漫	単層的	な　し	×	×	×	狩猟地	遺物集中部外

次に，このような遺物集中部の類型と他の諸属性との関係について検討してみたい。まず，遺構の検出状況について検討すると，Ａ１類ではⅠ区Ａ～Ｄ遺物集中部，Ⅲ区Ｃ・Ｄ遺物集中部でともにピット群，Ｂ１類ではⅡ区Ｂ遺物集中部で住居状遺構，Ｂ２類ではⅡ区Ａ遺物集中部で炭化物集中が２ケ所検出されている。隆線文土器の出土状況をみると，隆線文土器が出土している遺物集中部は５ケ所あり，Ａ１類ではⅠ区Ａ～Ｄ遺物集中部（６個体74点），Ⅲ区Ｃ・Ｄ遺物集中部（２個体13点），Ｂ１類ではⅡ区Ｂ遺物集中部（４個体66点），Ⅲ区Ａ・Ｂ遺物集中部（１個体11点），Ⅴ区Ａ遺物集中部（３個体42点）である。遺物集中部内の石器組成については，石器群を狩猟具（尖頭器・有茎尖頭器・削器），他の石器類（打製石斧・磨石・礫器など），剥片・砕片類に区分してグラフ化した結果，遺物集中部の石器組成はおおまかに以下のように分類できる（第４図右下）。

イ：狩猟具の比率がとくに高く，剥片・砕片類の比率が低い遺物集中部（Ⅲ区Ｅ遺物集中部，遺物集中部外）

ロ：狩猟具および剥片・砕片類の比率がやや高い遺物集中部（Ⅲ区東遺物集中部，西遺物集中部，Ⅴ区Ａ遺物集中部）

ハ：剥片・砕片の比率が高い遺物集中部（Ⅰ区Ａ～Ｄ遺物集中部，Ⅱ区Ｂ遺物集中部，Ⅲ区Ａ～Ｂ遺物集中部，Ｃ～Ｄ遺物集中部）

ニ：狩猟具がほとんどみられない遺物集中部（Ⅱ区Ａ遺物集中部，Ｃ遺物集中部）

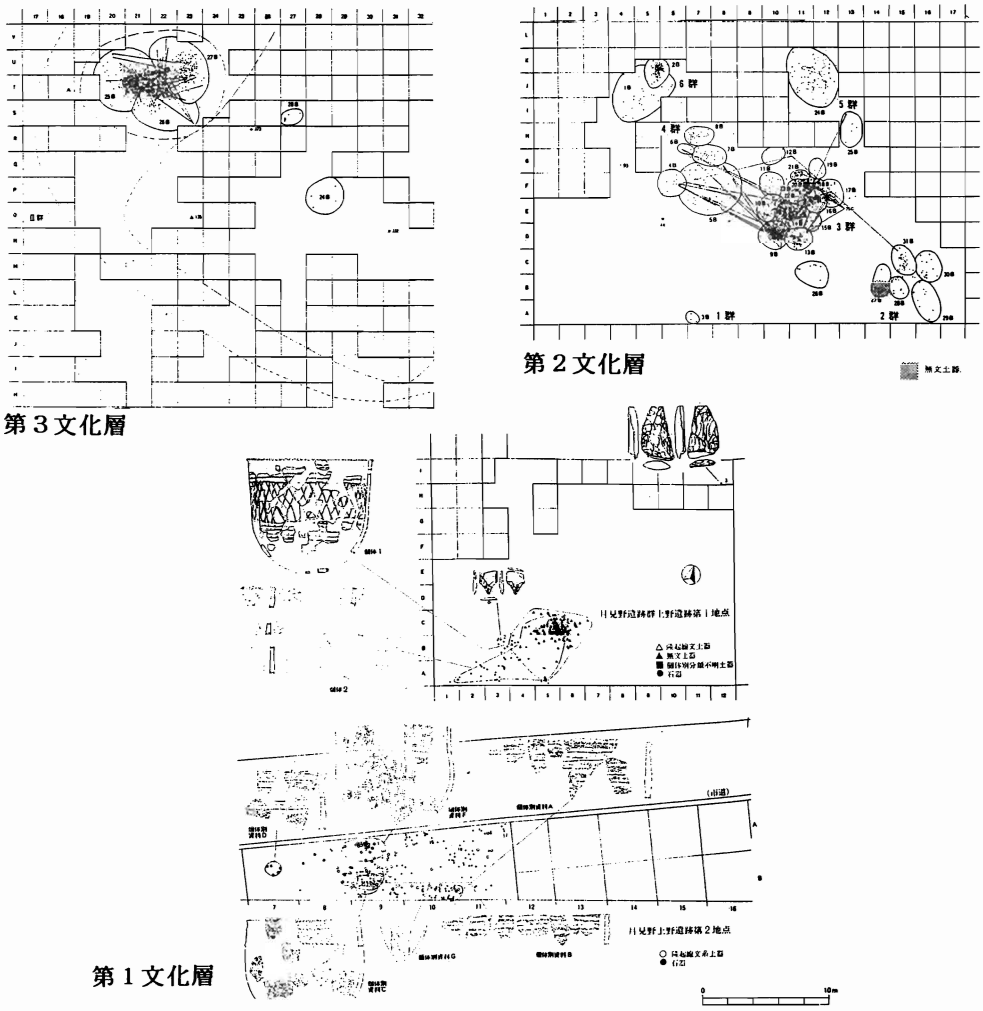
また，有茎尖頭器の遺存状態をみると完形品が多い遺物集中部としてⅠ区Ａ～Ｄ遺物集中部，Ⅲ区Ｃ・Ｄ遺物集中部があげられる。これらの遺物集中部では未成品の比率も高いことから尖頭器類の製作が行われていたと考えられる。これに対し，遺物集中部外では先端部が欠損したものや先端部と茎部の両端が欠損したものが多く，これらは狩猟の際破損したものをそのまま廃棄した結果であると思われる（桜井1993c）。

このような慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡における遺物集中部類型と他の諸属性との比較により，Ａ１類は拠点的で規模の大きな居住地，Ｂ１類は規模のやや小さな居住地，Ｂ２類は規模のやや小さな居住地あるいは野営地，Ｃ２類は石器製作地，Ｄ２類は野営地，Ｅ２類は狩猟地という遺物集中部の性格づけができる（第２表）。

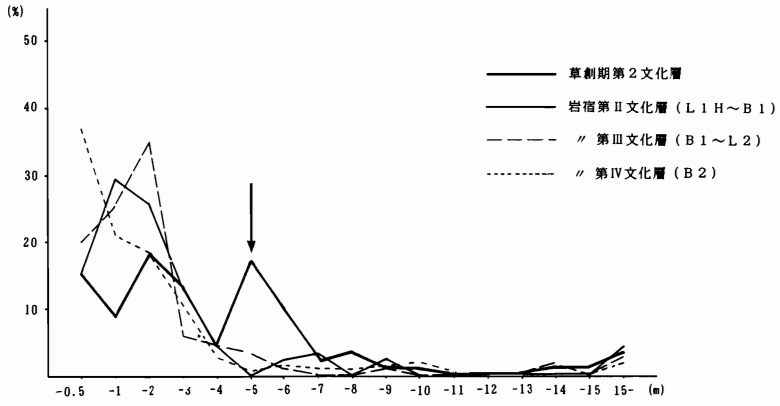
(3) 遺物の分布と接合距離にみる居住地内の廃棄行動

既に述べた南鍛冶山遺跡の事例にみられるように，隆線文期には居住地内での空間利用に一定の規則があったと思われる。このことは，同時に居住地の内部が住居に代表される「居住空間」，石器の製作や保守といった作業を行なう「作業空間」や燃料材の燃えカス，壊れた土器や石器製作の際の生じる砕片などを廃棄する「廃棄空間」におおまかに区分できることを意味している。なかでも燃料材の廃棄行動に関しては，炭化物集中の検出状況から打製石斧で穴を掘り，燃えカスをその都度廃棄していた可能性が高く，当時の人々の防火に対する意識の高さがみてとれる。また，竪穴状の住居状遺構の存在も含め，この時期に地面を掘るという行為が居住活動の中で一定のウェイトを占めていたと推定される点も見逃せない。

このような隆線文期の居住地内の廃棄行動について評価するため，ここでは居住地内の遺物分布状況に関して，前段階の旧石器（岩宿）時代や草創期前半期の状況と比較することにより，検討してみたい。比較検討の材料としては大和市上野遺跡の第１～３文化層の事例を用い，遺物分布図を同一縮尺で並べて遺物分布パターンの比較を行った（第５図)。これをみると，第３文化層（細石刃文化期）と第２文化層（草創期前半期）の遺物分布パターンや遺物の接合状態はよく似ているが，第１文化層（隆線文期）とは遺物の分布状況が明らかに異なっていることがわかる。つまり，第２・３文化層では石器製作地点と思われる複数の地点に明確な遺物の集中がみられ，それらが一定間隔で分布しているのに対し，第１文化層では前者に比べ集中度が低く全体として一つの集中部を形成しており，内部に隆線文土器や特定の石器・剥片などの集中する箇所がみられることがわかる。次に，遺物の接合距離という視点から検討してみたい。慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡の旧石器（岩宿）時代と隆線文期の石器や礫の接合資料について，縦軸に頻度（パーセント)，横軸に接合距離を設定したグラフを作成した（第６図)。その結果，旧石器（岩宿）時代のグラフはいずれも接合距離２m以下で接合する資料がほとんどで，２m以上になると接合例は急激に低下する。これに対し，隆線文期のグラフは弱い双峰形を呈し，接合距離２m以下と接合距離４～５m（矢印）にピークを持つことがわかった[(6)]。これらの分析結果は，旧石器（岩宿）時代や草創期前半期と隆線文期で居住地の空間利用のあり方に違いがみられることを示している。隆線文期以前は一部の製作した石器や石核は石器製作地点から外に持ち出され，使用されるものの，殆どの剥片・砕片類は石器製作地点にそのまま残されるため，遺物の集中箇所が明瞭で接合距離が近距離に集中している。これに対し，隆線文期の場合は４～５m移動して石器や礫の使用や再加工が行われ，剥片・砕片類も石器製作地点にそのまま残されるとは限らず，邪魔な場合は決まった場所に廃棄するという行為が頻繁に繰り返されたと推定される。このような隆線文期の居住地内の空間利用のあり方は，旧石器（岩宿）時代的というよりもより縄文的なあり方を呈しており，同時に旧石器（岩



第５図　大和市上野遺跡の遺物分布



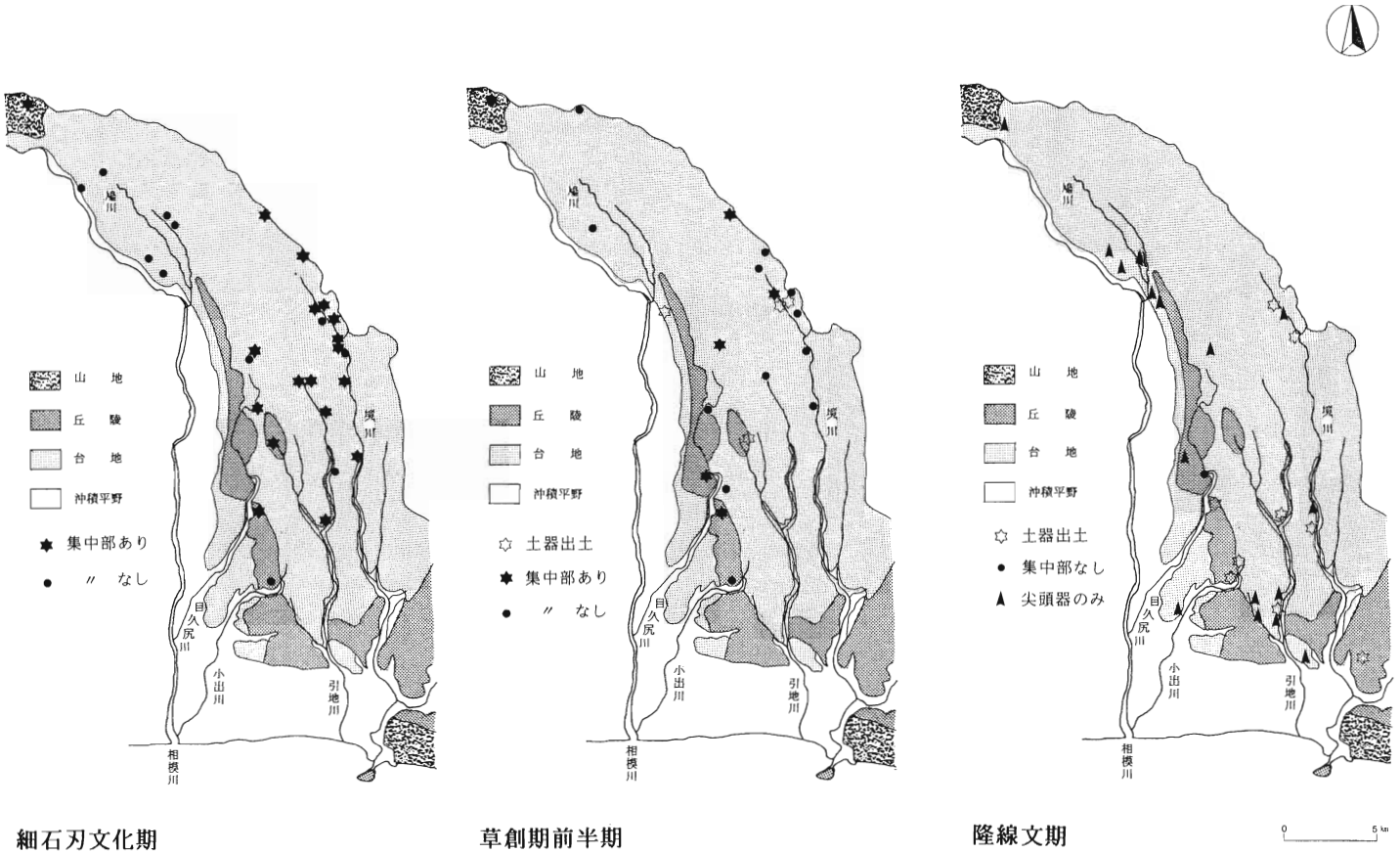
第６図　慶応ＳＦＣ遺跡の遺物接合距離

宿）時代から縄文時代へと移行する過渡期にあたる隆線文期の特徴を示しているといえる。

4．草創期遺跡の分布と立地

前項までは住居状遺構などの遺構群や遺物集中部のあり方について検討してきたが，ここでは遺跡の分布や立地について検討してみたい。まず，細石刃文化期から隆線文期に至る相模野地域の遺跡分布状況について細石刃文化期，草創期前半期，隆線文期にわけての遺跡分布図を作成した（第7図[7]）。これらを個別にみてゆくと細石刃文化期には相模野台地北部～中央部の大和市から相模原市にかけての地域に遺跡が集中し，相模野台地中央部付近に石器集中部を伴うやや規模の大きな遺跡が集中している。草創期前半期では，遺跡数はやや減少するが遺跡の分布域は細石刃文化期と大きく変わっていない。ところが隆線文期になると，遺跡の分布域が大和市北部および相模原市の相模野台地中央部と藤沢市を中心とする相模野台地南部から高座丘陵にかけての地域に分割される。水系別にみてゆくと，細石刃文化期や草創期前半期には境川，引地川，目久尻川，鳩川などの上流部および境川支流の目黒川に遺跡が集中している。隆線文期には相模野台地北部や中央部では目黒川および鳩川に遺跡が分布し，相模野台地南部から高座丘陵にかけては境川下流部，引地川中・下流部，小出川・目久尻川上流部に遺跡が分布している。このうち，後者の地域では細石刃文化期や草創期前半期には遺跡が少なかったにも関わらず，隆線文期に遺跡が急激に増加している。また，隆線文期の遺跡分布の特徴として，遺物集中部が形成され隆線文土器が出土している遺跡と尖頭器類のみが少量出土している遺跡がある程度地域的にまとまって分布していることがあげられる。このように，遺跡の分布傾向を視覚的に捉えると細石刃文化期から隆線文期にかけて遺跡の分布に変化がみられることが予想できるが，地形区分別に遺跡数を集計してみたところ，丘陵地に立地する遺跡の比率が徐々に増加していることがわかった（第3表）。この傾向は草創期になって人々が相模野台地の小河川沿いから丘陵地へと進出した結果であると解釈できる。さらに，河川単位[8]の遺跡数を集計したところ，細石刃文化期には境川を中心に引地川流域や目久尻川流域に遺跡が集中しているのに対し，隆線文期になると各河川の流域に遺跡が分散していることがわかる（第4表）。

以上の分析結果をまとめると，遺跡の分布や立地に関しては細石刃文化期には相模野台地中央部の小河川沿いに遺跡が〝線的〟に分布していたものが，隆線文期になると相模野台地南部や丘陵地に進出することにより遺跡が〝面的〟に分布するようになってきたことがわかった。この傾向は旧石器（岩宿）時代には小河川の上流域で頻繁に移動を繰り返していた集団が，隆線文期になると一定の領域を占有し，居住地，野営地，狩猟地などのセツルメントシステムを形成する生活様式へと変化していったことを意味するものである。



細石刃文化期　　**草創期前半期**　　**隆線文期**

第７図　相模野地域の旧石器時代終末～草創期の遺跡分布

第3表　相模野地域の地形区分別遺跡数

地形区分	細石刃期	草創期前半期	隆線文期	合　計
台　地	28(87.5%)	17(77.3%)	20(76.9%)	65(81.3%)
丘　陵	3(9.4%)	4(18.2%)	6(23.1%)	13(16.3%)
山　地	1(3.1%)	1(4.5%)	0(0.0%)	2(2.5%)
計	32(100.0%)	22(100.0%)	26(100.0%)	80(100.1%)

第4表　相模野地域の主要河川と遺跡数

河川名	長さ(km)	総延長(km)	水流数	水流数／長さ	河川次数	細石刃期	草創期前半期	隆線文期
境　川	49.7	88.9	13	0.26	3	15(46.9%)	12(54.5%)	6(21.4%)
引地川	21.0	41.4	7	0.33	3	7(21.9%)	2(9.1%)	7(25.0%)
小出川	10.8	16.7	5	0.46	2	1(3.1%)	1(4.5%)	6(21.4%)
目久尻川	19.4	24.8	3	0.15	2	4(12.5%)	5(22.7%)	4(14.3%)
鳩　川	19.8	29.8	3	0.15	2	3(9.4%)	1(4.5%)	3(10.7%)
八瀬川	6.2	6.2	1	0.16	1	2(6.3%)	1(4.5%)	2(7.1%)

5．おわりに —隆線文期の位置づけをめぐって—

以上述べてきたように，草創期の遺構や遺跡のあり方を検討すると，隆線文期が旧石器（岩宿）時代から縄文時代への過渡期にあたることがわかる。このうち，住居状遺構については旧石器（岩宿）時代には確実な事例は少ないのに対し，草創期になると住居状遺構の検出例が増加する。住居の形態は，当初ピットの廻るタイプの住居と竪穴住居が並存するが，爪形文・多縄文期になると竪穴住居に統一されるようである。また，慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡や南鍛冶山遺跡の事例にみられるように，隆線文期になると一定の領域の中で「拠点的居住地」，「居住地」，「野営地」，「狩猟地」などで構成されるセツルメントシステムが形成され，居住地内の空間利用に一定の規則がみられることも指摘できる。このことは，従来遊動的で旧石器（岩宿）時代の生活の延長として捉えられていた草創期の生活が一定の領域をもったより定着性の強いものであったことを暗示している。また，今回は詳しく検討できなかったが，隆線文期に後続する爪形文・多縄文期の時期には複数の住居からなる集落が存在すること，有茎尖頭器が激減し，石鏃が多量に出土すること，石器組成に占める石皿や磨石の割合が増加することなど，定住化や植物の積極的利用などの縄文的要素がより強く見受けられる。その意味でも隆線文期は旧石器（岩宿）時代から縄文時代へと変化してゆく中で過渡期として位置づけられる。

次に，狩猟採集民の民族誌との比較から草創期の居住活動について若干考えてみたい。ビンフォードによると，狩猟採集民はフォレジャー型の民族とコレクター型の民族に区分されるとしている（Binford 1980）。フォレジャー（Forager）型の狩猟採集民とは食料を獲得するために居住地を点々と移動させるタイプの狩猟採集民でブッシュマンやオーストラリア・アボリジニなどがあげられる。これに対し，一定の領域の中に拠点的な集落が

あり，その周囲に移動キャンプを設け，食料獲得活動を行うものがコレクター型（Collector）の狩猟採集民でカルフォルニア・インディアンやアイヌ，エスキモーなどがあげられる。また，フォレジャー型の狩猟採集民は食料の保存がみられないのに対し，コレクター型の狩猟採集民は貯蔵施設を持ち，豊富な食料資源を季節ごとに効率的に獲得することが強調されている。これを相模野地域の隆線文期の遺跡にあてはめてみると，住居状遺構などの居住施設や土坑などの貯蔵施設をはじめ様々な遺構群が存在し，居住地の空間利用に一定の規則がみられること，一定の領域を占有したセツルメントシステムが形成されていたと考えられることから相模野地域の隆線文期がフォレジャー型からコレクター型への過渡期として位置づけられる可能性がある。

最後に，このような居住活動の背景となる当時の生業活動について若干触れてみたい。縄文時代草創期には最終氷期以降の気候の温暖化とそれに伴う動植物相の変化によって，一部の種類を除き大型獣が絶滅し，狩猟対象獣がニホンジカやイノシシなど縄文的な動物相へと変化した時期にあたる。相模野地域での遺跡立地の変化，つまり隆線文期における丘陵地への進出の原因として，低地に近い丘陵地に棲息するイノシシの棲息環境（千葉1969・77）が関連している可能性が考えられる。その背景には，狩猟活動が生業活動の中心的役割を果たしていたことがあげられ，狩猟具とされる尖頭器類の出土数が多く，植物加工具とされる石皿や磨石の出土数が少ないというこの時期の石器組成のあり方がそれを裏付けている。いずれにしろ，今後は地域ごとに地形の起伏量（桜井1993b）の分析を行い，後氷期の動物の棲息域と微地形との関連等についても検討してゆく必要がある。また，草創期は狩猟活動のみでなく，既に細石刃文化期に一部行われていたとされる内水面漁撈，土器の普及・石皿や磨石の増加により利用頻度が高まったとされる植物採集活動など，生業活動の多様化がみられる時期とされており，狩猟以外の生業活動にも注意を向けるべきである。

いずれにしろ，草創期は狩猟を中心とした遊動生活を送っていた旧石器（岩宿）時代的生活様式から縄文的生活様式への転換期にあたる。このことは生業活動や居住活動の多様化，領域やセツルメントシステムの成立，石器製作等の専業集団の発生により説明できるが，その中で隆線文期が重要な位置を占めてくることは明らかであり，今後積極的に評価されてゆく必要がある。

本稿は平成５年に開催された湘南考古学同好会主催のシンポジウム『藤沢の縄文時代草創期を考える会』における発表内容を骨子として，新たに分析事例を追加してまとめたものである。本稿作成にあたっては，次の諸氏・諸機関に御指導・御協力頂きました。感謝致します。岡本孝之，加藤信夫，川口徳治朗，小林謙一，坂本　彰，白石浩之，寺田兼方，戸田哲也，村澤正弘，村田文夫，望月　芳，湘南考古学同好会。

註

(1) 本稿では旧石器（岩宿）時代終末の細石刃文化期から縄文時代草創期にかけての時期について検討対象とするが，縄文時代草創期を隆線文土器以前（草創期前半期），隆線文土器を伴う時期（隆線文期），爪形文・多縄文土器を伴う時期（爪形文・多縄文期）の３期に区分して議論することとする。ただし，相模野地域では爪形文・多縄文期の遺跡は僅かであり，遺跡論や分布論を展開することは難しいため，隆線文期を議論の中心とする。

(2) 南鍛冶山遺跡の草創期1号遺物集中部は遺跡の南西部に位置するが，縄文時代草創期以降，奈良・平安時代に至るまで他の遺構や遺物は検出されていない。これに対し，他の多くの草創期遺跡が上層に縄文時代早期以降の遺物や遺構を包含するため，石鏃など遺物の帰属時期が不明確になりがちである。また，本遺跡で多数の遺構が検出された理由の一つとして，居住集団が比較的小集団でこの地点への居住が繰り返されなかったことがあげられる。

(3) より不明瞭な事例であるがＶ区のＡ遺物集中部でも弧状に分布するピット群が存在する。また，Ⅲ区Ａ遺物集中部では弧状に配置されていた大形礫が存在しており，内部に隆線文土器片１個体が分布している。いずれも居住に関連する施設である可能性が残されている。

(4) 住居状遺構にみられる規模や構造の違いには時期的な差異以外にも拠点的居住地，一時的居住地，野営地といったセツルメントの性格や夏家・冬家といった季節による要因も考慮されなければならない。また，今回は触れられなかったが，土坑など住居状遺構以外の遺構についても今後検討してゆく必要がある。草創期において検出されている住居状遺構以外の遺構としては土坑や配石遺構，さらには礫集中（礫群），土器集中，炭化物集中などがあげられる。このうち貯蔵施設として重要な意味を持つ土坑については相模野地域でも勝坂遺跡，柏ケ谷長ヲサ遺跡，代官山遺跡，南葛野遺跡などで検出されている。

(5) Ｉ区Ｅ遺物集中部については神子柴タイプの打製石斧がまとまって出土しており，出土層位もＡ～Ｄ遺物集中部と比べやや下層であることから今回は分析対象外とした。

(6) 同様の傾向は南鍛冶山遺跡でもみられ，隆線文期の接合距離グラフは双峰形を呈し，接合距離１～２ｍと接合距離４～６ｍにピークを持っている（望月1993）。

(7) ここでは神奈川県立埋蔵文化財センター発行の『神奈川県の考古学の諸問題』（旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム1994）の中で集成されている旧石器時代終末から縄文時代草創期の遺跡一覧表をもとに分布図を作成した。

(8) ここでの分析データは，国土地理院発行の２万５千分の1の地形図をもとにしている。諸河川の特徴としては長さでは境川が突出しているが，河川の分岐率をあらわす水流数／長さは小出川や引地川が高い分岐率を示している。また，河川の規模を示す河川次数（桜井1989・1993）では境川と引地川の河川次数は３であり，他の河川の河川次数は２となっている。これらの諸項目は河川漁撈の問題，移動や交易ルートなどを考える上で重要な基礎データとなる。

参考文献

雨宮瑞生　1993「研究展望・縄文時代の定住生活の出現および定住社会に関する史的諸問題」『古文化談叢』第29集，九州古文化研究会

井川文子　1985「狩猟史研究へのアプローチ」『歴史公論』114号

池谷信之・辻本崇夫・高橋敦　1995「駿豆地方縄文時代草創期の居住地について－葛原沢第Ⅳ遺跡の住居址と配石遺構から－」『第61回総会研究発表要旨』日本考古学協会

稲田孝司　1986a 「縄文文化の形成」『岩波講座日本考古学　6 変化と画期』岩波書店
稲田孝司　1986b 「旧石器集団の行動軌跡」『古代史復元　1 旧石器人の生活と集団』講談社
今田遺跡発掘調査団　1992 『今田遺跡発掘調査報告書』
上松町教育委員会　1995 『お宮の森裏遺跡』
柏ケ谷長ヲサ遺跡調査団　1983 『海老名市柏ケ谷長ヲサ遺跡発掘調査概要報告書』
橿原考古学研究所（編）　1994 『一万年前を掘る』吉川弘文館
神奈川県立教育委員会　1980 『寺尾遺跡』
神奈川県立埋蔵文化財センター　1984 『栗原中丸遺跡』
神奈川県立埋蔵文化財センター　1986 『代官山遺跡』
亀井節夫・ウルム氷期以降の生物地理総研グループ　1981 「最終氷期における日本列島の動・植物相」『第四紀研究』20号
河村善也　1985 「最終氷期以降の日本の哺乳動物相の変遷」『月刊地球』72号
河村善也　1992 「哺乳動物相の移り変わり」『科学』62巻4号
旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム　1994 「旧石器時代終末における石器群の諸問題」『神奈川県の考古学の諸問題』神奈川県立埋蔵文化財センター
栗島義明　1989 「旧石器時代住居と遺物分布に就いて（上）」『土曜考古』14号
栗島義明　1995 「縄文文化の成立と技術革新」戸沢充則編『縄文人の時代』新泉社
慶応義塾　1992 『湘南藤沢キャンパス内遺跡　第2巻 岩宿時代・縄文時代Ⅰ部』
慶応義塾　1993 『湘南藤沢キャンパス内遺跡　第1巻 総論』
慶応義塾　1994 『慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡　情報基盤センター（仮称）』
小林謙一　1993 「慶応義塾湘南藤沢キャンパス（ＳＦＣ）遺跡」『藤沢の縄文時代草創期を考える会発表要旨』
埼玉県埋蔵文化財事業団　1985 『大林Ⅰ・Ⅱ，宮林，下南原』
相模原市市道磯部上出口改良事業地内遺跡調査団　1993 『勝坂遺跡』
桜井準也　1989 「遺跡立地と河川次数分析」慶應義塾大学民族学考古学研究室編『考古学の世界』新人物往来社
桜井準也　1993a「細石刃文化遺跡と河川次数―内水面漁撈を考える―」『シンポジウム細石刃文化研究の新たなる展開Ⅱ』佐久考古学会
桜井準也　1993b「縄文時代遺物の平面分布と立地条件」『湘南藤沢キャンパス内遺跡　第1巻 総論』 慶応義塾
桜井準也　1993c「縄文時代草創期前半の有茎尖頭器の平面分布について」『湘南藤沢キャンパス内遺跡　第1巻 総論』慶応義塾
桜井準也　1993d「縄文時代草創期前半の遺跡の在り方－慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡の再検討－」『藤沢の縄文時代草創期を考える会　発表要旨』
佐藤宏之　1992 「北方系削片系細石器石器群と定住化仮説」『法政大学大学院紀要』29号
湘南考古学同好会 1993 『藤沢の縄文時代草創期を考える会　資料・発表要旨』
白石浩之　1994 「縄文時代草創期の集団構造への接近」『縄文時代』第5号
白石浩之・砂田佳弘　1992 「綾瀬市吉岡遺跡群」『第16回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』神奈川県考古学会
鈴木忠司　1983a「旧石器人のイエとムラ」『季刊考古学』4号
鈴木忠司　1983b「日本細石刃文化の地理的背景－先土器時代遺跡論の試み－」『古代学叢論』

鈴木忠司　1993「再論日本細石刃文化の地理的背景－生業論への視点」『論集 日本原史』吉川弘文館
鈴木忠司　1995「岩宿時代のイエとムラ」『1993年度 岩宿大学講義録集 岩宿時代を知る』笠懸町教育委員会
鈴木道之助　1972「縄文時代草創期初頭の狩猟活動」『考古学ジャーナル』76号
諏訪間　順　1988「相模野台地における先土器時代石器群について」『神奈川考古』24号
千葉徳爾　1969「野獣の分布と生態」『狩猟伝承研究』風間書房
千葉徳爾　1977「狩猟伝承の基礎条件－野生動物の生態と分布－」『狩猟伝承研究後編』風間書房
Testart, Alain 1982 The Significicance of Food Storage among Hunters and Gathers: Residence Pattern, Population Densities, and Social Inequalities. Current Anthropology vol.23
東京外かく環状道路練馬地区遺跡調査会 1993『もみじ山遺跡』
西田正規　1986『定住革命－遊動と定住の人類史』新曜社
羽生淳子　1990「縄文時代の集落研究と狩猟・採集民研究との接点」『物質文化』53号
原田昌幸　1983「撚糸文期の竪穴住居跡」『土曜考古』7号
原田昌幸　1984「続撚糸文期の竪穴住居跡」『土曜考古』8号
原田昌幸　1988「縄文時代の竪穴住居跡－その出現・普及の画期を認識する－」『月刊文化財』昭和63年2月号
Binford,L.R. 1980 Willow Smoke and Dog's Tails:Hunter-Gatherer Settlement Systems and Archaeological Site Formation.American Antiquity vol.45-1
Binford,L.R. 1982 The Archaeology of Place.Journal of Anthropological Archeology vol.1
藤沢市教育委員会　1992『藤沢市文化財調査報告書第28集 縄文時代草創期の藤沢』
藤沢市教育委員会　1994『南鍛冶山遺跡　第1巻草創期』
前田耕地遺跡調査会　1983「秋川市前田耕地遺跡－縄文時代草創期の住居址と石器製作址」『季刊考古学』第4号
南葛野遺跡調査団　1995『南葛野遺跡』
村澤正弘　1989「縄文時代－定住生活の確立と土器文化」『大和市史　1 通史編 原始古代中世』大和市
望月　芳　1993「石川南鍛冶山遺跡」『藤沢の縄文時代草創期を考える会　発表要旨』
安田喜憲　1975「縄文文化成立期の自然環境」『考古学研究』84号
安田喜憲　1980『環境考古学事始』日本放送出版協会
安田喜憲　1982「気候変動」『縄文文化の研究　1 縄文人とその環境』雄山閣
大和市教育委員会　1983『深見諏訪山遺跡』
大和市教育委員会　1986『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』
大和市教育委員会　1988『月見野遺跡群上野遺跡第3地点』
大和市教育委員会　1989『相模野第149遺跡』
大和市教育委員会　1990『長堀北遺跡』
横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会 1995『花見山遺跡』
Lee,R.B. and DeVore(ed.) 1968 Man the Hunter,Aldine Publishing Company

槍　と　土　器

── 都筑における縄文時代草創期の遺跡 ──

坂　本　　彰

はじめに

「都筑（つづき）」とは多摩丘陵を東流する鶴見川流域の古称（『和名抄』）で，およそ横浜市の北部から川崎市の西部に相当する。この地域の宅地開発は1960年代（以下19省略）の後半に大規模となり，その中で原始・古代を主とする多数の遺跡が知られるにいたった。

ここでとりあげる縄文時代草創期についても，70年代の前半まではほとんど不明であった（坂本70）。しかし70年代の後半になると，町田市なすな原（江坂他78）・横浜市花見山（坂本他79）・川崎市黒川東遺跡（稲村他80）が相次いで調査され，この時期の様相がはじめて明らかにされた。開発に伴なう発掘調査は80年代にはいると激増し，横浜市能見堂（小宮他84）・同長津田地区遺跡群（伊丹他88・89）などの資料が追加された。

花見山遺跡の調査を担当した筆者は，昨年ようやく報告書（坂本他95）を刊行したが，いくつかの課題を残してしまった。そのひとつが，鶴見川流域における花見山遺跡の位置付けである。この課題を果たすためには，まず周辺に分布する同時期遺跡の実態を把握する必要がある。ところが地域史的な視点から草創期にふれたものとしては，前掲黒川東遺跡報告中の村田論文があるにすぎない。

そこで小文では，これまでに知られた本地域の遺跡・遺物を整理し，若干の比較検討をこころみることとした。1で月出松遺跡・2で能見堂遺跡その他の資料を紹介し，3でそれらを含めた遺跡・遺物を集成し，4で花見山の背景にふれる。ただし花見山遺跡の資料はここに収めるには余りにも分量が多く，かつ報告書刊行後日も浅いことからすべて割愛した。しかし小文は，すべての面で同報告を前提としている。また本年3月3日，横浜の県政総合センターホールで開催された「考古学講座　かながわの縄文文化の起源を探る」の一環として，同趣旨の発表を行なった（坂本96）。先の花見山報告ともども，合わせて参照していただければ幸いである。

1．月出松遺跡（図1・2）

月出松遺跡は港北ニュータウンの南西部，横浜市都筑区加賀原1丁目8～18（旧緑区佐江戸町・川和町）に存在していた。遺跡の主体は縄文時代中・後期の大規模な集落址で

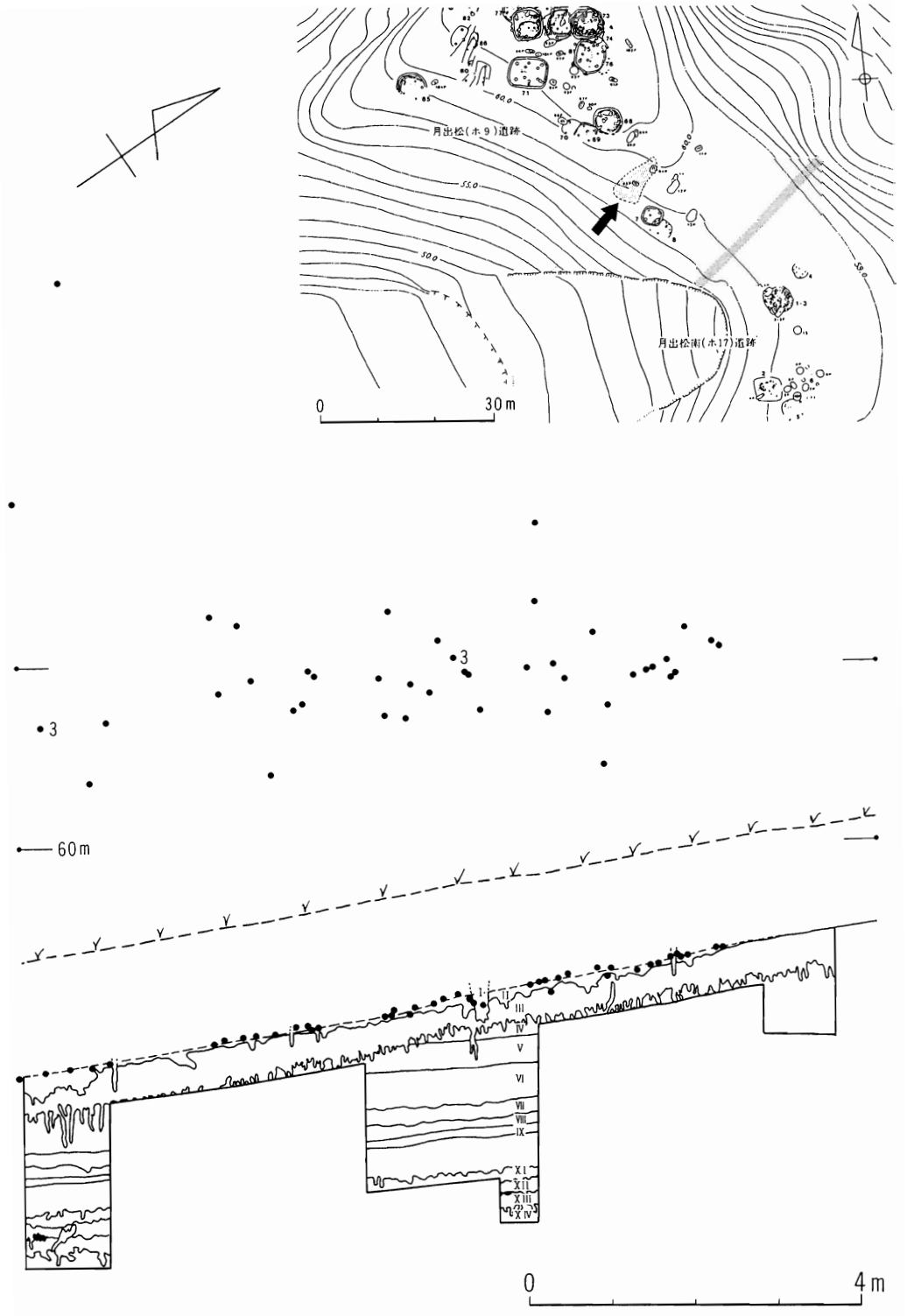


図1　月出松遺跡の土器出土状況

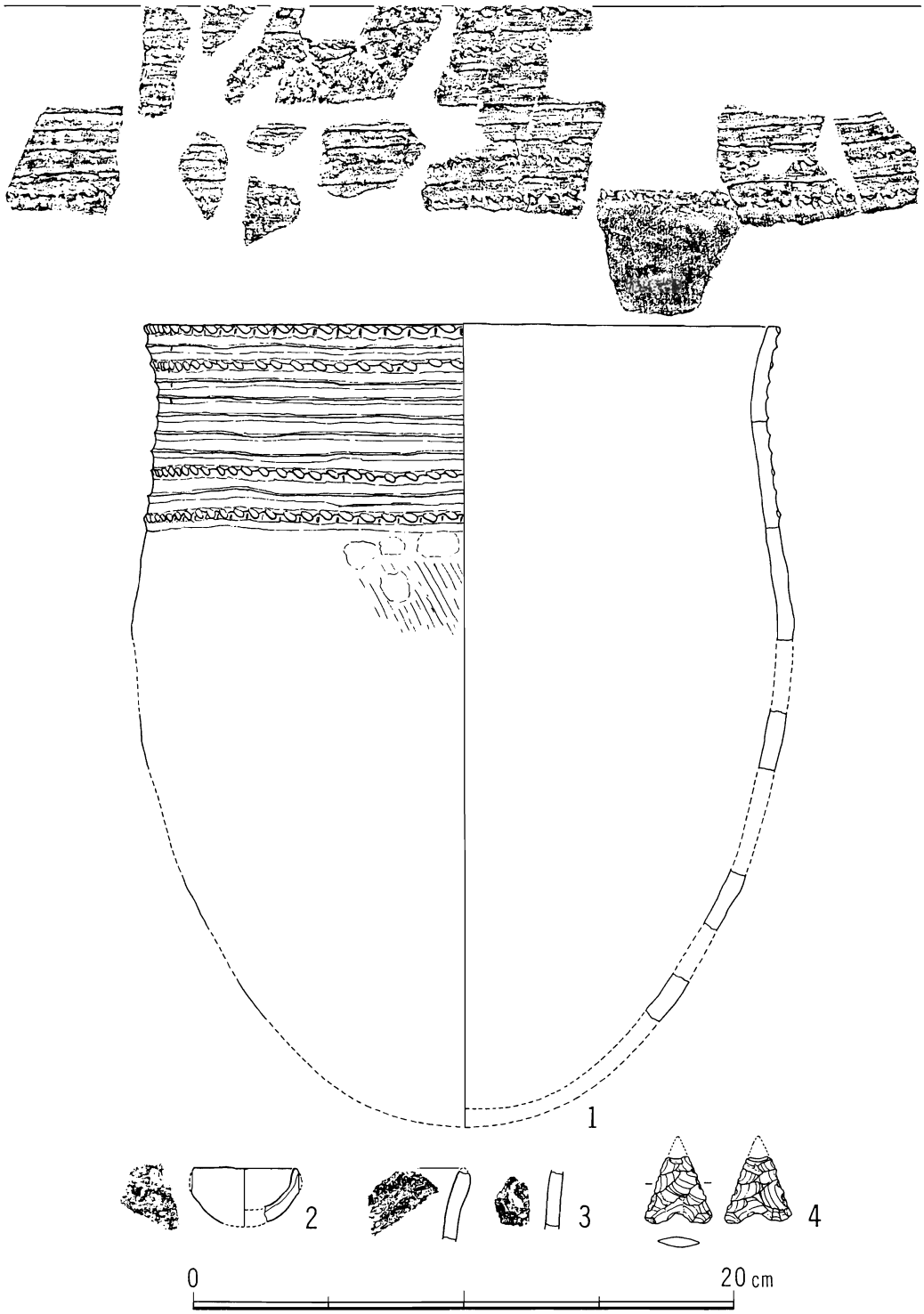


図2　月出松遺跡の土器と石器

(小宮90)，草創期の遺物は遺跡の南端部から出土した。そのうち土器片は分類・接合して復元し，86年３月に開催された「古代のよこはま」展に出品した（坂本86a)。

遺跡は谷本川東岸の標高63mの高位台地上に位置し，南側は池辺町方向から入り込む支谷によって画されている。台地東南部からさらに南へのびる尾根状台地は，縄文時代住居群の東南約30mで最も狭くなる。月出松遺跡の遺構群はこの狭隘部でとぎれ，それより南側が月出松南遺跡となっている。

土器の出土地点は南側住居群と狭隘部との中間，標高59～60m前後の南西向きの斜面最上部である。およそＪ７・８・68～70号住居址，１号炉穴，12・88・89号土坑に囲まれた範囲で，84・85号土坑と重複している。遺物の大半は採集したものだが，土器片の一部は漸移層からソフトローム上部にかけて出土した。それらは東西約９ｍ・南北３ｍの斜面に沿って細長く広がり，あたかも斜面上方から投棄したかのようにみえる。土器片のほとんどは１に属するが，２・３も各１片まじっていた。なお石鏃はやや離れた地点で採集したが，石質からみてこの時期と推定した。

遺物の内訳は，土器が59点，石器が１点である。土器のうちで微隆線をもつ20片と，類似した胎土・焼成の無文18片は，明らかに同一個体であった。他に丸みのある１片と直行する２片は別の個体で，残り18片は判断がむずかしい。したがって３個体あることは確実で，無文小片が別個体としても，全体で数個体にとどまる。

１は口径約４分の１，胴上部約２分の１相当分の破片があり，１片の大きさは４～５cm大以上である。一方胴下半部は２～３cmの小片が多く，まったく接合しなかった。器形は大型の深鉢で，口縁は平縁である。口縁より約３cm下を屈曲点として，浅くくの字状に外反し，以下はゆるくすぼまっていく。底部は丸底としたが，乳房状尖底の可能性もある。胎土は白色粒子を多く，小石・繊維を少し含み，いわゆる獣毛痕はみられない。焼成は堅く良好で，残りのよい表面上半部は黄褐色を呈し，下半は表面が剥離して赤化している。内面は全体的に保存がよくて黄褐色，断面は黒褐色をなす。整形は一辺５～６cm前後の粘土版を貼り合わせたもので，大きさのわりには薄手の作りである。器面は指の指圧痕を残して全体的に凹凸し，表面は右下がり・内面は横方向に指なで調整している。

文様は並行する11条の微隆線が，口縁から7.4cm下までの間に横走している。隆線の間隔は平均６mm前後，高さは１～２mmで，線の上方が急傾斜，下方が緩傾斜をなす。隆線の中間には細く鋭い沈線が横走し，所々にヘラ先による沈線状の浅いくぼみもある。したがってこの隆線は櫛状工具（佐々木73）によらず，上方から１本ずつ押引きされたもので，先端が丸みをもつ工具によっている。工具・砂粒痕の方向はすべて右→左をしめしており，口縁を左側に置いて手前方向に引いたことが想定される。

隆線の１・３・９・11条には，すべて右下がり方向の刺突が加えられている。１・３・11条の刺突は全周するが，９条には施されない部分があるらしい。断面が丸みをもつ棒状

工具で隆線上を連続刺突した結果，はみ出した部分が小波状をなしている。1・11条では波状の山の直下に，先が角となる鋭い刺突を加えている。その1単位は幅1mm，長さ2～3mmの縦長で，2～5・9条の一部にもこの小刺突が施されている。

2は1片のみで，径4cm・厚さ5mm・高さ2.2cm前後の超小型鉢形土器である。表面の一部が剥離し，表面は黄褐色，内・断面は黒褐色をなす。胎土は白色粒子を含み，焼成は良好である。成形は内外2枚の粘土板を貼合わせて押圧し，丸みをつけて作り出している。

3は口縁と胴部が各1片であり，接合しないが同一個体と思われる。器形は口縁部が緩く外反する深鉢形で，厚さ5mm，高さ・径共に10cm以内の小型土器であろう。丸みをもつ口縁端は欠失し，表・内面は黄褐色，断面は黒色をなす。胎土は白色粒子を含み，焼成は良好である。表面に繊維束先端部らしき痕跡が2ヶ所，内面に斜め方向の調整痕がみられる。

4は横長剥片を素材とし，基部に抉りをもつ石鏃で，長さ・幅共に2.5cm，厚さ4mm，重さ2.1gある。本来の長さは3.3cm前後，表面は灰褐色の安山岩製である。

本遺跡の土器は個体数が少ないにもかかわらず，大きさにバラエティがある。1の器形は花見山101・118（坂本他95），山形県日向洞窟（佐々木71），青森県表館(1)遺跡（三浦88）と類似している。容量は約9ℓを計り，花見山1（10ℓ）と102（8ℓ）の中間で，隆線文土器大型品の一代表となろう。一方2の超小型土器は，花見山68・69，大和市上野遺跡第2地点（戸田・相原84）に類例がある。これら大・超小型品の存在は，隆線文土器の時期すでにさまざまな器形が作られていたことの証しである。器形の分化は土器が用途に応じて製作された，すなわち縄文土器が当初からセットとして成立していた可能性を物語っている。また器形や文様の点からみると，1の様相は花見山102・横浜市宮之前（伊丹他88・89）・川崎市栗木Ⅳ（増田他78）にきわめて類似しており，花見山3式に位置付けられる。

本遺跡は能見堂・花見山・なすな原などと異なり，高位台地の斜面上部に形成されていた。剥片や焼土・炭化粒なども見られず，居住の痕跡はきわめて薄い。それにたいして後述の能見堂遺跡では石器が製作されており，居住があったことは明白である。両遺跡は一つの尾根状台地の基部と中間という位置関係にあり，距離はわずか500mにすぎない。また能見堂の土器も花見山3式で，本遺跡と同時期である。こうした状況からみると，本遺跡は能見堂遺跡の居住者によって形成された可能性がある。遺跡の性格としては，一時的立寄地とみるのが妥当であろう。

2．能見堂遺跡と周辺の石器（図3・7）

能見堂遺跡は，横浜市都筑区加賀原2丁目12～18（旧緑区佐江戸町）に存在していた。遺跡の主体は縄文時代前期の集落・弥生時代中期の方形周溝墓群・古墳時代後期の横穴墓

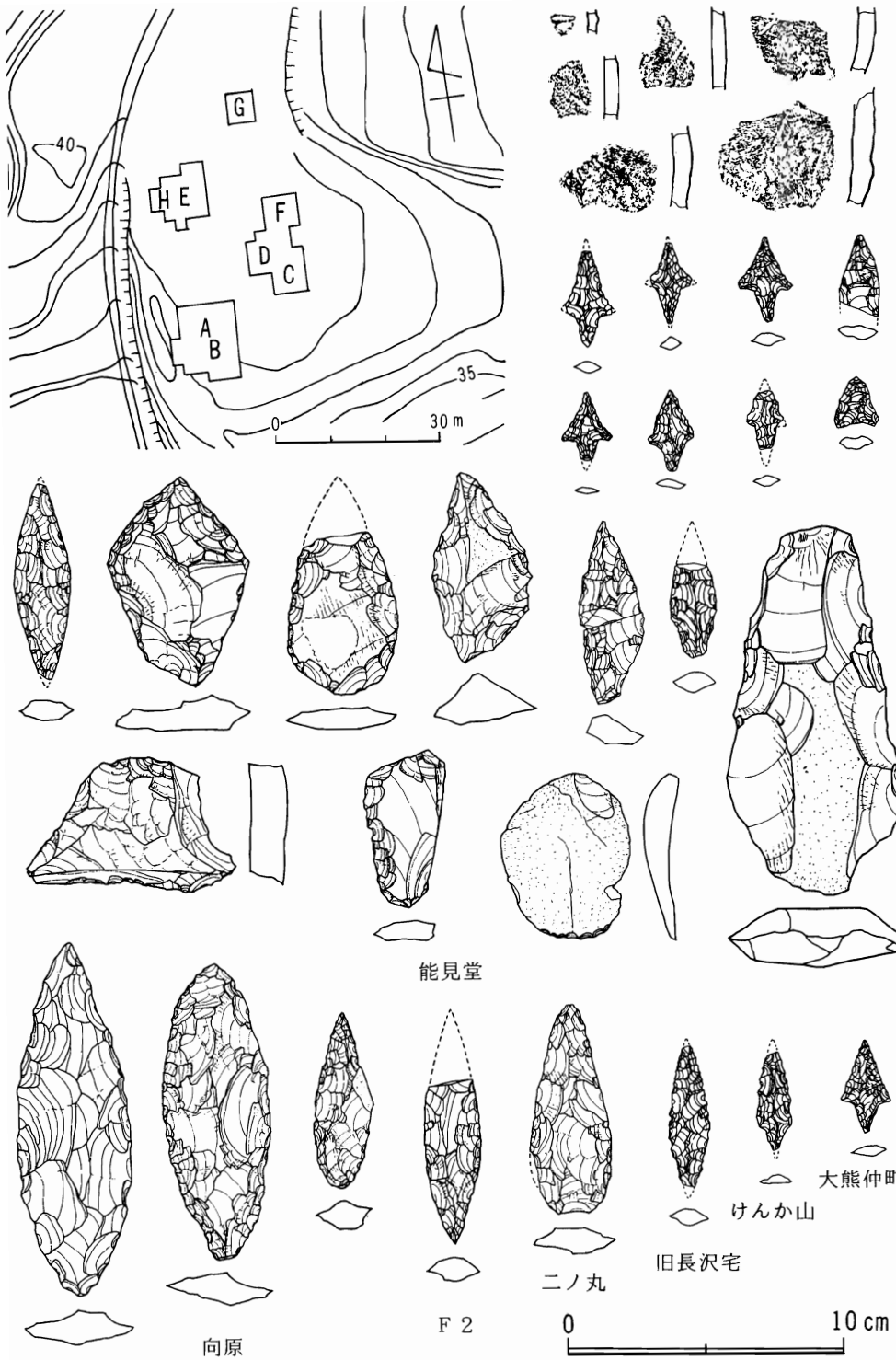


図 3　能見堂及び周辺遺跡の土器と石器

群などで，その概要は既に公表されている（小宮他84)。遺跡は谷本川の東岸にそって南北にのびる台地主脈上に形成され，東から入り込む支谷で南北に二分されている。草創期の遺構と遺物は，標高39mを測る南側台地の中央部に存在していた。

検出された遺物集中地点は８ヶ所（Ａ～Ｈユニット）で，南北約50m・東西約30mの範囲内にある。各ユニットの位置は，南側斜面が始まる所にＡ・Ｂ，中央東南部にＣ・Ｄ・Ｆ，中央西北部にＥ・Ｈ，北側支谷頭部付近にＧである。Ａ・Ｄ・Ｇ・Ｅを結ぶ内側からは発見されず，南北に長いドーナツ状に分布している。層位はいずれもソフトローム上面を主とし，一部はハードローム上部まで及んでいた。各ユニットの遺物分布は径４～５ｍ・厚さ40～50cmの皿状をなしていた。ナイフ形石器が出土したＢ以外の７ユニットは，縄文時代草創期の所産とみられている。またＨユニット内に礫群が１基みとめられた。出土遺物は約2200点を数え，主体は石器・剥片で，土器がわずかに伴なっている。ユニット別にみると，最も少ないのはＦで16点，最も多いのはＥで1030点ある。

石器は尖頭器が主体をなし，器種と数は槍13・刺槍６・鏃２・掻削器４・斧１・残核１などである。槍はいずれも中・小型で，細身のものは丁寧な両面加工がなされ，最大径が中位にあり，一点は逆刺状を呈する。幅広のものは断面厚手と薄手とがあり，前者は左右非対称で，やや粗雑に調整されている。後者は大型剥片の周縁を調整したもので，最も幅広の形態をなす。それ以外に未成品らしきものが２点含まれている。刺槍はいずれも小型で逆刺が発達し，身よりも茎の方が長いものもある。鏃は三角だが基部は浅く凹んでおり花見山とはやや趣を異にし，１点は未製品と思われる。掻削器は主に剥片の側縁部に刃をつけたもので，刃部の厚いものは認められない。斧は先端裏部を調整加工した片刃石斧で磨痕は見られない。残核は一面に自然面を残し，打面は複方向を呈する。

これらの石質はチャートが主で，流紋岩（凝灰岩）・頁岩・ホルンフェルスなどもある。剥片類の大半はせいぜい２～３cmの小型品が多く，それらの石質も類似した構成をなしている。形態もとくに整っていないが，そのうち数10点には部分的な打痕が見られ，不定形の石器ともいえよう。注目すべきは安山岩製で，長さ７～８cmもの比較的大型剥片の存在である。本遺跡の定型石器中には安山岩製品がなく，また花見山の剥片中にもこうした大型品は少ない。したがってこれらの大型剥片の存在は，本遺跡の一特徴と思われる。

土器は表採も含めて約20片出土したが，ほとんど３～４cm未満の小片である。いずれも厚さ５mm前後の薄手で，焼成は堅く良好である。色調は黄褐色で，獣毛痕は認められず，胎土に白色粒子を含んでいる。大半に文様はなく，最も小さい１片にのみ細い微隆線が横走している。個体数は確定できないが，破片の色調などから少なくとも２～３個体はあると思われる。以上の様相からみて，これらの時期は花見山３式に比定しうる。

このように能見堂遺跡は月出松遺跡から南にのびた低位台地上に立地しており，そこでは花見山３式の段階において，槍・刺槍・掻削器などが製作されていた。製作址は４ブロッ

クに分かれており，槍などの様相は花見山とは異なっている。伴出した土器の量もきわめて少なく，ある１時期に限定できる。花見山に比較すれば，より短期の居住址であることは疑いない。なお，本遺跡の整理報告は担当者によって現在進行中であり，この内容は必ずしも最終的なものではない。

その他に港北ニュータウン内では，槍が百崩・七ッ塚・三の丸・八幡山で，刺槍が山田大塚・西ノ谷貝塚・石原・東方13・三の丸で，斧が大塚で出土している（図７）。また向原遺跡ではホルンフェルス・安山岩・流紋岩製の槍３点（図３左より）が，ソフトローム層及び上面から発見されている。いずれも両面加工で中央部付近に最大径をもち，本地域の先土器時代終末期の基準となった。一方Ｆ２遺跡では能見堂に類似した流紋岩製の細身の槍，旧長沢宅遺跡ではそれを一回り小さくしたチャート製の槍，二ノ丸遺跡では基部に最大径をもつ安山岩製の槍，けんか山遺跡では黒色頁岩製の刺槍，大熊仲町遺跡ではチャート製の刺槍がいずれも単独出土している（『全遺跡調査概要』による）。

３．遺跡と遺物の様相（図４～12・表１～３）

鶴見川は町田市小山田町を源とし，横浜市鶴見区で東京湾に流入する。延長42.5km・流域面積235km²の一級河川である（横浜市下水道局河川計画課92）。ここでは鶴見川流域を中心とし，南接する帷子川流域および北接する多摩川南岸域（三沢川以東）をも対象とした。多摩ニュータウンの中核をなす乞田・大栗川流域は，分布図に入る範囲で遺跡の位置を落とした。なお入江川の流域は，便宜上帷子川流域に含めた。遺物集成図は比較的まとまりのある長津田遺跡群・なすな原遺跡を優先し，その後に単独出土品および隣接地域をかかげた。これらと前記『花見山報告』を合わせれば，鶴見川流域および周辺における現段階の先土器時代末～縄文時代草創期の資料はほとんど網羅しえたと思われる。

ここで知られた遺跡数は，鶴見川流域が86ヶ所，多摩川南岸域が30ヶ所，帷子川流域が７ヶ所で，合計123ヶ所となる。それらの分布をみると一様ではなく，港北ニュータウンや鶴見川上流の大・中規模開発地区に集中している。鶴見・帷子川下流の比較的早く市街化した地域，あるいは徐々に開発が進行する多摩川南岸域では分散している。これは分布状況が調査の有無によって左右される事を意味しており，本来の分布は前者の方がより実態に近いことは明らかである。長津田・金井原・川島谷・小山田・黒川地区では舌状台地ごとにそれぞれ１～２ヶ所ずつという稠密ぶりで，これらが一般の在り方とすれば流域全体では数100ヶ所の遺跡があると見なければならない。面積の点からすれば，多摩ニュータウン地域（30km²）では60ヶ所（東京都埋蔵文化財センター92），港北ニュータウン地域（25km²）では約20ヶ所で，１km²につきおよそ1.5ヶ所となる。鶴見川流域丘陵部の面積は約165km²（前掲書）あることから，遺跡総数は250ヶ所前後と想定される。したがって現在

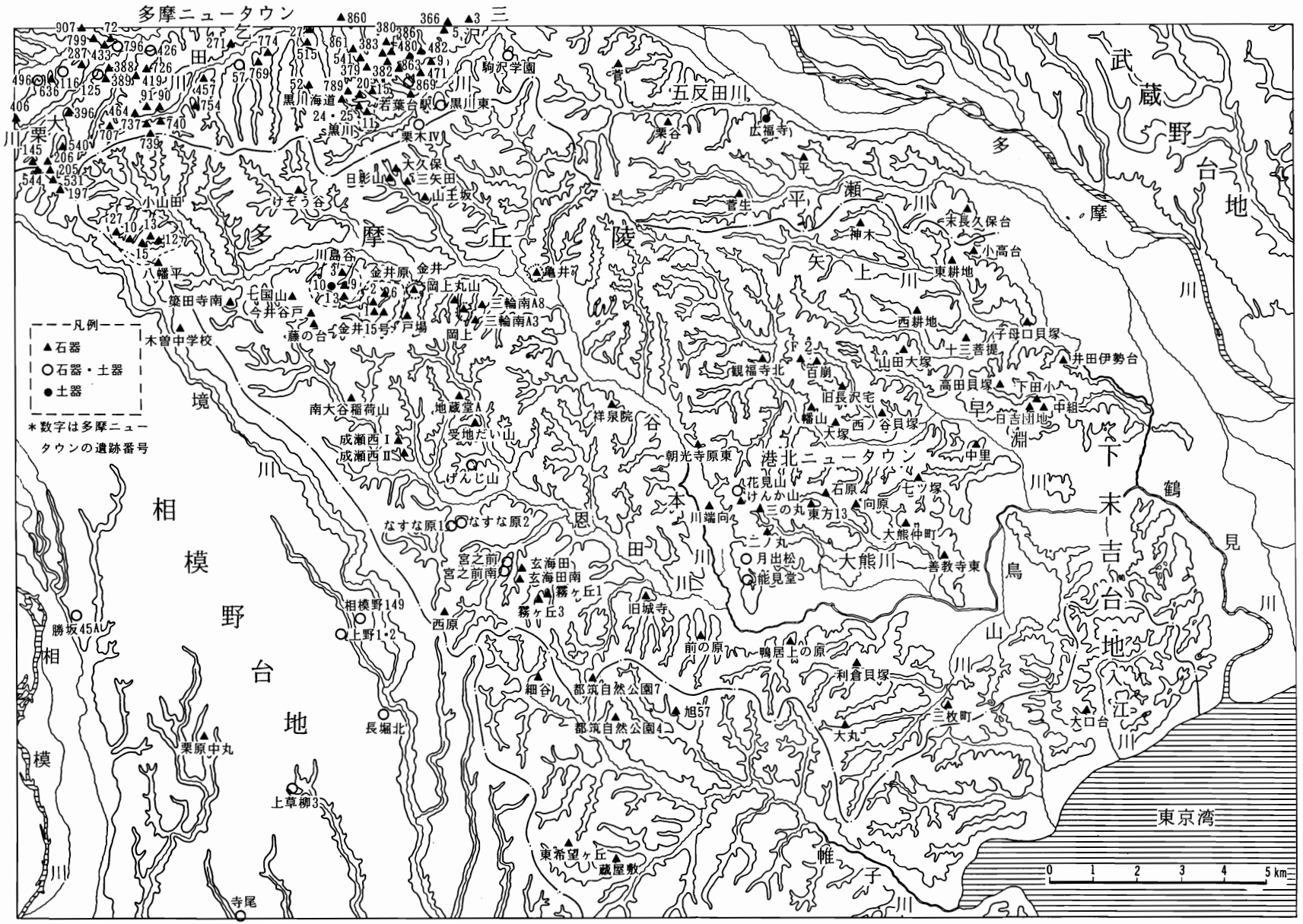

多摩ニュータウン
三沢川
乞田川
大栗川
黒川
黒川海道
若葉台駅
黒川東
駒沢学園
五反田川
栗谷
広福寺
栗木IV
大久保
三矢田
日影山
山王坂
けぞう谷
小山田
八幡平
築田寺南
七国山
今井谷戸
藤の台
金井原
金井
岡上丸山
三輪南A8
三輪南A3
岡上
亀井
多摩丘陵
平瀬川
菅生
神木
末長久保台
小高台
東耕地
矢上川
西耕地
子母口貝塚
十三菩提
井田伊勢台
山田大塚
高田貝塚
下田小
中組
日吉団地
早淵川
観福寺北
百崩
旧長沢宅
八幡山
大塚
西ノ谷貝塚
中里
港北ニュータウン
朝光寺原東
花見山
けんか山
石原
七ツ塚
向原
三の丸
東方13
大熊仲町
二ノ丸
月出松
能見堂
大熊川
善教寺東
鳥山川
下末吉台地
鶴見川
入江川
大口台
三枚町
大丸
利倉貝塚
鴨居上の原
前の原
旧城寺
細谷
都筑自然公園7
旭57
都筑自然公園4
東希望ヶ丘
蔵屋敷
帷子川
東京湾
相模野台地
相模川
境川
木曽中学校
南大谷稲荷山
地蔵堂A
受地だい山
成瀬西I
成瀬西II
げんじ山
祥泉院
谷本川
恩田川
なすな原1
なすな原2
宮之前
宮之前南
玄海田
玄海田南
霧ヶ丘1
霧ヶ丘3
西原
相模野149
上野1・2
長堀北
勝坂45A
栗原中丸
上草柳3
寺尾
凡例
▲石器
○石器・土器
●土器
＊数字は多摩ニュータウンの遺跡番号
0 1 2 3 4 5 km

図4　草創期遺跡の分布

表１　鶴見川流域の遺物

図	遺跡名	土器	槍	刺槍	斧	その他	文献
	花見山	123	30	54	8	各種多数	坂本95
1・2	月出松	3				鏃1	本文
3	能見堂	2〜3	13	6	1	鏃2・掻4・剥片多数	〃
〃	向原		3			核1	〃
〃	F2		1				〃
〃	二ノ丸		1				〃
〃	旧長沢宅						〃
〃	けんか山			1			〃
〃	大熊仲町			1			〃
5	玄海田		1	1			伊丹89
	玄海田南			1			伊丹教示
5	宮ノ前	4	1	4		鏃2・錐1・剥片	〃 88
〃	宮ノ前南	2	1	1	3	刃・剥片	〃 89
6	なすな原1	8	7	1	2	礫2・刃1	中村78・町田84
〃	〃 2	3	2	6		剥片	浅川90
7	神木			1			村田68b
〃	東耕地			1			〃
〃	井田伊勢台			1			原89
〃	山田大塚			1			石井90
〃	西ノ谷貝塚			4			坂本87
〃	下田小		1				松村74
〃	日吉団地		1				大坪94
〃	子母口貝塚		1				森田73
〃	西耕地		1				村田63
〃	高田貝塚		1				浜田95
〃	観福寺北		1				平子89
〃	百崩		1				坂本86
〃	十三菩提		1				樋口71
〃	大塚				1		武井94
〃	石原			2			荒井74
〃	東方13			1			坂本72
〃	七ッ塚		1				〃 87
〃	三の丸		2	1			〃 85
〃	川端向		1				〃 93
〃	朝光寺原東				1		〃 89
	八幡山		1				伊藤90
	中組		1				岡本58
	中里					細刃	奥平80
	善教寺東				1		前川教示
8	三矢田		7	2			伊藤91
〃	日影山		3	3			小杉89
〃	大久保		2	2			伊藤91
〃	山王坂			1			関根89
	片平白根		1				村田78
8	けぞう谷			1			先崎82
〃	今井谷戸		1				〃 78
〃	藤の台			2			原田80・81
〃	受地だい山		3	2			渡辺86
〃	成瀬西Ⅰ			1			池谷90
〃	成瀬西Ⅱ			3		植刃1	〃
	南大谷		3	1		剥片	調査団81
	稲荷山						
〃	げんじ山	1	2				近藤89
〃	地蔵堂A		2				矢内86
〃	西原		1				小池86
〃	利倉貝塚		1		1		北川90
〃	霧ヶ丘1			1			今村73
〃	〃 3			1			〃
〃	旧城寺			1			根田80
〃	大丸		1				矢島80
〃	三枚町		1				相原88
	前の原		1				奥平80
	鴨居上の原		1				須山教示
	祥泉院					細刃	奥平80
9	小山田13				1		安孫子83
〃	〃 15		3				館野84b
〃	〃 10		2				館野84a
〃	〃 12		1				安孫子83
〃	〃 27			1			館野84c
〃	七国山			1			先崎78
〃	川島谷9		1				大坪84
〃	〃 13		1				〃
〃	〃 3		1				〃
〃	〃 10	1					浅川84
〃	簗田寺南		2				辻本86
〃	八幡平		1				笹井85
〃	金井原1		1				大坪87
〃	〃 6		1	1			〃
〃	〃 2		1				〃
〃	金井15号		1				浅川74
〃	戸場		1				小薬84
〃	金井			1			浅川74
〃	岡上			1			〃
〃	岡上丸山		1	1			竹石89
〃	亀井		1			核1	浅川74
〃	三輪南A8		1				麻生89
〃	〃 A3			1			〃
	計	147〜8	124	116	19		

＊土器の個体数その他報告と異なる場合は，筆者の判断による。
＊石器点数が記載してないものは，１とした。
＊報告者名は，１人のみ記した。

表２　多摩川流域の遺物

図	遺跡名	土器	槍	刺槍	斧	その他	文献
10	栗木Ⅳ	2	1				増田78
〃	栗谷		1				禿74
〃	駒沢学園	1	1	2		掻1	呉地89
〃	黒川東	2	2	1	1	錐1	稲村80
〃	広福寺	1					村田68a
〃	菅			1			東原78
〃	平			1			坂本72
〃	末長久保台			1			東原75
	菅生		1				村田78
	若葉台駅			1			〃
11	黒川海道		3	6		鏃3	〃
〃	多摩789		2				川田95
〃	黒川20		1	2			谷本93
〃	〃 24・25		1				〃 94
〃	〃 11		1				小薬91
〃	〃 15		2				〃
〃	多摩3		5				館野89・伊藤91
〃	〃 386			3			館野89
〃	〃 5		3	2			石川87
〃	〃 366		5	3			館野89
〃	〃 480		1	5			〃
〃	〃 863		1				〃
〃	〃 382			3			石橋84
	〃 869	1					東埋セ92
	〃 471			1			〃
	〃 9		1				〃
	〃 482			1			〃
	〃 380			1			〃
	〃 383			1			〃
	計	7	32	35	1		

表３　帷子川流域の遺物

図	遺跡名	土器	槍	刺槍	斧	その他	文献
12	細谷			1			寺沢75
〃	都筑自然公園7			1			橋本91
〃	〃 4			1			〃 88
〃	旭57			1			奥平80
〃	東希望ヶ丘					掻1	小野塚86
〃	蔵屋敷		3			掻1	中山92
〃	大口台			3			安藤92
	計		3	7			

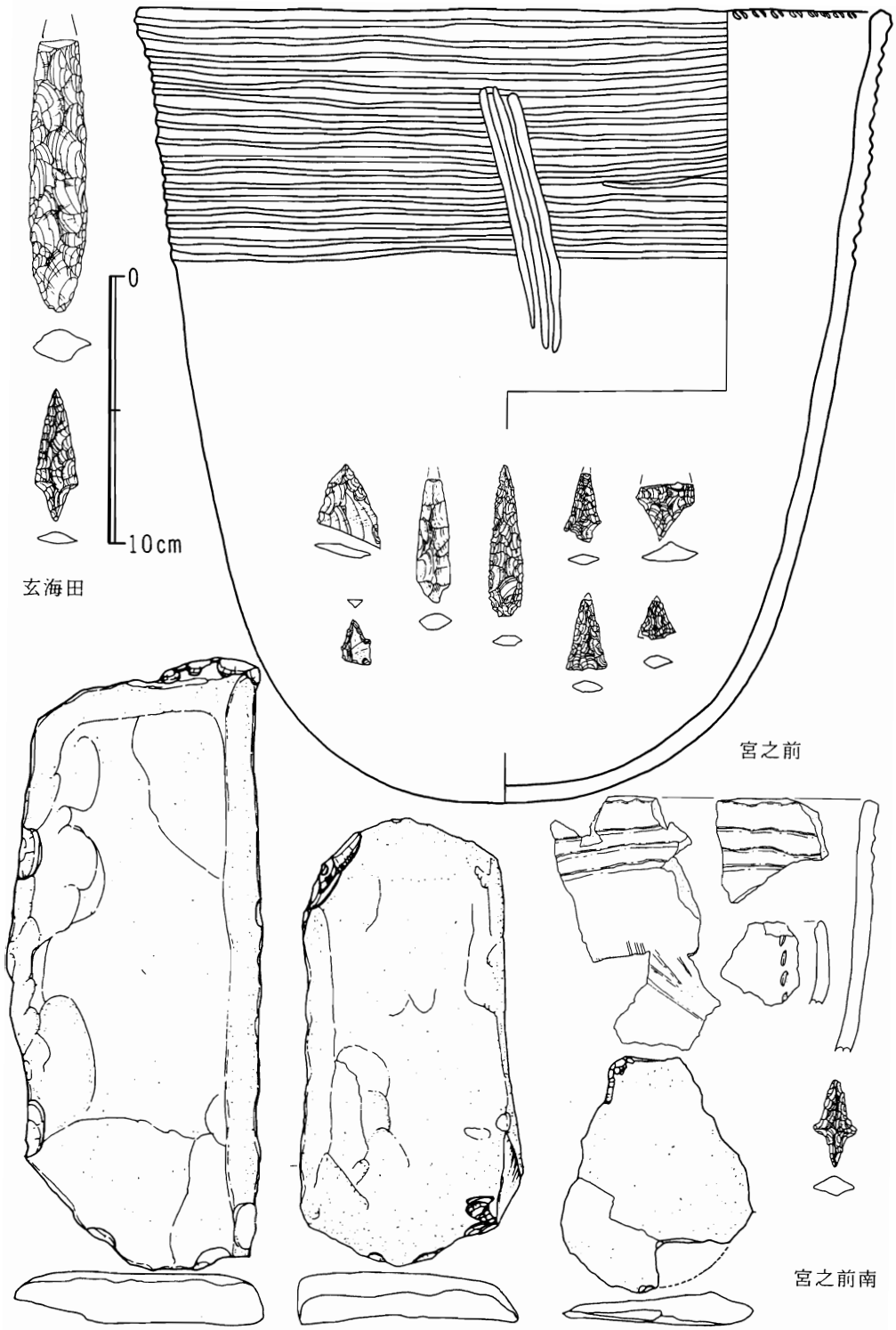


図5　鶴見川流域（長津田地区遺跡群）の土器と石器

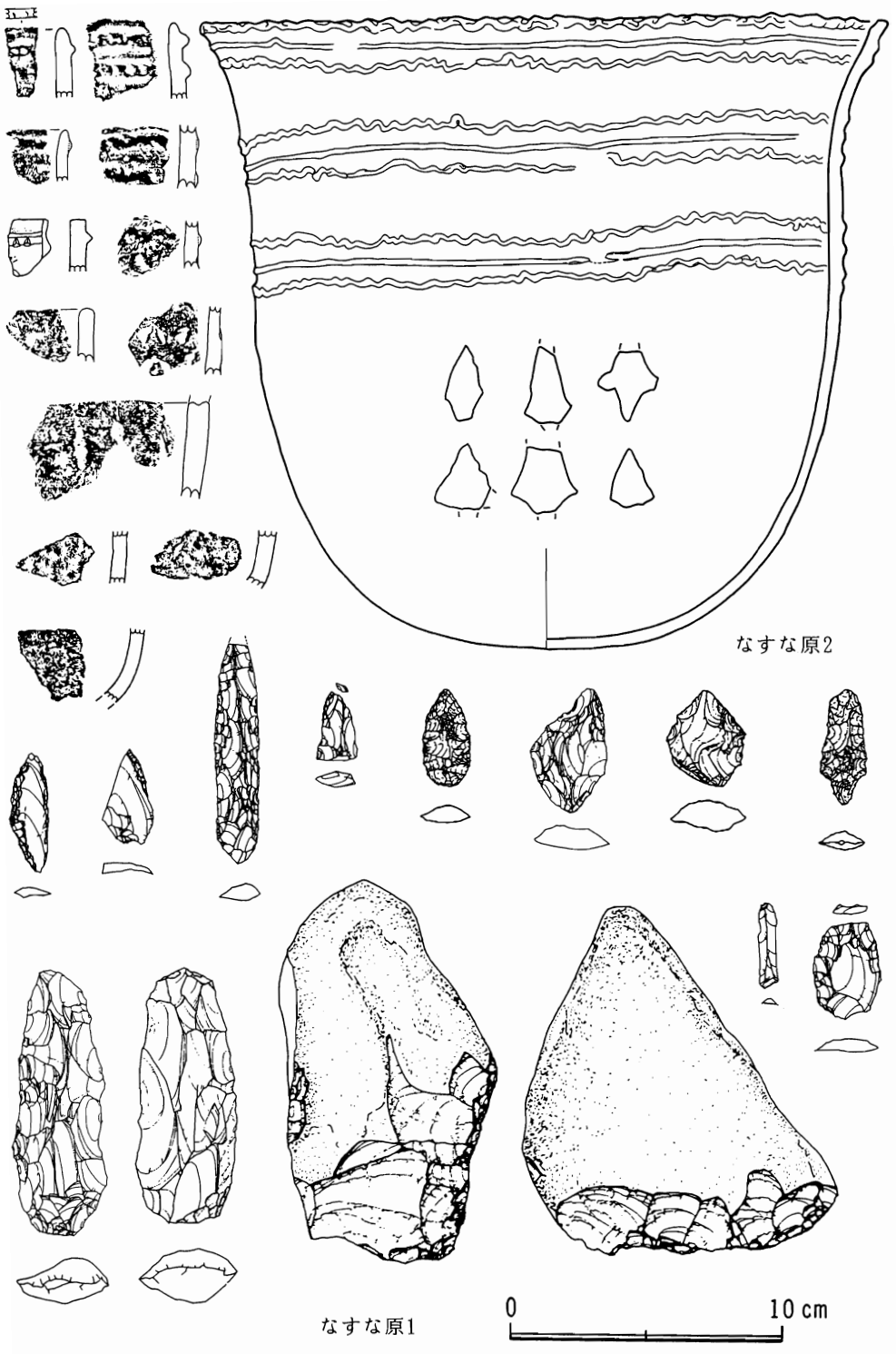


図6　鶴見川流域（なすな原遺跡）の土器と石器　※なすな原2の石器は縮尺不詳

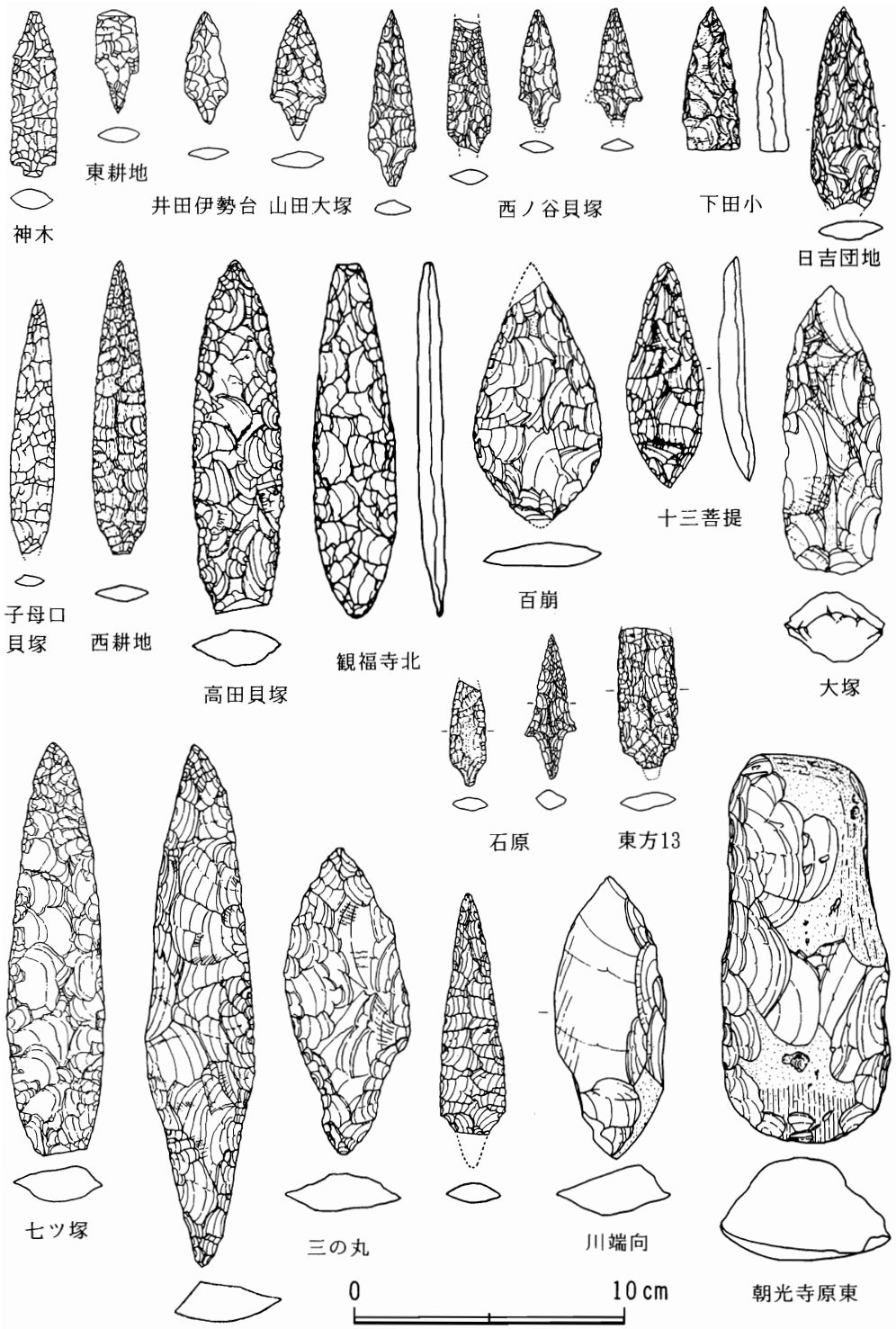


図7　鶴見川流域（下流北岸部）の石器

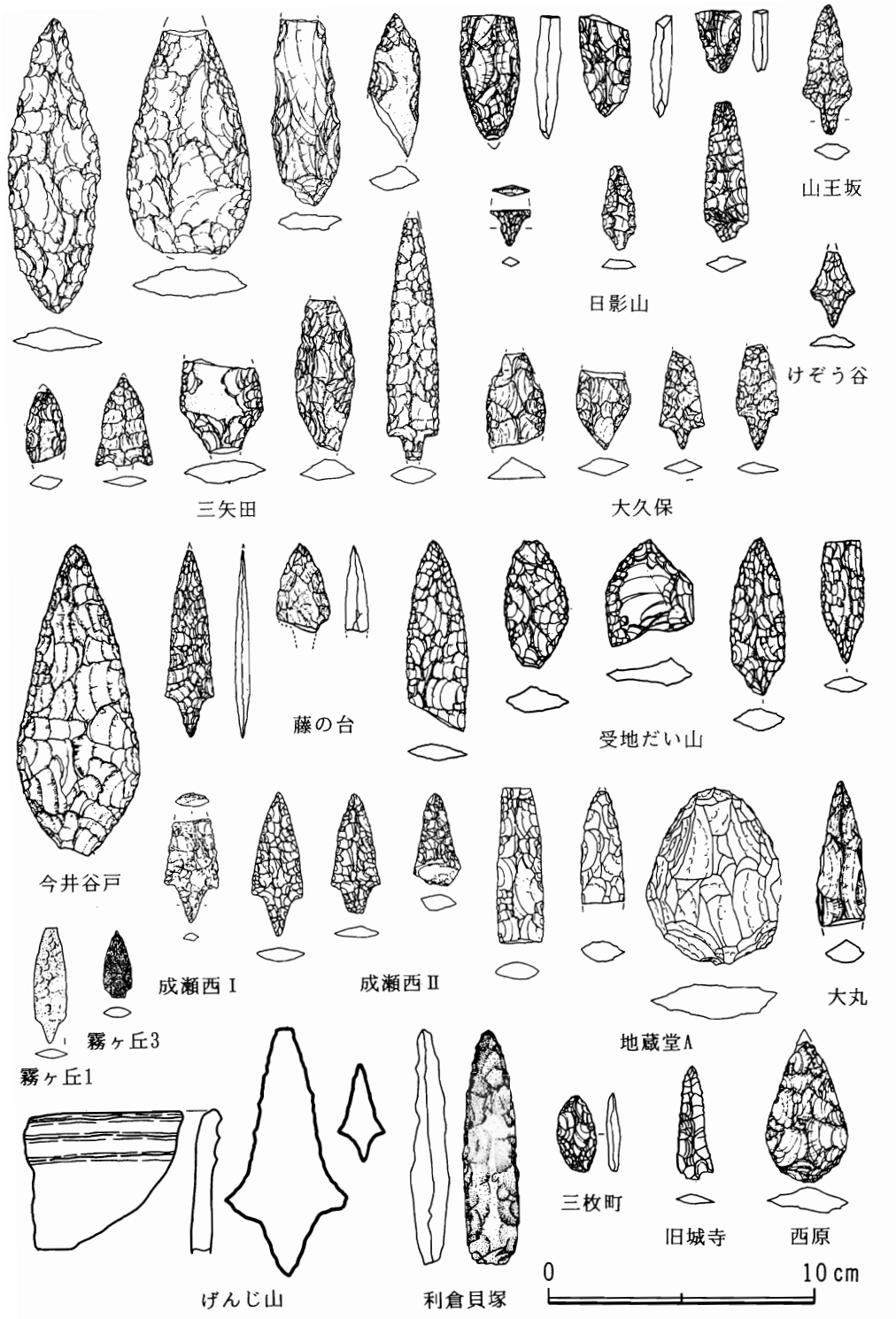


図8　鶴見川流域の土器と石器

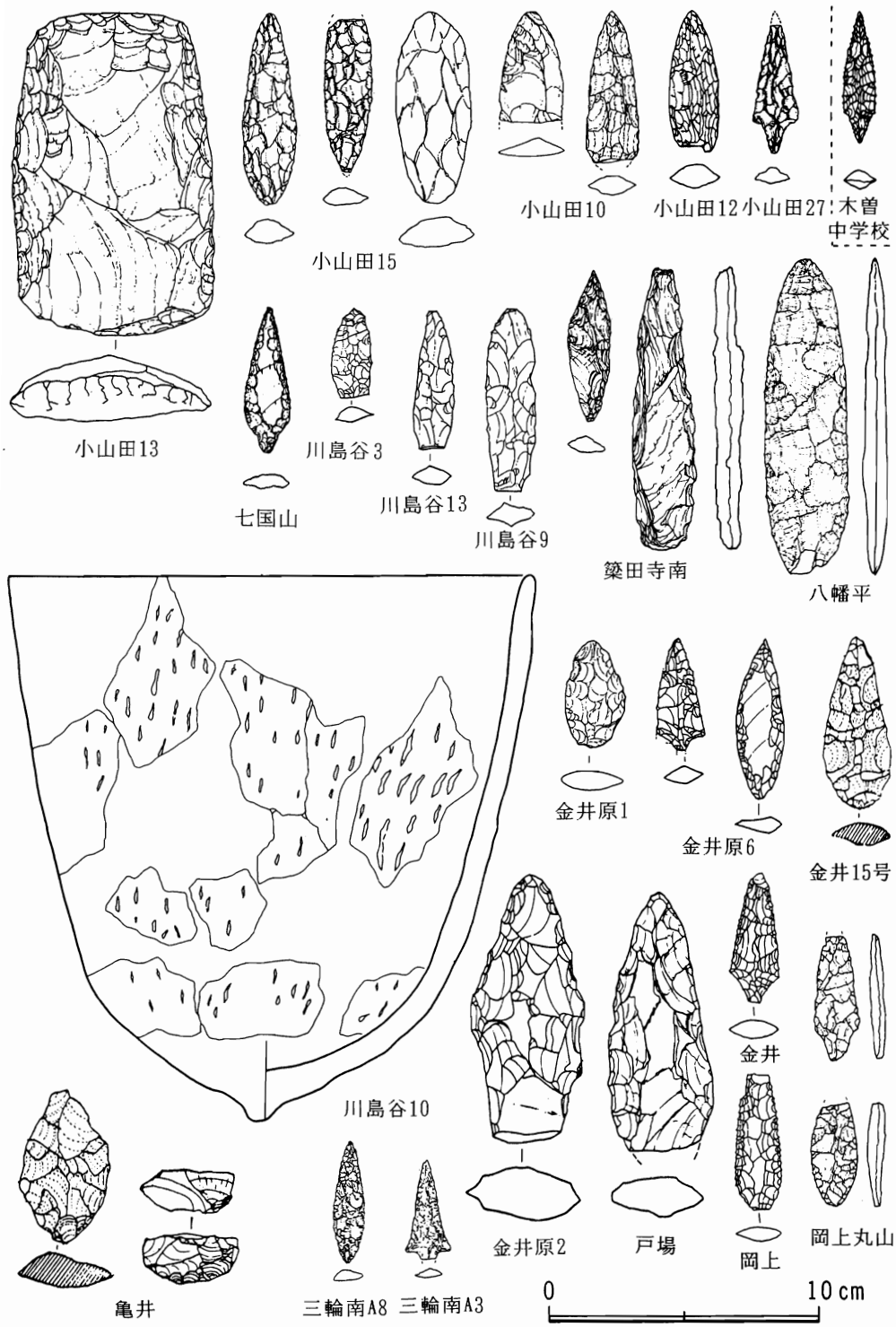


図9　鶴見川流域（上流部）の土器と石器

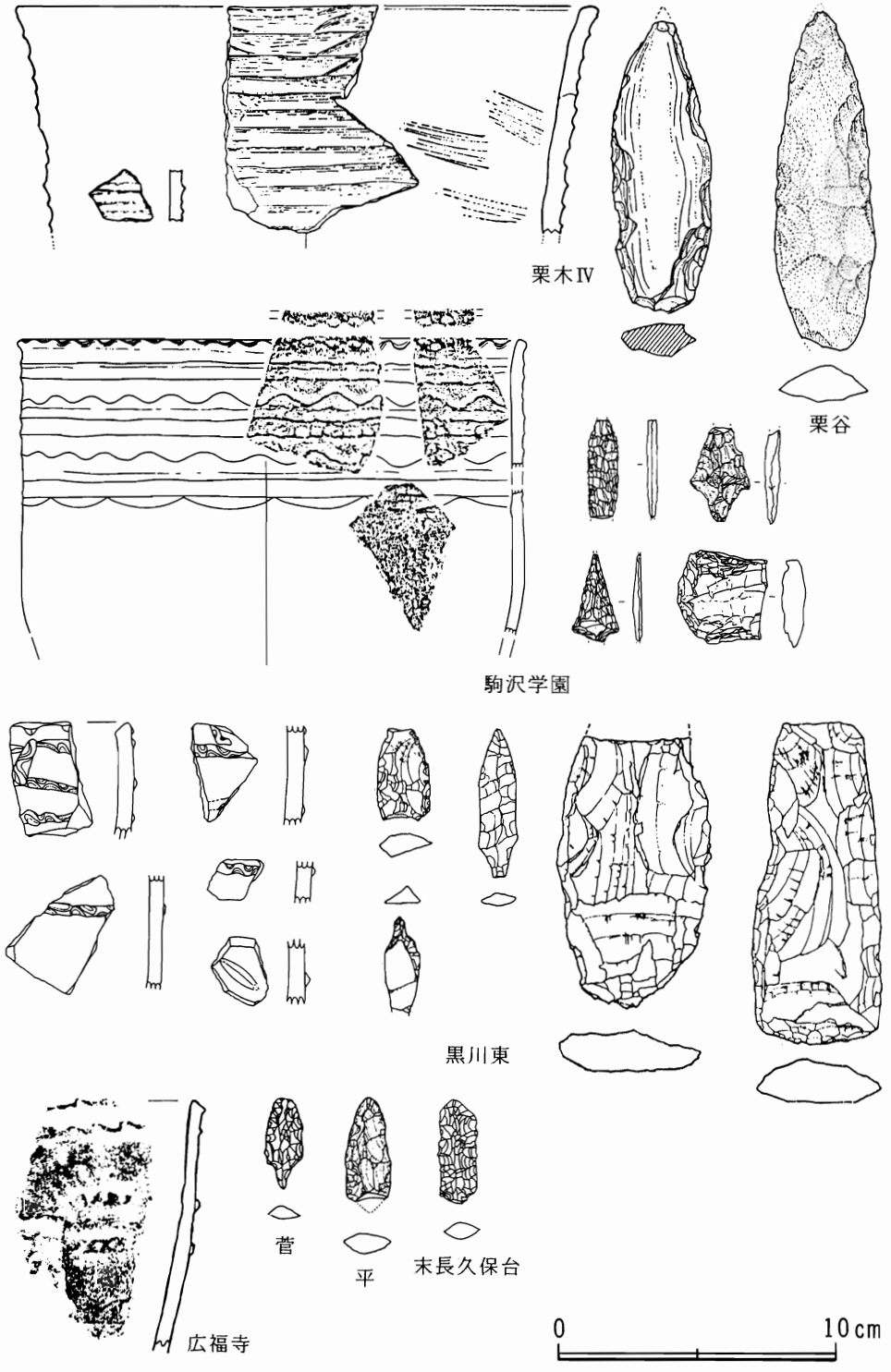


図10　多摩川流域（三沢・五反田・平瀬川）の土器と石器

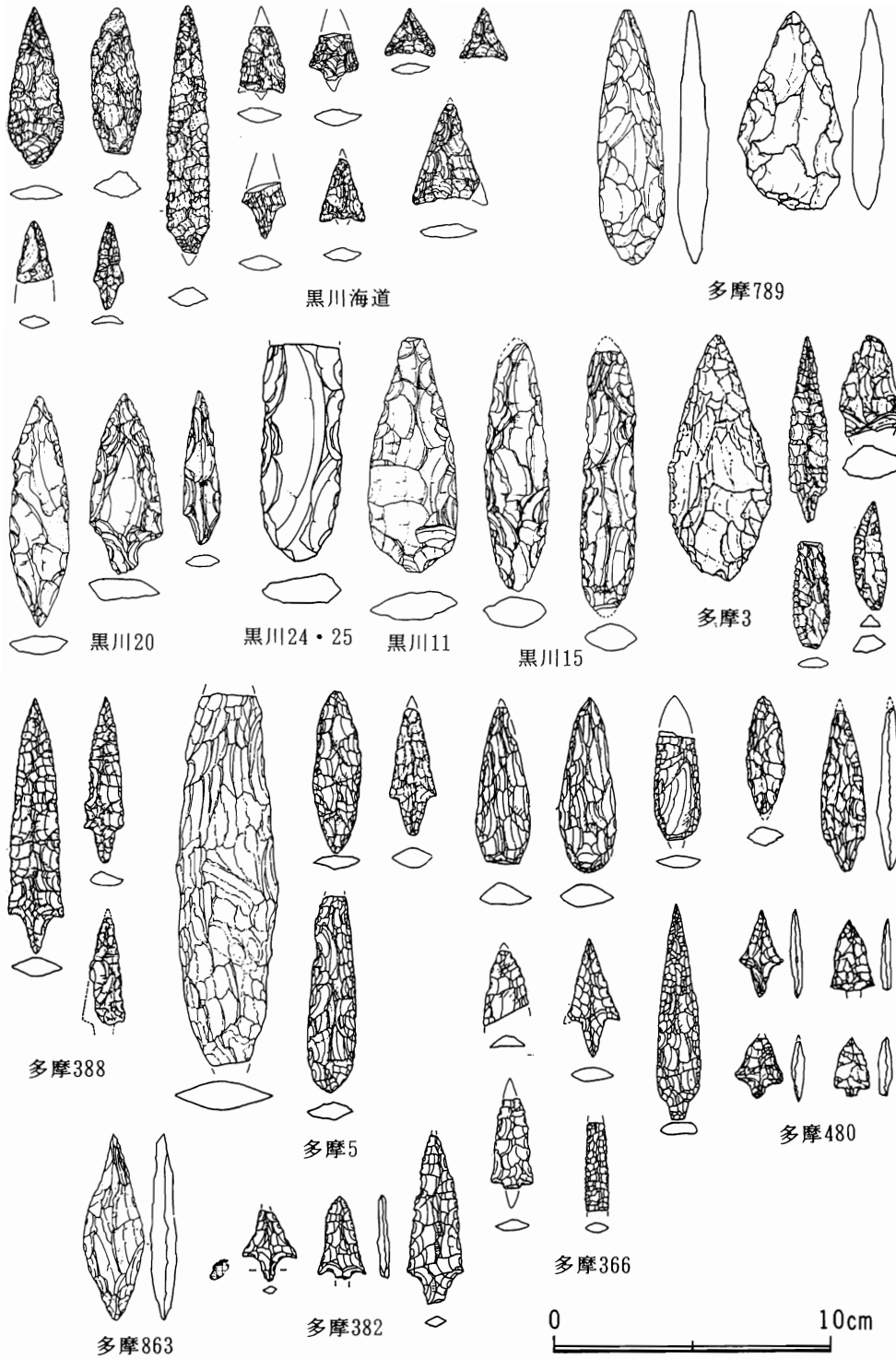


図11　多摩川流域（三沢川）の石器

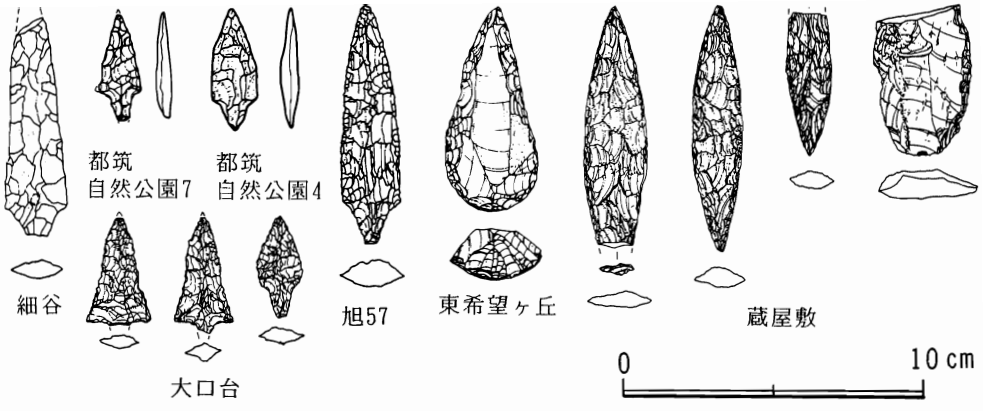


図12　帷子川流域の石器

知りえた遺跡は，本来の３分の１前後にすぎないともいえよう。

各遺跡は台地上の平坦面・斜面をとわず存在しているが，概して台地の主脈・脊梁部に少なく，台地の先端・低位部に多い。遺物のうち，石器は槍と刺槍が大半を占め，これに次ぐのは斧であるが，これらが器種別に集中する様子は見られない。それに対して土器のある遺跡は14ヶ所だが，明確な集中を示している。谷本川東岸に３（花見山・月出松・能見堂）・恩田川中流に５（宮之前・同南・なすな原１・同２・げんじ山）・三沢川中流に４（駒沢学園・黒川東・栗木Ⅳ・多摩869）ヶ所で，いずれも約２kmの範囲内に分布している。鶴見川上流の川島谷10と五反田川下流の広福寺は単独で，前出各グループと相似た距離で離れている。

これら５つのグループはそれぞれ５～６kmの間隔があり，あたかも各川の中流域を選んで立地したかのごとくである。ちなみに大栗川流域の３遺跡はやはり狭い範囲内に集中し，やはり三沢川グループとは同様な間隔をおいている。同様な状況下で調査された周辺の遺跡からは土器が発見されていないので，この分布状況は意味をもつものといえよう。土器の存在が長・短をとわず一定期間の居住をあらわすとみれば，各グループの位置は草創期の居住位置を示すものであろう。居住地の選定は単なる偶然ではなく，他の存在を意識して行なわれた可能性もある。後の縄文時代に地域の拠点をなす複合（大規模）集落は一定の間隔をおいて立地している（坂本87ｂ）が，その萌芽がはるかにこの時期にさかのぼることは興味深い。

遺構は花見山の竪穴と配石それに能見堂の礫群のみで，他では検出されていない。配石や礫群はどの層位にあっても比較的判別しやすいが，浅い竪穴や柱穴のみでは検出しにくいのも一因であろう。しかしそれを割り引いても，この時期の遺構は少ない。後の縄文時代には，遺構の数に比べて遺物の方がはるかに少ない事も珍しくない。したがって明確な掘り込みを伴なう施設が，あまり構築されなかったといわざるをえない。

総数123遺跡の95％は完成石器が１～数点存在するのみで，遺跡といっても長期間居住したとはとうてい考えられない。これらは短期間の居住か，もしくは一時的に立ち寄ったかのいずれであろう。それに対して土器と剥片が共存する花見山・能見堂・宮之前南・なすな原１・同２などは居住の痕跡がより明確で，この時期の集落址といえよう。こうした見方をすれば，集落が存在したのは谷本・恩田川グループのみということになる。同様な視点で多摩川南岸域を見た場合，条件を備えているのは大栗川グループだけである。前二者を鶴見川中流域の一グループとすれば，この時期の集落は鶴見川中流域と多摩川南岸域に各１ヶ所ずつと存在したと考えられる。

土器は鶴見川流域全体で約150個体出土しているが，その83％が花見山である。残り８遺跡で約25個体あり，１遺跡の平均は３個体である。多摩川南岸域では４遺跡から最大８個体で，平均２個体となる。個体数の不明な大栗・乞田川グループも似たような状況と見られ，花見山以外の遺跡の平均は２～３個体である。この数字を見れば，花見山の資料がいかに傑出した存在か明らかであろう。これらの土器の説明は各報告にゆずるが，それらの時期は下記の４期に編年できる。

・花見山１式…花見山・広福寺・多摩796

・花見山２式…花見山・なすな原１・黒川東・多摩426

・花見山３式…花見山・月出松・能見堂・宮之前・同南・なすな原２・げんじ山・栗木Ⅳ・駒沢学園・多摩116・同125

・下宿式…川島谷10

以上のように最も多いのは花見山３式期で，この時期には鶴見川上流・五反田川以外のグループでは複数の遺跡が存在する。それ以前の花見山１・２式期では，各グループに１ヶ所ずつであるが，最後の下宿式期には鶴見川上流のみとなる。また花見山は各時期にわたっているが，それ以外はすべて単一時期である。ここから谷本川グループでは花見山が同一場所で比較的長期の集落であるのに対し，大栗川グループでは場所を少しずつ位置を変えていたという見方もできる。

発見された土器の遺存状況は，どの遺跡においても上半部が多く，下半部が少ない。これは個体判別や文様構成を知るうえでは好都合だが，反面器形確定の点では不利となる。花見山でも底部付近の破片は１割に満たず，他はなすな原１・川島谷10で各１点あるにすぎない。下半部の破片は上半部よりも概して小さく，色調はより赤みが強く，表面が班状に剥落したものが多い。これらは下半部が被熱したことを示しており，ススの付着と相まって，土器の大半が煮沸用であることを物語っている。

土器の大きさを，花見山では口径にもとづき４タイプに分けた。大きさの判明した47点の内訳は，大（25cm以上）３・中型（25～15cm）18・小型（15～５cm）25・超小型（５cm以下）１となる。すなわち口径10cm前後の小型が最多で，口径20cm前後の中型がこれに

次ぎ，両者でおよそ90％を占めている。この基準からみると，宮之前・なすな原２は大型，栗木Ⅳ・駒沢学園・川島谷10は中型で，宮之前南・なすな原１は中・小型らしい。月出松は大きさは中型だが容量の点では大型にはいり，小型・超小型が伴なう。これは従来知られていた隆線文土器の傾向に合致するが，口径30cmちかい大型や５cm以下の超小型も確実に存在し，隆線文土器が各種の大きさで構成される土器群であることが明白となった。

土器の文様構成をみると，花見山１式では，広福寺にａ類，多摩796にｅ類がある。花見山２式では，なすな原１にａ・ｃ・ｄ類，黒川東にａ類，多摩426にａ・ｂ・ｄ類がある。花見山３式では，能見堂・宮之前・なすな原２・げんじ山・栗木Ⅳ・駒沢学園・多摩116・同125にａ類，月出松にａ・ｄ類・宮之前南にａ・ｃ類がある。同じａ類でも，能見堂と宮之前と栗木Ⅳ，月出松となすな原２と駒沢学園，宮之前南とげんじ山はそれぞれ類似している。ただし宮之前のような斜行隆線が，他の土器にも施されているか否かは不明である。下宿式の川島谷10はｃ類で，花見山118の系譜を引いている。なおこれに後続する土器群は，この地域ではいまだ知られていない。

花見山遺跡出土石器の石質はチャートが半分で，安山岩・流紋岩がこれに次ぎ，３種でおよそ９割を占めている。ほかにホルンフェルス系・頁岩・砂岩なども少しあり，黒曜石はまったくない。他遺跡の石質もやはり前三者が多く，これが流域全体の傾向といえよう。

槍は鶴見川流域で126点，全体で約160点あり，その20％が花見山にある。その形態について土器を伴なう遺跡の様相をみると，花見山では幅広い基部寄りに最大径をもつものが基本形で，中央付近に最大径をもつのは２点（花６・７）だけである。この２点は形態・出土位置からみて花見山３式に伴なうものであろうが，その他のものは判別しがたい。月出松ではやはり幅広で基部寄りに最大径をもつものが主体となり，他に幅広で先端寄りに最大径をもつもの，それに細身で中央に最大径をもつものが花見山３式に伴なう。なすな原１では細身と小型幅広の，黒川東では大型（？）・小型幅広の２タイプが花見山２式に伴なう。宮之前では小型幅広品が，花見山３式に伴なう。

このように形態は大小にかかわらず幅広が主流をなし，細身のものが少ない。ただ加工の面からみると，細身のものは調整が全面に及んで丁寧なものが多く，主剥離面を残すものがかなりある幅広のものとは対称をなす。花見山１・下宿式期の様相は今一つ不明だが，花見山２・３式ではかなりのバラエティがある。単独出土品の中にはこれ以外の形態も相当みられ，それらの型式帰属を定めることはかなり困難な作業となろう。

刺槍は鶴見川流域で116点，全体で約160点あり，その３分の１が花見山である。花見山の特徴は平均の長さ3.7cm以下の小型が６割を占めることと，長さにかかわらず逆刺がきちんと作りだされていることである。その大半は遺跡内において花見山３式の分布と重なっており，同式に伴なう可能性が高い。他の遺跡では長さ４cm以上の中・大型品が５割強を占め，細身で逆刺の下縁が斜行するものも多い。月出松・宮之前・宮之前南・なすな原２・

げんじ山・駒沢学園など，土器を伴なう遺跡では花見山と同じ形が圧倒的に多い。これら花見山３式の遺跡で，細身が伴なうのは宮之前のみである。花見山２式期のなすな原１・黒川東では，逆刺の下縁が斜行するものが伴なっている。以上のことから小型で逆刺の発達したものは，ほぼ花見山３式に伴なうとしてよい。やや地域が離れているが伊勢原市三ノ宮・下谷戸遺跡（宍戸他94）も，これを裏付ける有力な事例であろう。

斧は全部で20点あり，半数弱が花見山である。磨痕が見られるのは朝光寺原東のみで，自然面を残したものも多い。形態的には比較的細身で小型品が多く，中でも花見山121・なすな原１・大塚の４点が類似している。両面加工で幅広の小山田13は他地域でも類例が少なく，大型で片面加工の宮之前南はさらに異彩を放っている。花見山の大半は１・２式の分布範囲内にあり，なすな原１・黒川東の例を加味すると，花見山２式に伴なう斧は両面加工のものといえよう。これに対して月出松・宮之前南の事例から，花見山３式の斧は片面加工を主とし，明確な磨製品は見られなくなる。

それ以外の器種は，極めて数が少ない。花見山の鏃は基部が直線的で宮之前が類似し，月出松・能見堂・黒川海道ではいずれも凹んでいる。花見山の三角鏃は刺槍と共存しており，それぞれ独自の存在である。ただ花見山３式期になると，形態に変化が生じてきたということであろう。錐は宮之前・黒川東にあり，いずれも剥片を利用している。掻削器は能見堂・駒沢学園・東希望ヶ丘・蔵屋敷にあり，剥片の周縁を加工している。東希望ヶ丘の厚手の先刃と，花見山169・170などの刃部は類似している。なすな原１・中里には細石刃，花見山・亀井には細石核があるが，他の石器群との共伴を積極的に主張しうるほどの例に恵まれていない。

４．花見山の背景

以上見たように，都筑の先土器時代末から縄文時代草創期の遺跡は，面積に比してかなり多く存在する。しかし把握できたのはその一部にすぎず，むしろ消失あるいは未知の遺跡が相当数存在することが想定される。そうした中で，花見山はどのような位置を占めていたのであろうか。

各遺跡は台地の主脈よりも先端・斜面などに，集落は低位部分に立地している。こうした状況は集落の形成が本格的に開始される縄文時代早期よりも，それ以前の先土器時代遺跡の立地を踏襲している。しかし先土器時代末期の本地域の様相は，必ずしも明らかではない（坂本他95)。遺跡はかなり長期にわたって形成されたものであろうが，これらを残した人の動きは予想以上に頻繁であったことが察知される。

ただしそれらを時間軸で区切ってみると，各時期の集落はさほど多くない。花見山１式期には鶴見・大栗川流域に各１つずつであり，２式期になると恩田・三沢川にも出現し，

3式期になるとそれぞれの流域に拡大する。そして下宿式期になると，ほとんど消滅してしまうのである。こうした流れが本地域特有のものかそれとも普遍的なものか，隣接地域あるいは広範な地域と比較する必要があろう。それによって各々の地域的特質が浮き彫りにされ，ひいては列島の巨視的な流れが確認できるからである。

遺物の面では槍と刺槍が合わせると 300点をこえ，この時期の主体的な石器であることがわかる。他の器種にしても石質や形態が特徴的で，前後の時期に混入しても判別でき，この割合がフロックでないことは確実である。これらと共存する土器はすべて隆線文土器で，合計150個体以上が出土している。したがって本地域のこの時期を特徴付けるのは，何といっても2種の槍と隆線文土器の存在であろう。「槍と土器」と称した所以である。

前述のように時期区分の基準をなす土器は，花見山1→花見山2→花見山3→下宿の4型式に細分できる。しかしこれらに伴なう石器は，各器種ともかなりバラエテイがあり，単独出土品はさらに多彩である。したがってこれらをどの段階に入れるかは，かなり困難をともなう。土器伴出の石器群が，その時期のすべてを包括しているかどうか保証されていないからである。ただ後続する押圧縄文土器群の存在はいまだ知られていないので，下宿式よりも新しい段階の石器ではなく，伴なうかそれ以前の所産であろう。

さらに問題なのは単独出土品のなかに，この地域で製作されたと見られる石器がほとんどない点である。石器が製作地の周辺で使用されたとすれば，接合関係は確認できなくとも，同形態の製品がみられるはずである。花見山の槍の主要なものはいわゆる「横倉型尖頭器」（永峰83）に属するが，鶴見川流域で花見山の槍4・5に近い形態は百崩・三矢田・今井谷戸にある。全体の長さは異なるが，二ノ丸・西原も基部が類似している。しかし三矢田・今井谷戸・西原などは，槍が多く製作される多摩丘陵・相模野台地に隣接しており，そちらとの関連を無視できない。そうすると花見山で作られた可能性が高いのは，百崩・二ノ丸位に過ぎなくなってしまう。

こうした事情は，刺槍でもまったく変わらない。なすな原1・宮之前南でも石器製作がなされているので，その周辺は同グループと関連づけるのが妥当である。したがって花見山製作の石器と関連する範囲はおのづからしぼられ，鶴見川下流北岸を中心とする地域となる。また南隣の能見堂でも作られていたのだから，この地域のより小型のタイプは能見堂製であることも考慮しなければならない。とすれば花見山に近い刺槍としては，石原・西ノ谷貝塚の一部をあげるにとどまる。花見山にしても能見堂にしても多数の剥片が出土しており，相当数の石器が製作されたとみることができる。

筆者はこの時期の遺跡を，生活址（集落）と生産地（猟場）ととらえ，地域における相関関係を想定してきた（坂本86b）。神奈川の有舌尖頭器を集成した白石浩之は，上記に石器製作址を加え，「消耗品」の「有舌尖頭器」は「製作址で計画的に多量に製作していた」と推定し，「生活址を中心として石器製作址と消費地（狩場）を結ぶ領域が設定され

る」と述べている。また湘南藤沢キャンパス内遺跡の分布状況をもとに，「明らかに拠点的な集落と狩場が有機的に関連している」という（白石92）。しかし具体的な領域や関連については，論が及んでいない。

湘南藤沢キャンパス内遺跡をまとめた桜井準也は，有茎尖頭器を遺物集中部内と遺物集中部外に分けた。前者を「集落ないし短期間に営まれたキャンプ」，後者を「当時の狩場」と性格づけるが，使用石材のちがいから前者の住人とは「異なった人々」が利用していたこともあるという（桜井93）。同遺跡から出土した69点の有茎尖頭器は13タイプに分けられているが，どの地点にあっても形態的類似性は極めて高い。そこから前者で製作された石器が，後者で使用されたと考えるのは妥当であろう。

以上の見方は槍・刺槍を狩猟具ととらえ，製作と使用が同一地域内で行われていたという前提に立っている。ところが鶴見川流域の状況は，必ずしも湘南藤沢キャンパス内遺跡と同一視することができない。しかし3でみたようにこの地域の槍・刺槍は多様であり，その製作地をこれまで知られた流域内の遺跡に求めることはかなりむずかしい。石器からみた花見山集落の存在は，鶴見川流域において思いのほか孤立的なのである。それは前述の前提をあらためて検討しなおす必要がある事を物語っていよう。

花見山の突出ぶりは土器についても同様で，他の遺跡からみれば数10ヶ所分もの量を有している。最も多い2式は85個体もあり，平均より多いなすな原1の10倍にも達する。大小の器形が組み合わさっている点は同じだが，個体数の差が多すぎる。これは単に「営なまれた時間が長かったから」という説明だけでは，納得できないように思われる。

佐藤宏之は後期旧石器時代から縄紋時代への移行にあたって列島各地での対応状況が同じではなく，関東地方では「北方系削片系細石器石器群を媒介と」して「内水面漁撈」の開発が採用されたという。サケ・マスの骨が出土した前田耕地遺跡を「漁撈キャンプ」と位置付け，「土器の使用もふくめて，火を使った食物の処理や保存処理技術を相当高度に発達させており，同時に貯蔵技術も開発していた」と考えている（佐藤92）。生活基盤の第一を狩猟とすれば，第二の漁撈を加えることによって「定住化」がもたらされ，縄文社会への移行につながったという道筋である。また栗島義明は神子柴文化の役割について，「限定的であった漁労活動を生業部門に取り込むことによって，人々の生活はより安定の度合いを増し，大きく縄文時代への傾斜を強めていった」と強調している（栗島95）。メドヴェージェフは極東ロシアの出現期土器を「魚油容器」と位置付け，やはり定住生活への移行にあたって漁撈が重要な役割をはたしたと考えている（メドヴェージェフ93）。

これらの考え方は，いうまでもなく「縄文時代のサケ・マス論」（山内64）の延長線上にあり，花見山遺跡を理解するうえでも大変魅力に富んでいる。縄文海進以前の鶴見川は多摩川に流入しており（増子他88），多摩川を溯上するサケ・マスの一部が鶴見川に及んでいたことは当然考えられるからである。両川合流点から花見山までの距離は前田耕地遺

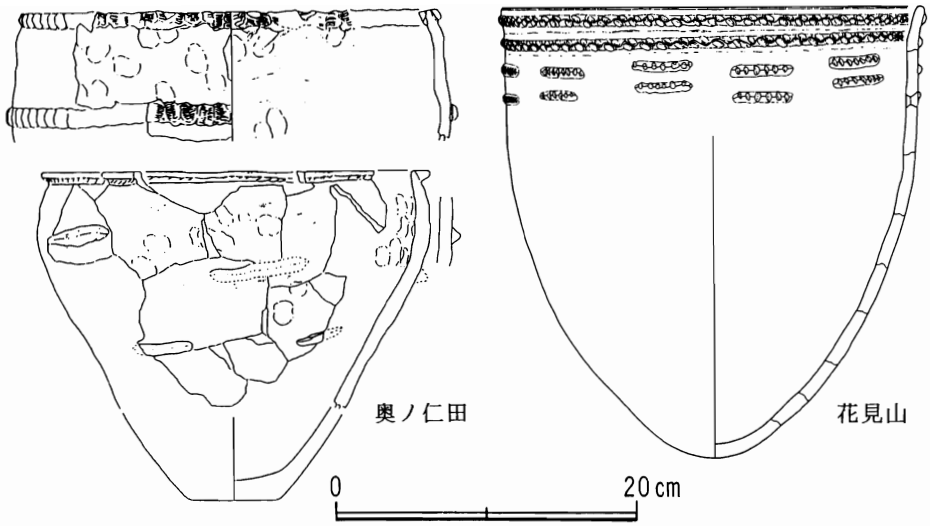


図13　南九州と南関東の土器

跡までよりもかなり近く，条件としてはむしろ有利といえよう。ただ花見山の立地はさらに支谷の源頭部で，そこまで溯上が及ぶかどうか検討の余地がある。前田耕地と同様な立地を求めるとすれば，本流沿いのさらに低い段丘であろう。しかしそこは一部が沖積層下に埋没していることもあり，この時期の遺跡はほとんど知られていない（坂本93)。もしこの面に「漁撈キャンプ」があるとすれば，花見山はそれらの背後に位置した「本集落」ということになろうか。

しかし花見山では北方系削片系細石器が伴なっておらず，また各遺跡の土器は２～３個体にすぎない。これが漁撈集落の一般的な在り方とすれば，花見山の個体数の多さはどう理解すればよいのだろうか。

そこで隆線文土器をもつオープンサイトという視点から列島に目を広げてみると，花見山の様相は本州よりも南九州の諸遺跡に類似している。鹿児島県掃除山・栫ノ原・奥ノ仁田・宮崎県椎屋形第１・堂地西遺跡などでは，数100～1000点前後の土器が発見されている。遺構は住居跡・配石炉・集石・土坑・煙道付炉穴などで，他地域に見られないものを含んでいる。掃除山の石器は，石鏃・細石核・磨石・敲石・凹石・ハンマーストーン・礫器・石皿・砥石・石斧・剥片石器・線刻礫・石核・ピエスエスキューユ・スクレイパーがある（宮崎考古学会93)。また栫ノ原遺跡では，丸ノミ形石斧が伴なっている（伊地知他94)。これらの遺構・遺物をもとにして，採集を基盤とした定住の開始が主張されている。

南九州の土器は平底を主としており，器形は大・中・小の各種から構成されている。奥ノ仁田遺跡では隆帯（太隆線）が口縁に平行して１～３条めぐらされ，指頭・ヘラ状工具・二枚貝腹縁などで加飾されている。隆帯は上下をつなぐ縦方向もあり，また胴上部に長さ

数cmの隆帯を横方向に貼付したものがみとめられる（宮田95)。こうした文様構成は器形のセットと共に，花見山１式のそれを彷彿とさせる（図13)。

以上のような竪穴の存在や土器要素の類似は，それらの基盤をなす生産様式が共通していたためとも考えられる。要するに多数存在する花見山式土器群の背景として，「植物質食料の採集」が想定されるのである。土器の一部を植物質食料の加工・調理用具，比較的多い打割器もこれに関連した用具として考えたい。なすな原と共通し前田耕地とは異なる立地も，植物質食料の採集・加工の適地だからという見方もできる。「第一の狩猟」と「第二の漁撈」に「第三の採集」を加えることによって，立地や遺物の様相がより正しく理解できるのではあるまいか。現段階において土器が採集をものがたる絶対的な証拠とは断言できないが，花見山人の生業活動は決して一面的ではなかったように思われる。

周知のように東京－鹿児島間の陸上距離は約1500kmあり，徒歩２～３カ月で到達できるという（日本歩け歩け協会・井上他81)。条件がより劣悪であれば日数をもっと必要とするのは当然であるが，少なくとも季節内移動が可能という点に変わりはない。したがって文様・器形構成の類似をもたらした要因として，人の移動を想定したとしても何ら不思議ではなかろう。花見山２式土器の中には，日向・上黒岩・福井と同一の文様構成をとるものがある（坂本他95)。こうした隆線文土器の広域性も，単に文化伝幡という言葉だけでは片付けられない。中世以前における列島内外の人の動きは，今日想像するより遥かに広範囲だった。花見山から奥ノ仁田までは，壬からグロマトゥハまでよりも近いのである。

この移動は決して一方的なものではなく，普遍的かつ回帰性のあるものと思われる。広域移動の視点からこの時期に多いデポ（石器埋納）の存在をみると，その意義がより鮮明に浮かび上がってくる。デポはこうした移動生活の中で，あるグループの中継点として明確に位置付けられていたのではあるまいか。

このように花見山遺跡の背景を考えてみると，関東地方ではもっとも早く縄文化を達成した集落ということができよう。ただし周囲の遺跡あるいは後続する遺跡に，こうした様相は見られない。あたかも狩猟・漁撈の島に浮かんだ，採集の「島」であるかのごとくである。こうしたモザイク状況そのものが，いまだ明確な定住をなしえなかった草創期社会の本質であるように思われる。いずれにしても今の段階ではこれに関する適確な見通しを持ち合わせていないので，さらに多くの視点から検証をふかめたいと思う。

＊　＊　＊

小文作成にあたり，御協力いただいた下記の方々に，深謝いたします。

伊丹　徹・小薬一夫・小宮恒雄・重久淳一・鈴木重信・館野　孝・戸田哲也・新津　健・浜田晋介・村田文夫・持田春吉・渡辺　務・(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター

（1996年１月31日）

参考文献

・相原俊夫　1988 『三枚町遺跡』
・浅川利一　1974 『町田市史』上巻
・浅川利一・大坪宣雄　1984 『川島谷遺跡群』Ⅰ・Ⅱ
・浅川利一　1990 「縄文土器復原の技術とこころ」『多摩考古』第20号
・麻生順司　1989 『三輪南遺跡群発掘調査報告書』
・安孫子昭二　1983 『小山田遺跡群』Ⅱ
・荒井幹夫　1974 「東方第７遺跡」『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告』Ⅳ
・安藤広道・鹿島保宏・鈴木重信　1992 『大口台遺跡発掘調査報告』
・池谷信之　1990 『成瀬西遺跡群』
・石井　寛　1990 『山田大塚遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅺ
・石橋峯幸　1987 「№ 382遺跡」『多摩ニュータウン遺跡』昭和58年度第２分冊
・伊丹　徹・河野喜映　1988 「長津田遺跡群宮之前（№１）遺跡Ｄ地区」『神奈川県立埋蔵文化財センター年報』７
・伊丹　徹・河野喜映　1989 「宮之前(NO.2)遺跡」『神奈川県立埋蔵文化財センター年報』８
・伊地知治喜・上東克彦・福永裕暁・雨宮瑞生　1994 『栫ノ原遺跡』
・伊藤　郭　1990 「八幡山遺跡」『全遺跡調査概要』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅹ
・伊藤　健・今井恵昭・小島正裕　1991 「№3遺跡」『多摩ニュータウン遺跡』平成元年度第３分冊
・伊藤恒彦　1991ａ 「大久保遺跡」『真光寺・広袴遺跡群』Ⅴ
・伊藤恒彦　1991ｂ 「三矢田遺跡－遺物・考察編－」『真光寺・広袴遺跡群』Ⅵ
・稲村晃嗣・小薬一夫・村田文夫　1980 『黒川東遺跡』
・井上智勇・他　1981 『中学社会・歴史的分野』
・今村啓爾　1973 『霧ヶ丘』
・江坂輝弥・浅川利一・岡島　格　1978 「なすな原遺跡出土の細隆起線文土器」『考古学ジャーナル』№147
・大坪宣雄　1987 『金井原遺跡群』Ⅰ
・大坪宣雄　1994 『日吉団地遺跡』
・岡本　勇・和島誠一　1958 『横浜市史』第一巻
・奥平一比古　1980 「横浜市旭区上白根町採集の有舌尖頭器」『神奈川考古』第９号
・小野寺恵子　1986 『東希望ヶ丘遺跡』
・禿　仁志　1974 『栗谷遺跡』
・川田壽文　1995 「№789遺跡」『多摩ニュータウン遺跡』平成４年度第３分冊
・北川吉明　1990 『利倉貝塚』
・栗島義明　1995 「日本列島における移行期の文化」『東アジア・極東の土器の起源』
・呉地英夫　1989 『駒沢学園校地内遺跡』
・小池　聡　1986 『国道 246号線西原遺跡』
・小薬一夫　1984 『戸場遺跡』
・小薬一夫　1991 『黒川地区遺跡群報告書』Ⅲ
・小杉　康・鶴田典昭　1989 「日影山遺跡」『真光寺・広袴遺跡群』Ⅳ
・小宮恒雄・山口隆夫・石井　寛　1984 「横浜市能見堂遺跡の調査」『第８回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

・小宮恒雄　1990 「月出松遺跡」『全遺跡調査概要』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅹ
・根田信隆　1980 「緑区の遺跡分布調査中間報告」『都筑文化』 1
・近藤真佐夫・宮重俊一　1989 「げんじ山遺跡」『上恩田の遺跡』
・桜井準也　1993 「縄文時代草創期前半の有舌尖頭器の平面分布について」『湘南藤沢キャンパス内遺跡』第１巻
・坂本　彰　1970 「港北における原始古代研究への視点Ⅰ」『港北のむかし』 2
・坂本　彰　1972 「東方第７遺跡」「東方第13遺跡」『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告』Ⅲ
・坂本　彰・鈴木重信　1979 「神奈川県花見山遺跡」『日本考古学年報』30
・坂本　彰　1985 『三の丸遺跡調査概報』港北ニュータン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅵ
・坂本　彰　1986ａ 「最古の縄文土器」『古代のよこはま』
・坂本　彰　1986ｂ 「百崩遺跡」『亀ノ甲山・オオデラ・百崩』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅷ
・坂本　彰　1987ａ 「七ツ塚遺跡」『七ツ塚・権田池東遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅸ
・坂本　彰　1987ｂ 「縄文時代における二つの道」『利根川』 8
・坂本　彰　1987ｃ 「横浜市西ノ谷貝塚」『第11回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
・坂本　彰　1989 「朝光寺原東遺跡採集の丸ノミ形石斧」『調査研究集録』第６冊
・坂本　彰　1993 「横浜市緑区川端向遺跡採集の石器」『利根川』14
・坂本　彰・鈴木重信・倉沢和子　1995 『花見山遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ⅩⅥ
・坂本　彰　1996 「花見山式土器とその周辺」『かながわの縄文文化の起源を探る』
・笹井一正・先崎忠衛　1985 「町田市下小山田町出土の大型石槍」『多摩考古』17
・佐々木洋治　1971 『高畠町史』考古資料編
佐々木洋治　1973 「山形県における縄文草創期文化の研究」『山形県立博物館研究報告』第１号
・佐藤宏之　1992 「北方系削片系細石器石器群と定住化仮説」『法政大学大学院紀要』第29号
・宍戸信吾・立川直之・松田光太郎・三瓶裕司　1994 「東海第一自動車道№14（三ノ宮・下谷戸）遺跡」『第18回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
・白石浩之　1992 「有舌尖頭器の分布とその問題点」『神奈川考古』第28号
・関根唯充　1989 「山王坂遺跡」『真光寺・広袴遺跡群』Ⅲ
・先崎忠衛　1978 『恩田川流域における考古学的調査』（２）
・先崎忠衛・日暮晃一　1982 「東京都町田市けぞう谷遺跡出土遺物について」『多摩考古』15
・竹石健二・澤多大多郎・野中和夫　1989 『岡上丸山遺跡発掘調査報告書』
・武井則道　1994 『大塚遺跡－遺物編－』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ⅩⅣ
・館野晶子　1984 『小山田遺跡群』Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ
・館野　孝　1989 「多摩丘陵の尖頭器」『槍の文化史』
・谷本靖子　1993・94 『黒川地区遺跡群報告書』Ⅲ・Ⅳ
・辻本崇夫　1986 『簗田寺南遺跡』
・寺沢　薫　1975 「多摩丘陵西端部採集の石器２例」『古代学研究』第75号
・東京都埋蔵文化財センター　1992 『縄文誕生』
・東原信行　1975 「川崎市高津区末長久保台発見の有舌尖頭器」『川崎市文化財調査集録』10
・東原信行　1978 「川崎市多摩区菅発見の有舌尖頭器」『川崎市文化財調査集録』13

・戸田哲也・相原俊夫　1984 『大和市月見野上野遺跡第２地点』
・永峰光一　1983 「横倉遺跡」『長野県史』考古資料編
・中村喜代重　1978 『なすな原近隣遺跡報告書』
・中山　豊　1992 『蔵屋敷遺跡発掘調査報告書』
・橋本昌幸　1988・91 『都筑自然公園予定地内遺跡群』・同(2)
浜田晋介　1995 「岡道孝コレクション」『川崎市市民ミュージアム収蔵品目録』考古資料第１集
・原川雄二　1987 「NO.5遺跡」『多摩ニュータウン遺跡』昭和60年度第２分冊
・原田昌幸　1980・81 『藤の台遺跡』Ⅱ・Ⅳ
・原　宏美　1989 「川崎市中原区井田伊勢台発見の有舌尖頭器」『川崎市市民ミュージアム紀要』第２集
・樋口清之・麻生　優　1971 「十三菩提遺跡」『埋蔵文化財調査報告』２
・平子順一・鹿島保宏　1989 『観福寺遺跡・新羽貝塚』
・増子章二・浜田晋介　1988 『川崎の考古』
・増田精一・後藤　健　1978 『栗木Ⅳ遺跡』
・町田庸子　1984 『なすな原遺跡－No.１地区調査－』
・松村恵司　1974 『神庭遺跡』
・三浦圭介　1988 『表館（1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 120集
・南大谷遺跡調査団　1981 「南大谷稲荷山遺跡」『町田市埋蔵文化財発掘調査年報』１
・宮崎考古学会・南九州の縄文時代草創期を考える会　1993 『南九州の縄文時代草創期の諸問題』
・宮田栄二　1995 「九州南部の土器出現期」『東アジア・極東の土器の起源』
・村田文夫　1963 「神奈川県出土の有舌尖頭器」『上代文化』第33輯
・村田文夫　1968ａ 「神奈川県川崎市生田広福寺境内採集の隆起線文系土器片について」『古代文化』第20巻第２号
・村田文夫　1968ｂ 「多摩丘陵最東端における有舌尖頭器二例」『古代文化』第20巻第８・９号
・村田文夫・増子章二　1978 「川崎市多摩区黒川海道遺跡採集の石器群」『神奈川考古』第３号
・森田金吾　1973 「川崎市子母口貝塚出土の石槍」『考古学ノート』第３号
・矢内　勲　1986 「地蔵堂遺跡群Ａ地点」『奈良地区遺跡群』Ⅲ
・矢島國雄　1980 「横浜市神奈川区羽沢町採集の槍先形尖頭器」『神奈川考古』第９号
山内清男　1964 「縄文式土器・総論」『日本原始美術』１
・横浜市下水道局河川計画課　1992 『鶴見川』
・渡辺康行　1986 「No.11地点　受地だいやま遺跡」『奈良地区遺跡群』Ⅰ上巻（第１分冊）
・Ｖ・Ｅ・メドヴェージェフ　1993 「ガーシャ遺跡とロシアのアジア地区東部における土器出現の問題について」『環日本海における土器出現期の様相』

三浦半島南部の海蝕洞穴遺跡と その周辺の遺跡について

── 洞穴遺跡の共通性と特殊性および周辺の遺跡との関連 ──

釼　持　輝　久

Ⅰ　はじめに

三浦市のある三浦半島南部には，旧石器時代から室町時代までの約200の遺跡が存在する。そのうちの１割強が弥生時代から室町時代までの海蝕洞穴遺跡（以下，洞穴とする）である。

この洞穴を1948年以来，赤星直忠は「洞穴を古代人がどのように利用したか」というテーマのもとに，組織的に調査研究を行ってきた。赤星はその報告を1953年「海蝕洞窟」と題して『神奈川県文化財調査報告』20集に発表した。その前年には洞穴の研究成果を『漁民と対馬』に「金石併用時代の漁民」という論文で発表し，その中で次のように述べている。

① 間口，大浦山，毘沙門の各洞穴は附近の台地上に同時期の遺跡がないことから，洞穴を常の生活の場所とし，小網代湾に面した洞穴は背後に同時期の遺跡が点在するから，あるいは漁期だけ浜の生活が行われてたのではないか。

② 弥生時代の洞穴居住者は漁撈具の出土量が多いことから，漁民であると推定し，半農半漁の漁民もあれば，純然たる漁民もある。漁撈の内容も網錘が出土していないことから，網漁法は存在しないで釣漁法や稽（やす）や銛など刺突具を中心としたものである。

③ 間口洞穴で初めて発見された卜骨は，漁期の吉凶判断に用いられたものであろう。

④ 毘沙門Ｂ・Ｃ洞穴でアワビ製の貝庖丁が多数出土し，間口洞穴ではベンケイガイ製腕輪未製品が多く出土していることから，洞穴はこれらの貝製品の製作場でもあり本業の漁獲物と共に，農民の農産物と交換したものであろう。また，漁民間の分業も存在したと考えられる。

⑤ 弥生時代において，洞穴は生活の場でもあり，死者の埋葬の場所でもあった。屍を別の場所で白骨化させた後，洗骨し改めて洞穴内の小洞や岩のくぼみの前に，岩を並べて境界線をつくり，その内側に骨を散乱させて葬っている。

その後，筆者は洞穴出土の漁撈具と魚骨を検討し「三浦半島における弥生時代の漁撈について」のなかで，洞穴の漁撈は個人的形態の強いものであり，魚は四季を通じて取られていた。しかも，漁撈の最盛期は農耕の忙しい春から夏にかけてであった。本格的に外洋

へ出て行うカツオや東京湾内でも沖へでる必要のあるマダイを多く取っていることなどは，この時期の漁撈と農耕の関連を考える一端を示しているように思われるとした。

三浦半島南部にあって，南関東最大級の集落址である赤坂遺跡の発掘調査を行った岡本勇は，その発掘調査報告書のなかで，洞穴と赤坂遺跡の関連を「洞穴の規模は，平均的な竪穴住居址の面積に比較すると，１～２戸分程度でしかない。したがって，大きな集団の居住は不可能である。また，その場所での居住形態として，季節的もしくは一時的な居住が考えられ，さらに生産活動として，漁撈・製塩その他が想定される。この居住形態，生産形態からすれば，『拠点』からのわかれとみるのが妥当であろう。赤坂遺跡とこれらの洞穴遺跡は，決して無関係であったとは思われない。むしろ，赤坂遺跡が『拠点』であり，洞穴遺跡はそのわかれであると考えるべきであろう。」としている。

これに対して間口Ａ洞穴を発掘調査した神澤勇一は「南関東地方弥生時代の葬制」のなかで「海蝕洞窟内に残された生活址は，農耕集落の人員が季節的に漁撈・製塩に従った結果だとする見解がある。しかし，出土した食料残滓，特に魚貝類の出現時期と適漁期をみると，五月から十月頃の農繁期にかかる種類が過半数を占める点で疑問がある。さらに，もし近くの農耕集落の人員が利用したとしても，洞窟内に古い系統をひく集骨墓を果たして営むであろうか。」としている。

また，各洞穴出土の動物遺存体の種名を鑑定した金子浩昌は「弥生時代の貝塚と動物遺存体」のなかで「海蝕洞穴を生活の拠点とした人々による漁撈活動は単に生活の食糧を得るためというのではなく，かなり漁撈を専業とした集団であり，ちょうど内陸地における狩猟集団と同様な意味で，海岸物の供給を果たすものではなかったろうか。」としている。

そこで本論ではこれらの考えをふまえて，洞穴遺跡の共通性とそれぞれの特殊性，および，洞穴遺跡と周辺の遺跡との関連について，再度まとめ，検討してみたい。

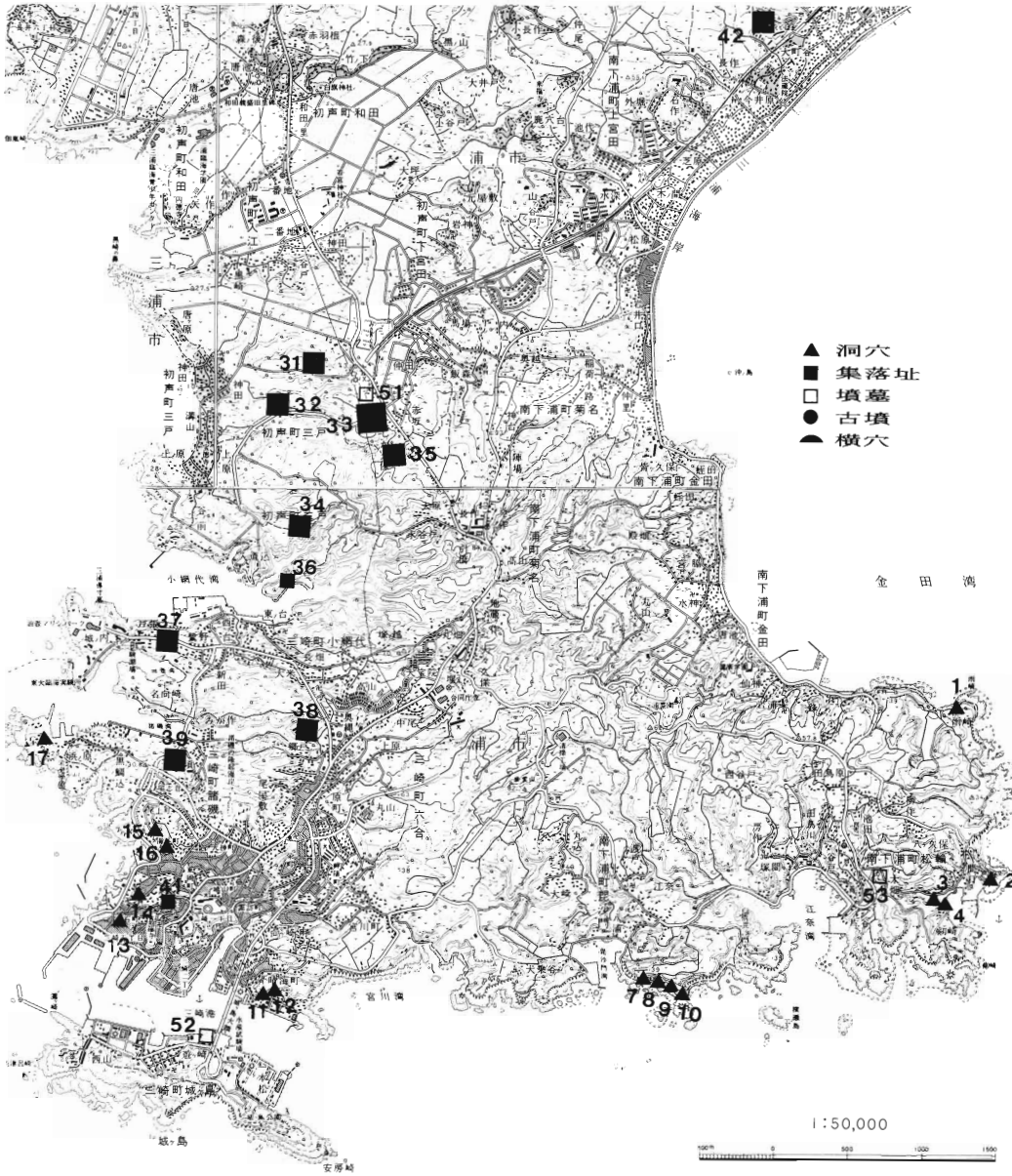
本論では洞穴が主に使用される弥生時代中期から古墳時代後期・奈良・平安時代までをあつかった。また，周辺の遺跡との関連のうち，集落址と墳墓（弥生～古墳時代前期）は三浦半島南部の三浦市全域としたが，古墳・横穴は紙数の関係で三浦市南部とした。

なお，墳墓の名称や時期については，原則として報告書に記載されているとおりとした。

Ⅱ　三浦半島南部の遺跡

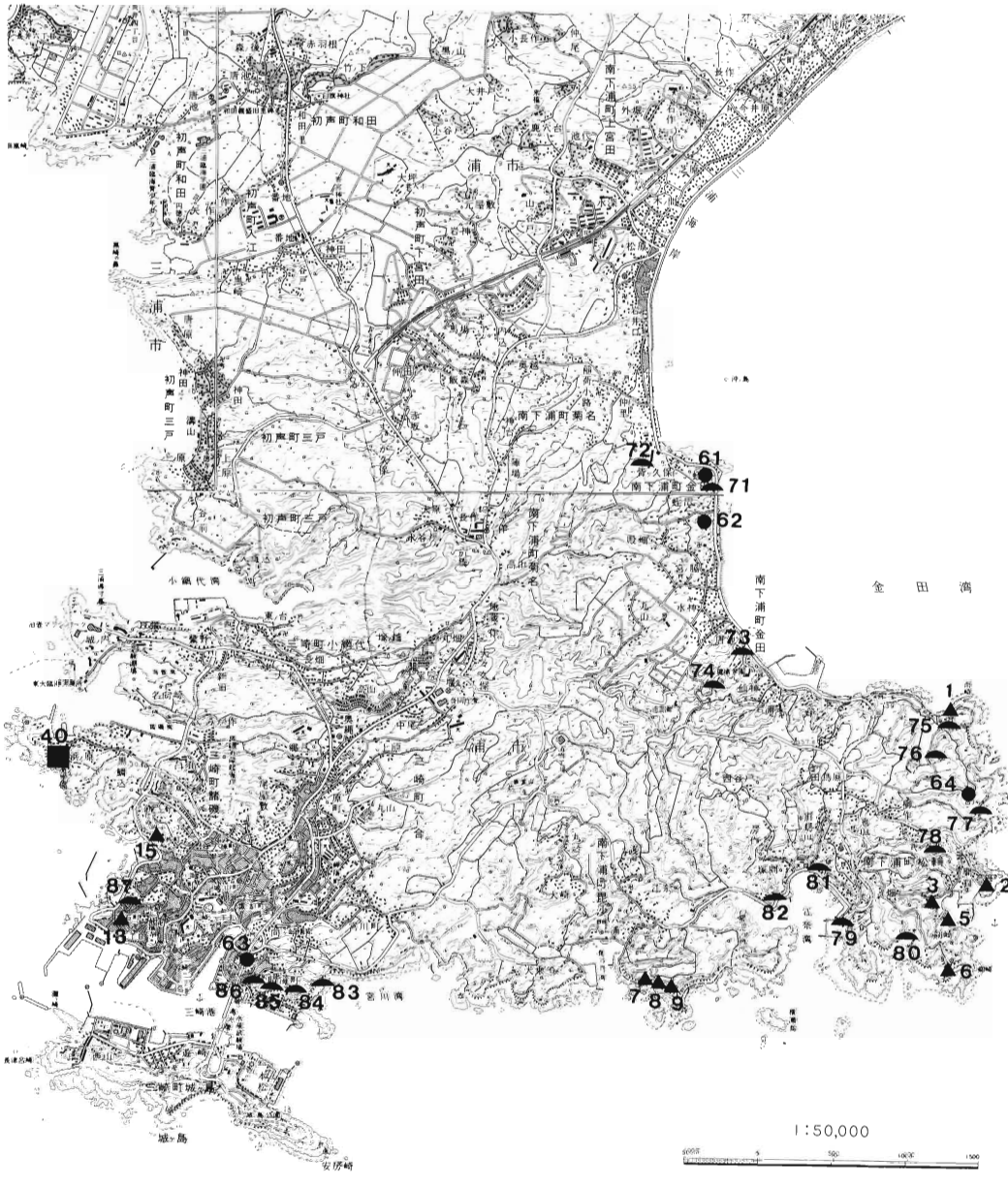
１．洞穴遺跡

雨崎洞穴：金田湾に面する剣崎の北側，標高7.5mの所にある。弥生時代中期（須和田期)～古墳時代前期（五領期）までは生活の場として使用され，洞穴内には厚い灰層と貝層が存在する。動物遺存体のうち貝類ではスガイ・クボガイ・コシダカガンガラ・イシダタミ・バテイラなどの小型巻貝やアワビ・サザエが多く出土している。魚類ではマダイ・



1．雨崎洞穴　2．大浦山洞穴　3・4．間口A・B洞穴　7・8・9・10．毘沙門A・B・C・D洞穴　11・12．向ヶ崎A・B洞穴　13．西ノ浜洞穴　14．二町谷神明社下洞穴　15・16．海外第一・二洞穴　17．浜ノ原洞穴　31．出口南遺跡　32．釜田遺跡　33・51．赤坂遺跡　34．がんだ畑遺跡　35．旧園芸試験場遺跡　36．藤ヶ崎遺跡　37．鵜ヶ島台（油壺含む）遺跡　38．才京込遺跡　39．白須遺跡　41．二町谷遺跡　42．町谷原遺跡　52遊ヶ崎遺跡　53．松輪大畑遺跡

第1図　三浦半島南部の主な遺跡の分布（弥生時代中期～古墳時代前期）



1．雨崎洞穴　2．大浦山洞穴　3．間口Ａ洞穴　5．さぐら浜洞穴　6．剣崎南洞穴　7・8・9．毘沙門Ａ・Ｂ・Ｃ洞穴　13．西ノ浜洞穴　15．海外第一洞穴　40．浜諸磯遺跡　61．六万本古墳　62．金田古墳　63．向ヶ崎古墳　64．金掘塚古墳？　71．蛭田横穴群　72．高抜横穴群　73．岩浦横穴群　74．唐池横穴群　75．雨崎横穴群　76．勝谷横穴群　77．金掘塚下横穴群　78．間口横穴群　79．松輪横穴群　80．剣崎横穴　81．松輪坪井横穴群　82．江奈横穴群　83．坂ノ下横穴群　84．窪がり横穴群　85．晴海町横穴群　86．晴海町第二横穴群　87．二町谷横穴群

第２図　三浦半島南部の主な遺跡の分布（古墳時代後期～平安時代）

クロダイ，爬虫類ではウミガメ，鳥類ではハイイロミズナギドリが多く出土している。哺乳類ではイノシシ・ニホンジカが多く出土している。いずれも頭骨から四肢骨まで各部位の骨が出土している。また，若い個体が多い。なお，１点ではあるがブタの可能性のある骨も出土している。骨角器では釣針・回転銛・稽・アワビオコシ，貝製品ではアワビ製の貝庖丁などが出土している。

古墳時代前期（五領期）以後は墳墓として使用されている。古墳時代前期には洞穴の壁の小洞や凹みに，洗骨された頭骨や肋骨など若干を雑然とよせ集めた人骨上に，岩塊を積んだ墳墓がある。同じ古墳時代前期の層からは，火葬骨も出土している。また，幼児の骨を収めた舟形と思われる木棺も出土している。この幼児の骨に混じって滑石製小形勾玉・臼玉・碧玉製管玉が出土している。古墳時代後期（鬼高期）の層からは，洞穴の壁に並行して岩塊を舟形に囲った墳墓が出土している。この墳墓内には子どもと大人の骨が各１体が雑然と入っており，大人の頭から顔にかけて丹が塗られていた。この人骨に伴って滑石製小形勾玉・臼玉・碧玉製管玉が多く出土している。また，岩塊を長方形に配置し，その上に組合せ木棺を置いて，火葬を行った施設も出土している。この火葬施設からは火葬骨の他，焼けてくずれたガラス小玉や刀子も出土している。この火葬施設のある層は，火葬骨・焼土・灰とともに火葬されていない骨も含めて，幾重にも重なって存在する。

上層部の壁の凹みやその前には古墳時代終末期の墳墓があり，須恵器の長頸瓶などが副葬されている。奈良時代の埋葬人骨も認められた。

雨崎洞穴の西側谷の標高７ｍの砂丘上には，弥生時代から古墳時代の勝谷（かっちや）遺跡がある。遺物の出土量などからみて，集落址の可能性がある。

大浦山洞穴：間口港の北東側の標高5.6mの所にある。弥生時代中期（宮ノ台期）～古墳時代前期までは生活の場として使用され，洞穴内には厚い灰層と貝層が存在する。動物遺存体のうち貝類ではマツバガイ・クボガイ・クマノコガイ・コシダカガンガラ・イシダタミ・スガイ・バテイラ・アワビ・サザエが多く出土している。魚類ではマダイ・カツオ・ネズミザメ科の一種が多く出土している。鳥類ではウミウ・ヒメウが多く出土している。哺乳類ではノウサギ・タヌキ・キツネ・クジラ類・イルカ科の一種・イノシシ・ニホンジカが出土しているが，いずれも数は少ない。骨角器では釣針・組合せ釣針の柄・回転銛・稽・弭（ゆはず），石器では網錘が出土している。貝製品ではアワビ製の貝庖丁とベンケイガイ製の貝輪の未製品が多く出土している。弥生時代中期～古墳時代前期の層は，生活層であるとともに墳墓としても使用されている。洞穴の壁の小洞や凹みに洗骨された人骨が葬られている。人骨片の大多数に，鋭利な金属器による切りきずや鈍器によるとみられる損傷が認められた。発掘調査に参加し，人骨を鑑定した鈴木尚によれば「復讐のための食人」とされている。

古墳時代後期～平安時代にかけては，墳墓として使用されている。洞穴の壁に接して岩

塊を積み上げた積石墓がある。平安時代のものは伸展葬である。

間口（まくち）Ａ洞穴：間口湾に面する標高5.3mの所にある。弥生時代中期（宮ノ台期）～古墳時代前期までは，主として生活の場として使用され，洞穴内には厚い灰層や貝層が存在する。動物遺存体のうち貝類ではイシダタミ・クマノコガイなどの小型巻貝やアワビが多く出土している。魚類ではマダイ・カツオ・コブダイ，鳥類ではウミウ，哺乳類ではイノシシ・ニホンジカが出土している。骨角器では釣針・回転銛・稽・鏃・錘が出土している。その他，アワビ製の貝庖丁，ニホンジカやイノシシの骨を使った卜骨，土製の網錘が出土している。赤星直忠による第１次調査では，ベンケイガイ製の貝輪未製品が多く出土している。この生活層とともに，洞穴の落磐岩塊のすき間には，洗骨された人骨の一部を埋葬した墳墓が存在する。

古墳時代後期以後は主として，墳墓として使用されている。洞穴の壁の凹みに岩塊を敷き，その上に遺骸（伸展葬）を置き，岩塊で覆った積石墓や土壙墓が出土している。

間口Ｂ洞穴：間口Ａ洞穴の東100mの所で，工事中に発見された。洞穴が使用されたのは，弥生時代後期～古墳時代前期である。洞穴内には混土貝層が存在し，イシダタミ・コシダカガンガラ・サザエなどの巻貝が多く出土している。また，埋葬されたと思われる人骨も出土している。

さぐら浜洞穴：間口港の南側に面した標高5.9mの所にある。古墳時代後期の岩塊積の舟形石槨の墳墓が存在する。

剣崎南洞穴：剣崎燈台の南側，標高2.7mの所にある。平安時代の混貝土層が存在する。この層より和鏡が出土している。

毘沙門Ａ洞穴：Ａ～Ｄ洞穴は毘沙門海岸に面した標高5.4～6.7mの所にある。Ａ洞穴は下層からはイシダタミやアワビが，少量の弥生時代後期の土器片とともに出土している。古墳時代後期の上層では石槨を作った人骨を埋葬し直刀・刀子・鉄鏃・土器を副葬した墳墓が存在する。

毘沙門Ｂ洞穴：弥生時代後期の貝層からはクマノコガイ・サザエ・アワビが多く出土している。魚ではネズミザメ科の一種・マダイ・コブダイ，鳥類ではウミウ・ヒメウ・カモメ類，哺乳類ではニホンジカが出土している。金属器では鉄製組合せ釣針・青銅製釣針・骨角器では回転銛・稽が出土している。その他，アワビ製の貝庖丁が多く出土し，卜骨も出土している。最上層の平安時代の土層からは，青銅製の擬餌針が出土している。

毘沙門Ｃ洞穴：弥生時代後期～平安時代まで使用されている。弥生時代後期の下部層の灰層や貝層からは，動物遺存体のうち貝類では，イシダタミ・クマノコガイ・アワビなどが多く出土している。魚類ではネズミザメ科の一種・ウツボ・マダイ・コブダイ，鳥類ではアホウドリ・ミズナギドリ・ウミウ・ヒメウ，哺乳類ではノウサギ・タヌキ・イノシシ・ニホンジカなどが出土している。骨角器では釣針・回転銛・稽・鏃・アワビオコシが出土

している。貝製品ではアワビ製の貝庖丁が多く出土している。灰層には焚火場が作られている。弥生時代後期の下部貝層直上には，伸展葬の下と上に藁ござを敷き，その上を岩塊で全面を覆った墳墓が存在する。また，洞穴の壁の凹み部の全面に岩塊を多数置き，この岩塊積の内部に人骨を散在状態に置いた墳墓も存在する。

貝層を覆う平安時代の土層からは，幅１m長さ２mほど掘りくぼめ，まわりに岩塊を並べて槨とした，伸展葬の墳墓が存在する。

毘沙門Ｄ洞穴；洞穴の下部には焼土層があることより，生活址ということが認められる。弥生時代後期と思われる中層には，大岩塊で石槨様に囲み人骨の胸に丹塗り岩塊を置いた墳墓が存在する。

向ヶ崎Ａ洞穴：宮川湾と北條湾に挟まれた向ヶ崎にあった。工事中に発見されたため詳細は不明である。弥生時代後期の貝層が存在したものと思われる。

向ヶ崎Ｂ洞穴：標高4.2mの所にある。弥生時代後期～古墳時代前期にかけての薄い混貝土層が存在する。アワビ・サザエ・イガイが多く出土している。骨角器では組合せ釣針・稍・鏃が出土している。

西ノ浜洞穴：三崎の標高7.8mの所にある。弥生時代中期（宮ノ台期）～古墳時代後期まで使用されているが，洞穴内はその多くが撹乱されている。洞奥部では破砕貝を多く含む自然貝層上に，人工遺物を包含する貝層が存在する。この貝層からの動物遺存体は，面積の割には多く出土している。貝類ではイシダタミ・クボガイ・スガイ・サザエ・アワビが多く出土している。魚類ではベラ科の一種（キュウセンと思われる）・クロダイ・ウツボが多く出土している。鳥類ではミズナギドリ科の一種，哺乳類ではネズミ類・ノウサギ・タヌキが目立った。土器片は弥生時代後期のものが量的には多いが混在している。骨角器では鹿角製の大型釣針が出土している。洞穴入口付近の壁際の岩盤上からは。有機質の四角い箱状のものに洗骨を埋葬した弥生時代後期の墳墓が存在する。また，洞穴奥部からは洞穴の壁の凹んだ所に，二次埋葬の小児骨の墳墓が存在する。

二町谷遺跡神明社下洞穴：標高６mの所にある。急傾斜地の防災工事に伴う緊急発掘調査の結果，洞穴の下部に炉址が存在することを確認した。時期は不明であるが，堆積している砂層の状態からみて，弥生時代中期の可能性もある。

海外第一洞穴：相模湾に面した標高7.1mの所にある。弥生時代中期（宮ノ台期）～古墳時代前期までは生活の場として使用され，洞穴内には５つの灰層と３つの貝層が存在する。動物遺存体のうち貝類では，イシダタミ・クボガイ・スガイなどの小型巻貝とアワビ・サザエが多く出土している。魚類ではカツオ・マダイ・ウツボ，鳥類ではアホウドリ科の一種・ハイイロミズナギドリ・カモメ類・ウミウ，哺乳類ではイノシシ・ニホンジカが多く出土している。イノシシ・ニホンジカは若い個体が多い。いずれも頭骨から四肢骨まで各部位の骨が出土している。骨角器では釣針およびその未製品・回転銛・稍・鏃・アワビオ

コシが出土している。また，これらの骨角器を製作する際に出た，削り屑も多く出土している。卜骨は約30点出土している。貝庖丁などの貝製品は少ない。

洞穴入口部では14の墳墓が存在する。石槨状墓壙・積石状墓・土壙墓である。1つが古墳時代前期のものである以外は，古墳時代後期のものである。このうち10号墓には土師器の坏とともに鹿角製の組合せ釣針が副葬されている。洞穴奥部には6つの墳墓が存在する。そのうち1つが中世のものである他は，古墳時代前期のものである。

海外第三洞穴：標高7.1mの所にある。急傾斜地の防災工事に伴う緊急発掘調査で，崖崩壊の危険があったため，洞穴の一部を調査したのみである。洞穴内には古墳時代前期の貝層が存在する。動物遺存体のうち貝類では，スガイ・イシタダミなどの小型巻貝が多く出土している。魚類ではクロダイ・コブダイ，鳥類ではウミウ，哺乳類ではニホンジカが出土している。

浜の原洞穴：諸磯湾に面した標高4.2mの所にある。弥生時代後期～古墳時代前期まで使用され，一部に混貝土層が存在する。洞穴奥部に浜の岩を敷いた上に，二次埋葬の墳墓が存在する。

2．集落址と墳墓

出口南遺跡：相模湾に向って突出した標高約40mの台地上にある。遺跡の確認調査で弥生時代後期の竪穴住居址3軒が発見されている。

釜田遺跡：相模湾に向って突出した標高38mの台地上にある。遺跡の確認調査で弥生時代後期の竪穴住居址3軒が発見されている。

赤坂遺跡：三崎海蝕台地の標高約50mの所にあり，面積は約70000㎡と考えられている。三浦半島南部の拠点集落と考えられ，弥生時代中期（宮ノ台期）～後期の竪穴住居址が現在までに100軒以上も発見され，なかには長軸15m・短軸12.2mの巨大竪穴住居址も存在する。遺跡の北部には弥生時代中期（宮ノ台期）の2基の方形周溝墓が存在する。宮ノ台期の住居址のなかには，小型巻貝を主体とする貝塚を伴うものもある。遺物としては管状土錘・鹿角製猪・魚骨・獣骨などが出土している。

がんだ畑遺跡：相模湾に向った標高約54mの台地上にある。遺跡の確認調査で弥生時代中期（宮ノ台期）の竪穴住居址6軒が発見されている。

旧園芸試験場遺跡：相模湾に向った標高約55～60mの台地上にある。遺跡の確認調査で弥生時代の竪穴住居址2軒が発見されている。

藤ヶ崎遺跡：相模湾に面した標高26mの台地上にある。弥生時代中期（宮ノ台期）の竪穴住居址が発見されている。

鵜ヶ島台遺跡（油壷遺跡も含）：相模湾に面する小網代湾と油壷湾に挟まれた，標高約30mの台地上にある。現在までに古墳時代前期の竪穴住居址が18軒発見されている。管状

土錘が出土している。

才京込遺跡：三崎海蝕台地の標高約20mの所にある。弥生時代後期の竪穴住居址が10数軒存在した。学校建設中に出土したため，詳細は不明である。

白須遺跡：諸磯湾の標高20m台地上にあった。古墳時代前期の竪穴住居址が発見されている。

浜諸磯遺跡：相模湾に面する標高4.6mの砂丘上にある。古墳時代後期～奈良・平安時代の集落址で9軒の竪穴住居址と貝塚が存在する。また，住居址の内外に洞穴と同じような灰層（ラミナ）が薄くではあるが広く存在する。動物遺存体のうち貝類では，アワビ・サザエ・ウミニナ・イガイ・マガキ，魚類ではカツオが多く出土している。家畜のウマ・ウシ・ニワトリも出土している。骨角器では牛骨製の組合せ釣針の柄が8本出土している。また，骨角器を製作する際にでた，削り屑も出土している。

二町谷遺跡：弥生時代の住居址が存在するが，市街化が進んでいるために詳細は不明である。

遊ヶ崎遺跡：城ヶ島の北側海岸に接する台地裾の標高7mの所にある。弥生時代中期の須和田式土器が出土している。遺跡の性格は不明であるが，墳墓の可能性もある。

松輪大畑遺跡：江奈湾の北東側の標高31mの台地上に，弥生時代後期～古墳時代前期にかけての，方形周溝墓が2基存在した。現在のところ住居址は発見されていない。

町谷原遺跡：金田湾に面する宮田台地の標高約50mの所にある。弥生時代後期の竪穴住居址が数軒，確認されている。

3．古墳・横穴

六万本（蛭田）古墳：金田湾に面した標高約40mの台地にある。かつては3基の古墳が存在した。古墳としての旧状をとどめないが円墳と思われる。礫床の存在が考えられる。直刀・鉄斧・須恵器が出土している。出土遺物からみて5世紀後葉と考えられる。

金田古墳：金田湾に面した標高約40mの台地上にある。古墳時代後期の円墳と考えられている。

金堀塚遺跡：浦賀水道に面する標高34mの台地上から埴輪片が出土している。かつて古墳があったものと思われる。

向ヶ崎古墳：北條湾の東側台地上にあった。円墳と考えられている。埴輪からみて6世紀後半のものと考えられている。

蛭田横穴群：六万本古墳の存在した台地の東崖面に4穴の横穴が確認されている。

高抜横穴群：金田湾に向って開く谷の崖に，7世紀～8世紀の横穴が17穴確認されている。

岩浦（いわぶ）横穴群：金田湾に面する台地の崖に4穴の横穴が確認されている。

唐池横穴群：金田湾に向って開く谷の崖に10穴の横穴が確認されている。

雨崎横穴群：雨崎洞穴の裏の谷の崖に６穴の横穴が確認されている。

勝谷横穴群：雨崎洞穴から続く北側の崖に５穴の横穴が確認されている。

金掘塚横穴群：浦賀水道に面する台地の崖に，２穴の横穴がが確認されている。

間口横穴群：間口湾に向って開く谷の北側の崖に，８穴の横穴が確認されている。

剣崎横穴：相模湾に向って開く谷の東側の崖に１穴確認されている。直刀・刀子が出土している。

松輪横穴：江奈湾に面する東側の崖に，１穴の横穴が確認されている。

松輪坪井横穴群：江奈湾に面する南側の崖に，３穴の横穴が確認されている。１号穴からは７世紀中葉から後葉にかけての，須恵器無頸壷が出土している。

江奈横穴群：江奈湾に面する南側崖面に，３穴の横穴があった。横穴の形態などからみて，７世紀後半～８世紀初頭にかけての横穴である。２号穴からは土師器・須恵器・直刀・刀子・鉄鏃・弭・管玉・棗玉・金銅環・鉄製組合せ釣針など，多くの遺物が出土している。

坂の下横穴群：宮川湾の西側の崖に，11穴の横穴があった。古墳時代後期前葉の横穴群出ある。１号穴には横穴の左壁に平行した岩塊列があり，岩のしたに５～６cmのやや固い土が置かれ，左壁との間より朽ちた人骨が出土している。ここからはボウシュウボラやメノウ製勾玉などが出土している。７号穴では火葬骨が50cmの範囲で厚く散在している。９号穴では５体の人骨が出土している。そのうち４体が頭を南に向け，１体が頭を北に向けて出土している。伸展葬である。須恵器の台付壷・提瓶・直刀・刀子・鉄鏃・メノウ製勾玉などが出土している。

窪がり横穴群：坂の下横穴群に続くものであり，25穴の横穴があった。１号穴では須恵器の埦片が出土している。２号穴では須恵器片・鞘の金具？などが出土している。７号穴では須恵器片が出土している。８号穴では火葬骨が存在し，須恵器の瓶が出土している。９号穴からは須恵器大坩・土師器大坩・坏・刀子などが出土している。12号穴からは８個の頭骨が出土している。14号穴からは３体分の人骨が出土しており，頭を羨道に向けている。伸展葬かと思われる。人骨以外では須恵器の蓋付の坏・瓶・坏・鉄鏃・直刀が出土している。16号穴では人骨が散乱状態で出土し，人骨以外では須恵器片・直刀が出土している。17号穴では人骨以外の遺物はない。23号穴では須恵器片・土師器片（鬼高期）が出土している。25号穴では人骨以外の遺物はない。

晴海（はるみ）町横穴群：窪がり横穴群から続くものであり，横穴が５穴あった。出土遺物からみて，７世紀末～８世紀初頭の横穴群である。１号穴では玄室中央部で，径130cmの範囲で密に火葬骨が存在する。人骨以外では土師器坏・ガラス小玉が出土している。２号穴では火葬骨が存在し，須恵器坏・蓋片が出土している。５号穴では人骨片と刀子が出土している。

晴海町第二横穴群：向ヶ崎洞穴群の西隣に3穴の横穴があった。

二町谷横穴群：二町谷の海岸に面して6穴の横穴があった。7世紀後半～8世紀初頭のものと考えられる。横穴群に接して二町谷神社下洞穴がある。

Ⅲ　ま と め

1．三浦半島南部の海蝕洞穴遺跡の共通性

① 洞穴が人々によって，主として生活の場として使用されるのは，弥生時代中期（須和田期）～古墳時代前期（五領期）までである。古墳時代後期以後は，主として埋葬の場として使用される。生活の場として使用された洞穴の下部には，厚い灰層や貝層が堆積している。生活址としての洞穴下部には，その壁ぎわに洗骨された人骨を葬った再葬墓も存在する。

② 貝層を構成する貝類は，クボガイ・コシダカガンガラ・イシダタミ・スガイ・バテイラなどの小型巻貝とアワビ・サザエである。いずれも岩礁海岸に棲息する貝類である。

③ 魚類ではサメ類・マダイ・カツオ・コブダイ・ウツボなど，外洋や流れのはやい海に棲息する魚が多い。

④ 鳥類ではウミウ・ヒメウ・ミズナギドリ類・アホウドリ類・カモメ類の海鳥が多い。三浦半島の縄文時代の貝塚と比べて，その種類・量とも多く出土している。

⑤ 哺乳類ではイノシシ・ニホンジカ・ノウサギ・タヌキが目立って出土している。イノシシとニホンジカの個体の状態をみると若い個体が多く，性別に関係なく取っている。イノシシの一部にブタの可能性が考えられるものもあるが，多くはイノシシとみてさしつかえない。

⑥ 人工遺物では土器・卜骨・貝庖丁・貝輪の他，釣針・回転銛・稽・アワビオコシなどの漁撈具を多く出土している。漁撈具や貝，魚骨からみて漁撈が盛んに行われていたことがうかがえる。漁撈の中心は釣針による釣漁法・回転銛や稽による刺突漁法・アワビオコシなどによる貝の直接採集である。網錘の出土量が少ないことより，網漁法はあまり行われていない。

⑦ 弥生時代中期～古墳時代前期の生活層にある墳墓は，洞穴の壁の小洞や凹みに洗骨した人骨の一部を再葬した墳墓が多い。その墳墓は単に人骨を置いたものもあれば，人骨の上に積石をしたものもある。

⑧ 古墳時代後期以後の墳墓は，その多くが伸展葬である。墳墓の形態は，岩塊を敷き屍を置いてその上に岩塊を積んだ積石墓・石槨墓・土壙墓である。副葬品の存在するものもあればないものもある。

2．洞穴ごとの特殊性

① 海外第一洞穴をはじめとして多くの洞穴で，主体となる魚が外洋や流れのはやい海に棲息するカツオやマダイであるのに対し，西ノ浜洞穴ではカツオやマダイは少なく，内湾に棲息するクロダイやキュウセン属が多く出土している。西ノ浜洞穴の近くで同じ環境にある，海外第一洞穴などと大きく異なる点である。

② 大浦山洞穴をはじめとして多くの洞穴では，イノシシやニホンジカの出土量は少ない。こられに対して雨崎洞穴と海外第一洞穴ではイノシシ・ニホンジカが多く出土している。この２つの洞穴ではこれらの骨や角とともに，これを使った骨角製漁撈具の未製品や製作する際に出た，削り屑も多く出土している。さらに，イノシシやニホンジカも骨角器に使う角や中手・中足骨だけでなく他の部位の骨も多く出土している。このことより，洞穴においてイノシシやニホンジカの解体処理が行われていたと思われる。

③ 漁撈具以外の人工遺物では，ベンケイガイ製の貝輪およびその未製品が大浦山洞穴と間口Ａ洞穴で多く出土している。また，大浦山・毘沙門Ｂ・Ｃの各洞穴ではアワビ製の貝庖丁が多く出土している。ベンケイガイ製貝輪・アワビ製貝庖丁ともに，他の洞穴での出土量は少ない。

④ 古墳時代前期までの墳墓の多くは，洞穴の壁の小洞や凹みに洗骨された若干の人骨を埋葬した墳墓であるが，雨崎洞穴では古墳時代前期に，木棺の中に洗骨を入れた埋葬や火葬が行われている。毘沙門Ｃ洞穴では弥生時代後期に伸展葬でその上下に藁ござを敷き，その上を岩塊で全面を覆った墳墓が存在する。また，毘沙門Ｄ洞穴でも弥生時代後期の石槨状墓が存在する。

3．洞穴と集落址・墳墓の関係

① 雨崎洞穴や毘沙門洞穴のある浦賀水道～相模灘側の台地には，弥生時代中期～古墳時代の集落址は現在のところ，松輪大畑遺跡では方形周溝墓は存在するものの住居址は発見されていないため，確実な集落址は雨崎洞穴から約4.8km離れた町谷原遺跡しかない。これに対して海外洞穴などがある相模湾側には，才京込や赤坂など大小の集落址が存在する。

② 弥生時代中期～古墳時代前期の台地上の集落址からも，洞穴と同じように漁撈を行っていたことを示す遺構・遺物が出土している。赤坂遺跡では宮ノ台期の１つの住居址内に，バテイラなどの小型巻貝を中心とする貝層が存在したり，少量ながら魚骨や骨角製の稽も出土している。また，網錘に使われた管状土錘が赤坂遺跡と鵜ヶ島台遺跡で少なからず出土している。これに対して洞穴からの土錘・石錘・角錘の出土例は非常に少ない。

③ 弥生時代中期～古墳時代前期のある墳墓の関係では，洞穴内のものは縄文時代晩期か

らの系統を引くと考えられる再葬墓であり，台地上のものは西から伝わった方形周溝墓というように，まったく異なるものである。

古墳時代後期以後については，赤星が述べているように洞穴が横穴と同じように使用されている。雨崎・間口洞穴のように洞穴のすぐ近くに横穴群があることや洞穴内の墳墓の副葬品と横穴の副葬品が同じようなものであるからである。また，海外第一洞穴と江奈横穴で組合せ釣針が副葬されているように，特殊な遺物についても同様である。さらに，洞穴の一部にも火葬骨が存在する。しかし，異なる点もある。洞穴の墳墓の場合，壁にそって岩塊で屍を囲ったり積石をするのに対し，横穴では坂の下横穴群に1穴このような可能性のあるものが認められるが，他の横穴ではこのような積石などは認められない。さらに，洞穴の場合，横穴と同じような墳墓として使用されるのが平安時代までに入るのに対し，現在のところ横穴そのものでは平安時代のものは認められない。

④ 洞穴が漁撈を中心とした生活の場として使用されるのは古墳時代前期までで，それ以後，漁撈を生活の中心とした人々の住居は，浜諸磯遺跡にみられるような砂丘上に移る。洞穴と浜諸磯の共通点をみると，洞穴内に残された同じ灰層（ラミナ）が浜諸磯にも存在する。動物遺存体のうち貝類では，小型巻貝は少ないがアワビ・サザエが多く，魚類ではカツオが多く出土している。また，骨角器を製作する際に出た削り屑も多く出土している。網錘が少ない。反対に異なる点としては，洞穴では少なかった曳き釣りや一本釣りに用いた組合せ釣針が多く出土している。動物遺存体では洞穴では比較的多かった鳥が少なく，反対に洞穴ではみられなかったウマ・ウシ・ニワトリの家畜がみられる。

Ⅳ 考 察

洞穴には共通点も多いが，各洞穴ごとの特色もある。イノシシやニホンジカを多く出土した雨崎洞穴と海外第一洞穴，クロダイなど内湾性の魚を多く出土した西ノ浜洞穴，ベンケイガイ製の貝輪を多く出土した大浦山洞穴・間口A洞穴，アワビ製の貝庖丁を多く出土した毘沙門B・C洞穴。これらの各洞穴が同時期に存在したとするならば，赤星が「金石併用時代の漁民」で提起した“分業”が，さらに多く行われていたと考えられる。

洞穴の生活層と同時期の台地上の集落址との関係では，岡本は赤坂遺跡が「拠点」で洞穴はそのわかれとしており，赤星も特に相模湾側の洞穴は，背後の台地上の遺跡からみて，漁期だけ生活を行っているのではないかとしている。すなわち台地上の集落の人間が移動して洞穴で生活をしていると考えている。

その後，相模湾側に赤坂遺跡以外にも才京込遺跡など洞穴の生活層と同時期の集落址が増加したことや，赤坂遺跡からも住居址内の貝塚や漁撈具としての網錘・稽および魚骨が存在することがあきらかにされたことは，岡本・赤星の考えをさらに補強するものとなる。

しかし，神澤が述べるように葬制の面からみると，洞穴では洗骨による再葬墓であり，台地上の集落は方形周溝墓であることから，それぞれが別の集団ということも考えられる。

筆者も洞穴から出土する魚骨が外洋や流れのはやい沖で取り，しかもその漁期の中心が農耕の忙しい時期と重なるカツオやマダイであること。漁法も洞穴では釣針や回転銛を中心としたもの，台地上の集落では網を中心としたものということから考えて，それぞれ別の集団と考える。さらに洞穴から出土したイノシシの骨からみると，ブタの可能性のある骨が雨崎洞穴から1点出土しているが，多くはイノシシとみてよい。洞穴が台地上の集落のわかれであるならば，イノシシよりもブタが多く出土してもよいのではないだろうか。

古墳時代後期以後の洞穴内の墳墓は，横穴とは異なる点もいくつかあるが，横穴の代用と考えてみてよいのではないだろうか。

漁撈を中心とした生活の場が，洞穴を出て砂丘上に移る要因としては，洞穴内の灰層や貝層の堆積が厚くなり，洞穴内で生活しにくくなった，ということが一つには考えられる。しかし，それ以外にも漁撈技術の発達により，曳き釣りやカツオの一本釣が漁の中心になること，一部の横穴や一部の洞穴内の墳墓に，組合せ釣針が副葬品としておかれることにみられる社会の変化，さらにはウマ・ウシ・ニワトリの出現も，何らかの要因としてあるのではないか。

V　おわりに

赤星直忠が三浦半島南部の海蝕洞穴遺跡の調査研究を始めてから50年近くになる。今回は赤星直忠・岡本勇・神澤勇一・金子浩昌の研究やその後の洞穴の調査・周辺の遺跡の調査の成果を取り入れて，洞穴の共通性と特殊性・洞穴と周辺の遺跡の関連についてまとめてみた。しかし，大きな問題である，洞穴が赤坂遺跡など台地上集落の分村としてあるのか，あるいは別の漁撈や狩猟・貝製品の製作を生業とする専門集団なのかはっきりすることができなかった。筆者としては動物遺存体などからみて後者の方が強いと考えるが，あるいはその移行期なのかもしれない。この問題を解決するには今後の課題として，洞穴と台地上集落址出土の動物遺存体の数量的な分析や土器の比較検討などが必要である。

この稿を書くにあたっては，三浦市教育委員会の飯島重一氏と横須賀市人文博物館の稲村繁氏には，いろいろお世話になりました。ここに厚くお礼を申しあげるしだいです。

引用・参考文献

三浦市教育委員会　1991 『三浦市遺跡分布地図及び遺跡一覧表』

赤星直忠　1953 「海蝕洞窟」『神奈川県文化財調査報告』20　神奈川県教育委員会

赤星直忠　1952 「金石併用時代の漁民」『漁民と対馬』 九学会連合

釼持輝久　1972 「三浦半島における漁撈について」『物質文化』19　物質文化研究会

岡本　勇　1977 「三浦半島南部における弥生時代遺跡の分布」『三浦市赤坂遺跡』赤坂遺跡調査団

神澤勇一　1979 「南関東地方弥生時代の葬制」『どるめん』23　ＪＩＣＣ出版局

金子浩昌　1980 「弥生時代の貝塚と動物遺存体」『三世期の考古学』上　学生社

赤星直忠　1969 「雨崎洞穴調査慨報」『横須賀考古学会年報』13・14　横須賀考古学会

赤星直忠　1963・64 「大浦山洞穴調査慨報（第２・３次)」『横須賀考古学会年報』８・９ 横須賀考古学会

赤星直忠　1967 「三浦半島の洞穴遺跡」『日本の洞穴遺跡』 平凡社

赤星直忠　1970 『穴の考古学』 学生社

横須賀考古学会　1984 『三浦半島の海蝕洞穴遺跡』 横須賀考古学会

金子浩昌　1967 「洞穴遺跡出土の動物遺存体」『日本の洞穴遺跡』 平凡社

鈴木　尚　1983 『骨からみた日本人のルーツ』 岩波書店

神澤勇一　1972・73・74・75「間口洞穴遺跡」『神奈川県立博物館発掘調査報告書』 6・7・8・9 神奈川県立博物館

浜田勘太　1958 「三浦市南下浦町松輪間口Ｂ海蝕洞窟」 謄写版刷

西ノ浜洞穴調査団　1983 『三浦市西ノ浜洞穴』 神奈川県土木部

急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1995 『三浦市二町谷神明社下海蝕洞穴遺跡』 急傾斜地区埋蔵文化財調査団

海外洞穴調査団　1983 「三浦市海外洞穴調査の慨報」『横須賀考古学会年報』26　横須賀考古学会

三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1986 『三浦市海外三号洞穴遺跡の調査』三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団

中村　勉　1991 「三浦市浜ノ原洞穴について」『三浦市埋蔵文化財調査報告』1　三浦市教育委員会

三戸・小網代地区遺跡調査団　1988・89 『三浦市三戸・小網代地区遺跡詳細分布調査Ⅰ・Ⅱ』 三浦市教育委員会

赤坂遺跡調査団　1992 「赤坂遺跡にみる遠い祖先のくらし」『三浦市埋蔵文化財調査報告書』 2 三浦市教育委員会

中村　勉　1994 「三浦市赤坂遺跡第８・９次調査」『横須賀考古学会年報』29　横須賀考古学会

中村　勉・諸橋千鶴子　1995 「三浦市初声町赤坂遺跡12・14次調査」『横須賀考古学会年報』30 横須賀考古学会

鵜ヶ島台遺跡調査団　1994 「三浦市鵜ヶ島台遺跡」『横須賀考古学会年報』29　横須賀考古学会

須田英一　1994 「三浦市油壷遺跡」『第19回　神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』 神奈川県考古学会

浜諸磯遺跡調査団　1991 「浜諸磯遺跡」『三浦市埋蔵文化財調査報告書』 1　三浦市教育委員会

神澤勇一・浜田勘太　1963 「三浦市遊ヶ崎遺跡調査慨報」『横須賀市博物館研究報告』(人文科学) 7　横須賀市博物館

神奈川県教育委員会　1981 「松輪大畑遺跡」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』22　神奈川県教育委員会

赤星直忠　1953「神奈川県三浦郡蛭田古墳」『日本考古学会年報』5　日本考古学協会
稲村　繁　1993「三浦半島の古墳－三浦市蛭田古墳の出土遺物について－」『横須賀市博物館研究報告』（人文科学）38　横須賀市人文博物館
稲村　繁　1992「三浦半島の埴輪（Ⅰ）」『横須賀市博物館研究報告』（人文科学）37　横須賀市人文博物館
稲村　繁　1994「三浦半島の古墳（Ⅱ）－三浦半島における出現期の古墳について－」『横須賀市博物館研究報告』（人文科学）39　横須賀市人文博物館
高抜横穴群発掘調査団　1986『高抜横穴群の調査』高抜横穴群発掘調査団
浜田勘太　1969「剣崎横穴について」『横須賀市考古学会年報』13・14　横須賀考古学会
急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1990『三浦市二町谷横穴群・西野やぐら群・松輪坪井横穴群の調査』急傾斜地区埋蔵文化財調査団
赤星直忠　1976『三浦市江奈横穴群』　横須賀考古学会
浜田勘太　1990「三浦市三崎町六合　窪がり・坂の下横穴群について」『横須賀考古学会年報』28　横須賀考古学会
三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1985『三浦市晴海町横穴群の調査』三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団
急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1995『神奈川県三浦市二町谷神明社下海蝕洞穴遺跡・二町谷横穴群』急傾斜地区埋蔵文化財調査団
釼持輝久　1990「三浦半島の海蝕洞穴遺跡における弥生時代の鳥猟について」『横須賀考古学会年報』28　横須賀考古学会
晴海横穴群文化財調査団　1987『三浦市晴海町第2横穴群の調査』晴海横穴群文化財調査団

大磯町の横穴墓群

── 詳細分布調査の成果と課題 ──

鈴木一男・國見　徹

はじめに

大磯丘陵に横穴墓群が集中しているのは，既に周知の事実であり，特に大磯町においては，遺跡の約半数が横穴墓群で占められていることは，まさにこれを裏付けているものと理解できる。

横穴墓の造営場所は，一般的に谷の斜面にみられるが，容易に肉眼で確認できるため，古くから研究者にとって関心のおよぶところとなった。すなわち，1886年（明治19）細木松之助が東京人類学会雑誌に「高麗山ノ西二続ケル小丘ノ南腹ニ横穴数個アルヲ」と紹介したのを皮切りに（細木1986），翌年には山崎直方，若林勝邦らが同誌に大磯町の横穴墓群を紹介していることからも充分窺い知ることができる（山崎1887・若林1887）。また，相前後して横穴＝住居説と墳墓説の学問的論争の出発点ともなった『吉見百穴』の調査も行われ，研究者と言うよりもむしろ学会としての関心が横穴墓に向けられていたこともその背景にあったようである。それ以後，大正～昭和にかけて石野　瑛・赤星直忠らにより調査・研究が行われ[(1)]，横穴墓群の編年の基礎として用いられ，広く一般にも知られるようになったわけである。

その一方では，古来より墓盗人のターゲットにもなっていたようであり，大半の横穴墓がその被害に遭遇していると言っても過言でないほど，内部が攪乱されている事例がみられるが，これは既開口墓の多さが如実に物語っている。この原因は，前述した立地にあるが，自然環境の中の人為的工作物という観点から考えると，風水害を初めとする自然界の影響を真面に受け，埋没あるいは消滅，場合によればそれが原因で発見といった幾つかのパターンが想像される。いずれにしても大多数の横穴墓はおよそ1300年経過してもそれを維持していることは，驚異としか言いようがないわけである。

大磯町では，平成２年～５年にかけて立正大学にお願いし，横穴墓群の実態調査を実施した。これは当初，横穴墓群の位置や規模を把握するとともに，その成果を遺跡地図や台帳に反映させることを目的にしたものであったが，結果的に個々の横穴墓の略測にまで発展し，予想外の成果を納めるに至った。その一部は，大磯町郷土資料館資料５「大磯町の横穴墓群」として公表されているが，内容は当初目的の結果だけであり，分析結果を掲載しているものではない。そこで，貴重な紙面をお借りして，全貌をここに公表することにしたわけである。

調査の概要

実施した調査は，測量及び記録用器材を携行し，現地到着後，各班に別れ，個々の横穴墓の略測と横穴墓群内における位置関係の把握と言った極く単純なものであった。しかし，遺跡地図にプロットされている場所に無かったり，基数が合わなかったり，調査開始以前に大きな壁が立ちはだかっていたわけである。そして，いよいよ横穴墓の内部調査に移行する段になると，流入土が多く内部に侵入できなかったり，崩壊寸前で非常に危険であったり，はたまた断崖絶壁で辿り着けなかったり，まさに苦難の連続であった。以下に年度別に概要を記すことにする。

［平成２年度］

調査対象：大磯地区に分布する横穴墓群　調査期間：平成３年２月12日～同年２月18日

調査人数：のべ84人　調査成果：28群245基

［平成３年度］

調査対象：国府地区に分布する横穴墓群　調査期間：平成４年２月17日～同年２月29日

調査人数：のべ87人　調査成果：18群135基

［平成４年度］

調査対象：別荘地内に分布する横穴墓群　調査期間：平成５年２月15日～同年２月27日

調査人数：のべ80人　調査成果：２群14基（発掘調査３基あり）

［平成５年度］

調査対象：所在不明確な横穴墓群　調査期間：平成６年２月21日～同年２月27日

調査人数：のべ85人　調査成果：16群83基

このように４年，のべ336人に及ぶ人員を使っての調査の結果，64群477基の横穴墓を確認することができた[2]。遺跡台帳では77群537基存在することになっているが，既に消滅してしまったものが８群48基あるので，実数は69群489基となる。そして，調査の結果横穴墓ではないものが２群２基存在したので，机上での実数は，67群487基となる。また，踏査の結果ついに確認できなかったものが３群15基存在する。これらは周辺の環境を考慮すると，埋没と言うよりはむしろ消滅した可能性が高い。

ちなみに，昭和39年，池田彦三郎・鈴木　昇らが調査した時点では71群488基[3]，また昭和53年台帳整備事業として調査した時点では64群411基といった数値が残っている。横穴墓の性格上，造営当初の基数が不明であるため，数値が変化するのは否めないが，今回の調査結果をひとつの指針として活かしていきたいと考えている。具体的には，個々の横穴墓のデーターや横穴墓群の概要は，写真や図とともに，それぞれ年度別にホルダーに整理されているので，今後は３～５年の間隔で追跡調査を実施し，実態の把握に努めていきたいと考えている。

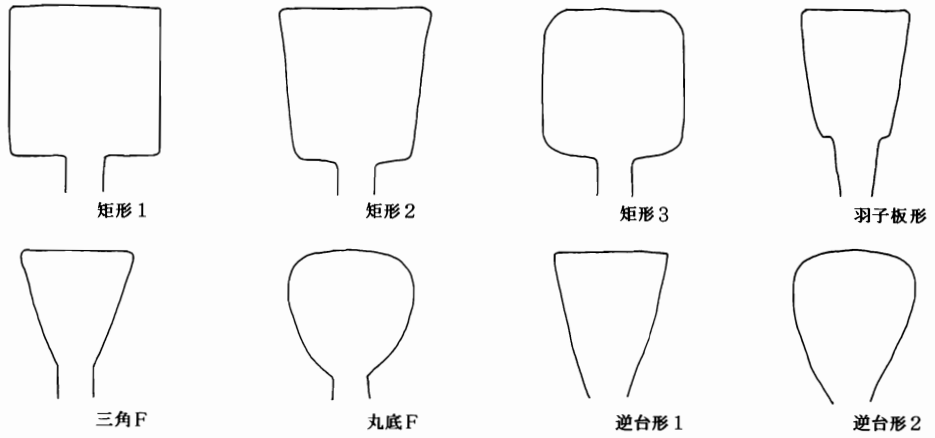
分析の方法と課題

詳細分布調査及び略測という性格上，そこから得られた成果には自ずと限界があることは否めないが，とりあえず開口方向は勿論，基本的事項として天井形態，平面形態，内部施設，壁面装飾の５項目を設定し，個々の横穴墓のデーターを当て嵌める方式をとった。

結果を述べる前に，その前提と分析上の問題点等を列挙しておく。

まず，天井形態は古くから指摘されている，ドーム・アーチ・家形を設定した。実際には，前二者にはその中間形態が存在し，判断しかねる場合も多々あった。

次に，平面形態では第１図のような模式図にしたがって分類した。基本的には，矩形１は正方形ないし長方形平面，矩形２は前者がやや崩れ，矩形３は所謂隅丸方形プランを呈するもので，いずれも前壁を有し，玄室と羨道は整然と区別される。また，逆台形１と２は，玄室と羨道の区別が無いもので，１が直線的であるのに対して，２はコーナーが丸みを帯びているものである。これに対して三角フラスコ（三角Ｆ）及び丸底フラスコ（丸底Ｆ）は，同じような形態でありながら，玄室と羨道との区別がくびれにより認められるものであり，さらに羽子板形は，矩形２と三角フラスコの中間的形態である。しかるに，実際にはかなりの混乱を招く結果となってしまった。たとえば，三角フラスコと逆台形１，または丸底フラスコと逆台形２などは，図によっては判断しにくい面もあり，ちょっとした線の引き方で異なったタイプに分類されてしまうわけで，多分に主観が入り込むという欠点を有している。さらには同じタイプ内での相違等，判断基準が曖昧になり，ややもすると無理やり当て嵌めざるを得ない場合も正直多々あった。この原因は，流入土の多少にもあるが，測点の位置による形の変化もそのひとつではないかと考えられる。



第１図　平面形態模式図

特に前者は，内部施設にも影響を及ぼしている。すなわち，排水溝と礫敷の数値の低さである。この二つの項目は，発掘調査により初めて正確な数値が得られるもので，分布調査では，当然全くと言って良いほど信用できない数値となっている。

壁面装飾では，天井部を蛇腹状に仕上げる肋骨仕上げと時期は不明ながら古くから指摘されている線刻の2項目の他に，漆喰という項目を設定した。しかしながら，未だ鑑定結果を得られていないため，白色顔料と理解して設定していることを予めお断りしておきたい。

そして，なにより一番気にかかっていることは，天井・平面両形態において，各々約1/3程度が不明となっている点である。これらがどのように分類されるのかによって，後述する分析結果もかなり左右され，大幅な修正が必要になるものと予想されるのである。

分析結果

大磯町における横穴墓群の分布は第2図のとおりで，およそ6つのグループに分けることが可能である。中でも大磯駅北方に位置する楊谷寺谷戸横穴墓群を中心としたⅡグループと西方寄りに位置する，たれこ谷戸西横穴墓群を中心としたⅥグループは群数及び基数とも他のグループを圧倒しており，さしずめ東西を代表する墓場の谷を形成している。

(1) 総体的な特徴

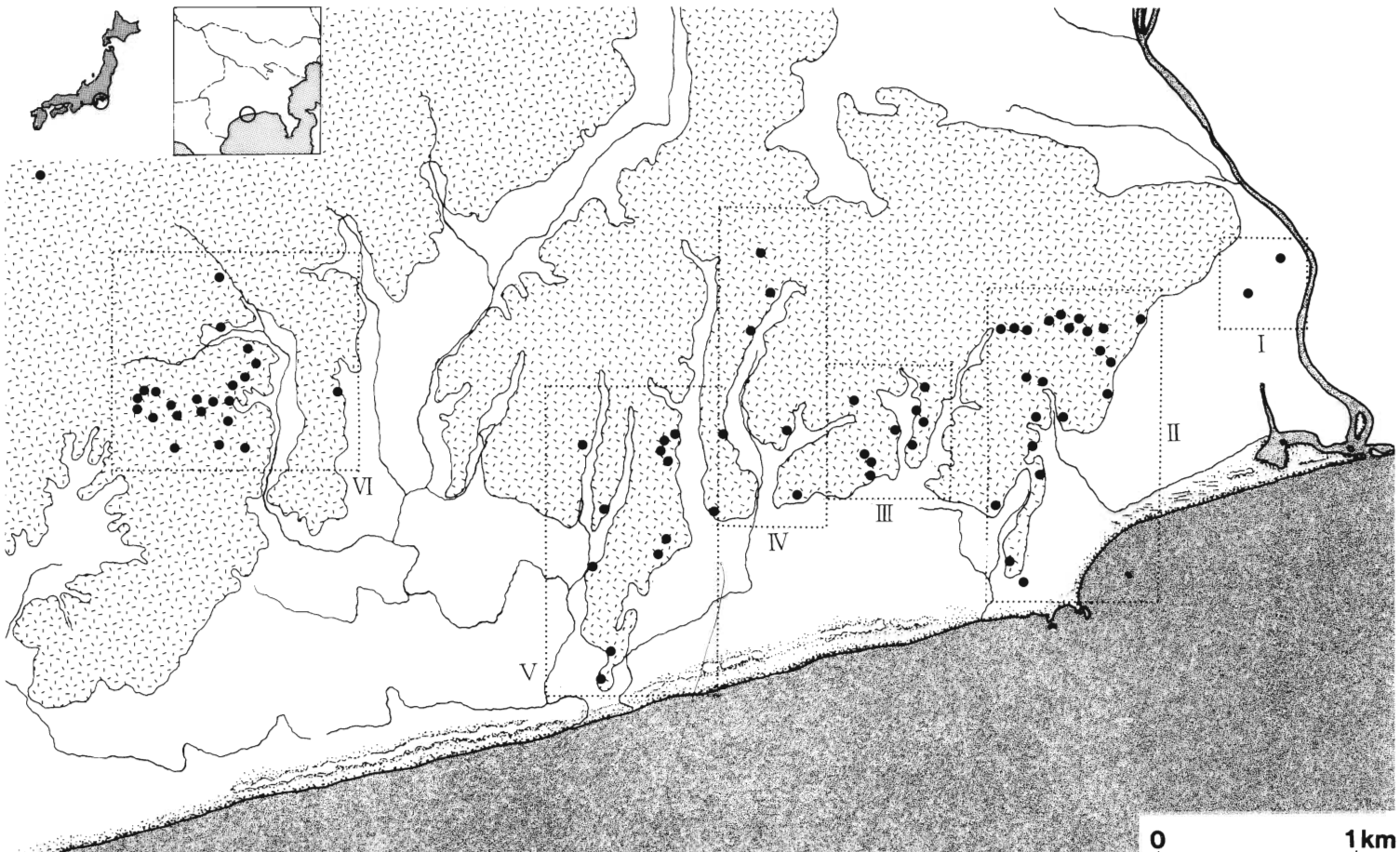
個々の横穴墓群の開口方向は64群中，南方向のものが19群と最も多く約1/3を占め，これに南東及び南西方向のものを加算すると，半数以上の横穴墓群が該当する結果となった。ちなみに，南方向の19群及び東～西，南東～西，南東～南西にかけて開口する5群を除き，東～南に開口するものは21群，南～西に開口するものは19群あり，いずれかに偏る傾向は読み取れなかった。

天井形態では総基数477基のうち，形態を窺い知ることができた343基を対象とした。その結果，ドーム形を呈するものは83基，アーチ形253基，家形8基という数値を得た。これは各々，24%，74%，8%という比率になり，圧倒的にアーチ形天井が多いと結論付けれよう。

次に平面形態は，把握できた344基を対象としたが，半数以上の180基が所謂玄室と羨道の区別の無い逆台形1を呈し，逆台形2の数値を加算すると，実に全体の約63%の217基に達した。また，区別の明確な矩形1～3は49基で，全体の約14%，ある程度区別が認められるフラスコ類及び羽子板形は66基で，全体の約19%という数値を得た。

天井形態と平面形態の組み合わせは，明らかに読み取れる48群298基を対象に行った結果，第3表に示したとおり，逆台形1＋アーチ形が約半数を占めることがわかった。両形態分類の結果がそのまま反映したものと言えよう。

また，玄室と羨道の区別の無い逆台形2においては，若干ドーム形が見られるものの，



第2図　横穴墓群分布図　1/35,000（明治15年測量地形図をもとに作成）

第1表　大磯町における横穴墓群一覧表（1）

No.	名称	基数	開口方向	天井形態				平面形態										内部施設					壁面装飾		
				ドーム	アーチ	家形	不明	矩形1	矩形2	矩形3	逆台形1	逆台形2	三角F	丸底F	羽子板	不整形	不明	排水溝	棺座	石棺	礫敷	龕	漆喰	線刻	肋骨仕上
1	善福寺	13	南～南西	3	4		6				3	1		4		2	3								
2	高麗	0																							
3	滝之沢	8	東	6	1		1		1	3	1			2	1		1	1	2						
4	前谷原	3	南西～西	1			2										3								
5	火葬場西	3	南				3										3								
6	後谷原南	8	南西～西	2	2		4			1				2	1		4		1						
7	後谷原北	4	西		2		2				2						2								
8	南井戸窪	6	東	1	1	4		2	2	1	1								2						
9	石切場東	6	南西	1	4		1				4				1		1			1					
10	石切場	11	南東		7	1	3	1			5		1		1		3				1		4		
11	楊谷寺東	1	南				1										1								
12	楊谷寺谷戸	21	南～南西	1	14	2	4		2	2	3	2		2	4		6								
13	楊谷寺西	11	南東		9		2				8	1					2								
14	紅葉山	6	東				6										6								
15	宝珠山	3	南				3										3								
16	漆ケ窪	—																							
17	坂田山北	8	東～南東		3		5			1	2						5								
18	坂田山南	6	南西				6				1						5								
19	坂田山付	9	南	1	4		4		2		2			1			4								
20	王城山	14	西	9	3		2		1	8	2						3		2	1					
21	釜口下	1	南				1										1								
22	大磯駅東	0																							
23	駅前	0																							
24	招仙閣	—																							
25	愛宕山	7	南東～南西	3	1		3			2	2	1		1			1								
26	愛宕山下	1	南		1						1														
27	南中尾	—																							
28	北中尾（1）	0																							
29	北中尾（2）	5	西		1		4				1						4								
30	善兵衛池	3	南	2	1						2				1						2				
31	清水北	15	南	2	8	2	3			2	7		1		1		4		1	1	2			1	
32	清水南（2）	0																							
33	清水南（1）	0																							
34	立野	9	南～南西	1	5		3		1		2	2	1		1		2						1	1	1
35	代官山	0																							
36	穴虫	3	南	2	1							1				1	1								
37	谷戸口	3	南～西		3						1	2													
38	谷戸	4	東				4										4								
39	高平穴口	6	東～南東	1	4		1					4					2		1						
40	高平	5	東		1		4				1						4							1	
41	本郷山	23	東～南	7	11		5			1	13	2	1	1	1		4			1					
42	金久保北	7	東～南	1	3		3				4						3								
43	金久保南	18	南～西		13		5				11						7								1
44	真楽寺南	4	南東		4						4										1				
45	真楽寺下	2	東	1	1						2														
46	辻端東	5	南	2	1		2			1	1	1					2								
47	辻端	22	南東～南	4	12		6		2		8	5		1			6			2	1	1			3
48	城山	20	東～西	4	10		6			4	8		2	1		2	3	1	4						
49	切通	7	南	1	3		3				2					2	3								
50	堂後下	13	南東	5	7		1			3	3	1	1	2		2	1				2			4	
51	庄ケ久保	8	東		8						4	1	3									1		1	1
52	下田	18	南	3	15						4	2	6	4		1	1				1		3		1

第２表　大磯町における横穴墓群一覧表（２）

No.	名　称	基数	開口方向	天井形態				平面形態										内部施設					壁面装飾		
				ドーム	アーチ	家形	不明	矩形1	矩形2	矩形3	逆台形1	逆台形2	三角F	丸底F	羽子板	不整形	不明	排水溝	棺座	石棺	礫敷	竈	漆喰	線刻	肋骨仕上
53	たれこ谷戸西	28	東～南	6	17		5				17	2	1			1	7					1	4		1
54	ごみ焼き場	2	南東		2						1	1											1		1
55	ぼったり	0																							
56	権現入田	8	南東～西	3	4		1			1	2	1		3			1						1		1
57	がまん谷戸東	9	東～西		3		6			1	2						6								2
58	がまん谷戸西	6	東～南	2	4						3	2	1								1			1	4
59	権現山東	1	南西		1						1														1
60	権　現　山	1	南西		1										1							1	1		
61	東　奥　沢	15	南東～南西		15						13		1				1		2		1		1	1	3
62	大　谷　入	5	南	2	3					1	1	1	2												2
63	西奥沢Ⅰ	5	南		3		2				3		1				1								2
64	西奥沢Ⅱ	4	南西		3		1				2		1				1								1
65	西奥沢Ⅲ	4	南		4						4														
66	西奥沢Ⅳ	2	南西		2						2														
67	西奥沢Ⅴ	7	南西		7						4		3												4
68	西奥沢Ⅵ	0																							
69	たれこ谷戸東	15	南	2	13					2	7	3	2			1							2	1	1
70	黒　　岩	0																							
71	出　　岩	1	南東				1										1								
72	前谷原北	4	西	1	1		2			1		1					2								
73	城　山　西	2	南西		1		1				2														
113	西奥沢Ⅶ	1	南		1						1													1	1
130	榎　久　保	1	南東				1										1								
163	出　岩　向	5	南				5										5								
166	権　現　田	1	南	1										1											
合　計		477		81	253	9	134	3	11	35	180	37	28	25	13	12	134	2	15	6	12	4	18	12	31

主流はやはりアーチ形である。

しかし，同じような形態の丸底フラスコでは，逆にドーム形が主流を成しており，相違が見られる。一方平面形態が直線的な構造を示す，三角フラスコや羽子板形ではアーチ形が主流を占めている傾向が読み取れ，ある程度平面形で天井形態が左右されるようである。

第３表　類型別基数

組み合わせ	基　数
矩　　形＋ドーム	31
矩　　形＋アーチ	10
矩　　形＋家　形	9
逆台形１＋ドーム	13
逆台形１＋アーチ	143
逆台形２＋ドーム	9
逆台形２＋アーチ	24
三　角　F＋ドーム	1
三　角　F＋アーチ	24
丸　底　F＋ドーム	17
丸　底　F＋アーチ	5
羽　子　板＋ドーム	3
羽　子　板＋アーチ	9

矩形の場合は，ドーム・アーチの他，家形を呈するものが見られるが，数は少なく，やはりドーム形が主流を成すようである。

内部施設のうち，排水溝と礫敷については先に述べたとおり調査の性格上，信頼できる数値にはならないので，省略するが，特に礫敷は当地域周辺では普遍的に存在するものであり，その数は相当数にのぼるものと考えられる。また，石棺及び棺座の付設は約６％と非常に低い割合となっている。この場合の石棺とは，奥壁沿いに岩盤

を刳り貫くように造られた所謂造付石棺である。本町では発掘調査により北中尾横穴墓群において，組み合わせ式石棺が検出されているが，その存在は非常に稀である。一方，棺座も低棺座と呼ばれるもので，他地域でみられる高棺座は現在までのところ知られていない。

なお，龕については西部地域の横穴墓群に若干みられる程度であり，その割合は非常に少ないものとなっている。

次に壁面装飾であるが，まず，漆喰（白色顔料）と考えられるものは全部で9横穴墓群18基で確認されている。その割合は低いと言わざるを得ないが，1横穴墓群中に1基という例と2～4基と比較的まとまって存在する例の二者がある。特に後者の場合は，慣習または伝統とも言うべきものが背景にあったのではないかと想像される。なお，天井を肋骨状に仕上げる技術については，西部地域のⅥグループに顕著にみられ，総数31基中，約8割に当たる25基がここに集中している。

これに対して，線刻は堂後下横穴墓群の4基を除けば，1横穴墓群中1基が原則のような在り方を示している。もっとも線刻の存在を確認した12基の横穴墓は，すべて開口していたため，線刻自体か造営当初もしくは追葬段階，あるいは後世のものか俄に断定しがたい点があり，早急には結論付けられないことは確かである。たとえば，平塚市宮ノ入では11基中4基，二宮町大日ケ窪では33基中2基確認されているし，方や二宮町諏訪脇では東部分で17基中1基，西部分で16基中1基確認されており，近隣でも数値が様々であることからも窺える。

(2) 各グループ別特徴

Ⅰグループ

大磯町の東部に位置し，2群13基で構成されているが，1群は既に消滅している。記録によれば，10基近く存在したらしい。また，両者の立地は，古地図によると海岸に突き出すような低い独立丘陵上に比較的接近して造営されていたようである。

現存する1群，すなわち善福寺横穴墓群は，江戸末期に編纂された風土記にも登場し，[4] だいぶ崩壊が進んでいるが，内部には宝永～文政の銘を有する石造像が存在する。立地の面から比較的東海道と極めて近い位置に存在するための結果と考えられる。

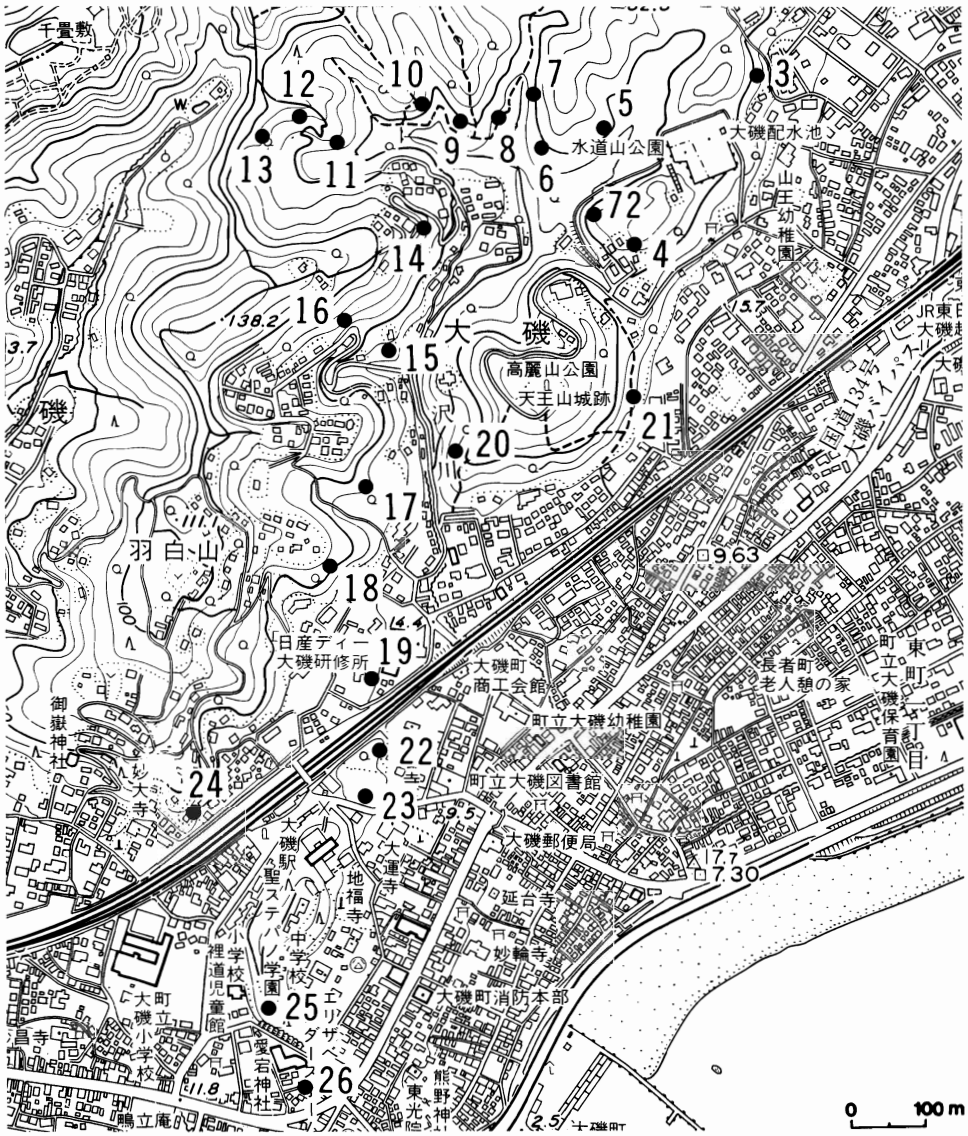
第3図　Ⅰグループ全体図

勿論，この1群だけで，本グループの様相を明確にすることはできないが（不明が6基あることも含む），天井形態ではドーム形とアーチ形はほぼ同じであるものの，平面形態では矩形は全く見られず，逆台形1と丸底Fの数値が際立つ結果となっている。したがって，掘削技術面では，逆台形1＋アーチ形と丸底F＋ドーム形の2形態が特に目立つ。

Ⅱグループ

JR大磯駅の北方，ちょうどⅠグループの西側に位置し，25群141基で構成されている。やや範囲が広いが，大きく4つに分けられる。すなわち，A谷奥（4～16•72），B谷の出入口（17～20），C谷の反対東側斜面（3•21），D南に延びる支尾根の基部～先端（22～26）である。

本グループの特徴としては，天井形態においてドーム形が目立つ点である。ドーム形とアーチ形の比率は全体としては1：3であるに対し，ここでは1：2である。また，家形が他のグループに比べ多く存在する点も見逃せない。平面形態では，全体的に最も多い逆台



第4図　Ⅱグループ全体図

形１の数値が目立つが，矩形の類いも同じような数値が見られ，他とは異質な印象を受ける。また，かつて楊谷寺谷戸横穴墓群の説明に用いられたように，全類型が見られるのも特徴である。

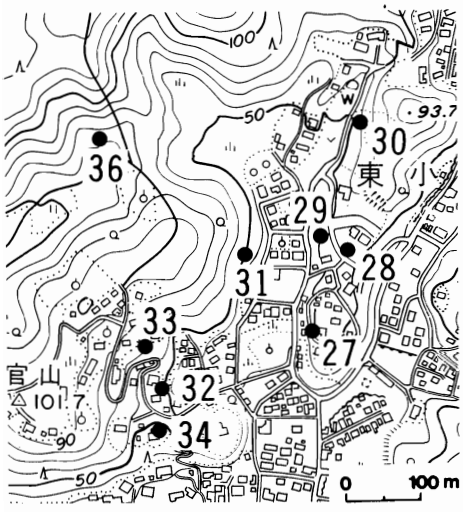
天井形態と平面形態の組み合わせは，明確に判明する13群77基を対象とした場合，やはり逆台形１＋アーチ形が最も多く見られるものの，前記した事実を反映するように矩形＋ドーム形も多く見られ，しかも矩形平面のものが逆台形平面とほぼ同数見られる点も注意を要する（第５表）。

棺座は４横穴墓群７基で，大磯町全体の約半数がここに集中する。石棺についても，全体的に付設割合がもともと少ないが，1/3 が本グループに存在する。

次に個々のブロックを見てみよう。まずＡにおいては，断然アーチ形が優位を占めているが，家形（南井戸窪・石切場・楊谷寺谷戸に計７基）が存在する点で極めて特徴的である。この家形は，僅かに隣接するⅢグループに２基（清水北）存在するだけであり，比較的集中するような在り方を示している。平面形態では，全体的に数少ない羽子板形がやや多く見られる点に特徴がある。

一方，Ｂでは王城山のようにドーム形（14基中９基）が主流をなしており，したがって，平面形態でも比例するように矩形が多く見られる。この傾向はＣ・Ｄでも同様である。特にＣの滝之沢では，８基中６基がそうであるし，Ｄでは発掘調査された愛宕山下横穴墓群でも，アーチ形３基に対しドーム形７基という結果が得られており，それを裏付けけている。

このように，本グループは谷奥部分では逆台形＋アーチ形と矩形＋ドーム形を双壁に，家形が混在し，出入口及び反対斜面，支尾根では矩形＋ドーム形が主体的に存在する傾向を示しているわけである。



第５図　Ⅲグループ全体図

Ⅲグループ

大磯駅の北西，Ⅱグループの西側に，９群35基で構成される。消滅してしまったものも多く，本来は50基をはるかに越える規模であると想像される。特に，平成元年～３年にかけて断続的に発掘調査された北中尾横穴墓群では16基の横穴墓が検出されていることからも窺えよう。

本グループの様相は，天井形態においては，Ⅱグループとほぼ同じである。すなわちドーム形とアーチ形の比率がおよそ１：２という点である。しかし，平面形態では矩形が少なく，逆台形が主流をなしており，この点ではⅡグループとは明らかに異なる。それでも，清水北のよ

うに家形及び複室の存在，棺座や石棺の付設などある程度つながりをもつ横穴墓群も存在する。また，同横穴墓群には，Ⅱグループ内に位置する釜口古墳の羨門と同じ造りをするものも存在し，極めて密接な関係にあったことが想像される。

天井・平面両形態の組み合わせでは，判別可能な19基中，逆台形１＋アーチ形が最も多いが，これはいずれのグループにも見られる現象であると同時に発掘調査された北中尾(1)・(2)横穴墓群でも実証されている。

ところで，立野では１基だけであるが，天井部を肋骨状に仕上げている横穴墓がある。この技術は，本町では西部地区のⅥグループに特徴的に見られるものであり，異質と言わざるを得ない。また，線刻や前に触れておいた北中尾における組合せ式石棺例も同様である。

このように本グループは，隣接するⅡグループと深い関連を有する反面，部分的に異った技術を取り入れていることが看取されるのである。

Ⅳグループ

大磯町のほぼ中央，ⅢとⅤグループの中間に位置し，６群19基で横成される。規模的には小さく，いずれかのグループに吸収して取り扱うべきかも知れないが，水系・尾根とも異なるので，個別に扱うことにした。また，明治期はもとより，石野・赤星時代にもほとんど触れられる事なく，現在に及んでいるグループで，自然崩壊あるいは埋没の目立つ横穴墓群も多く見られる。

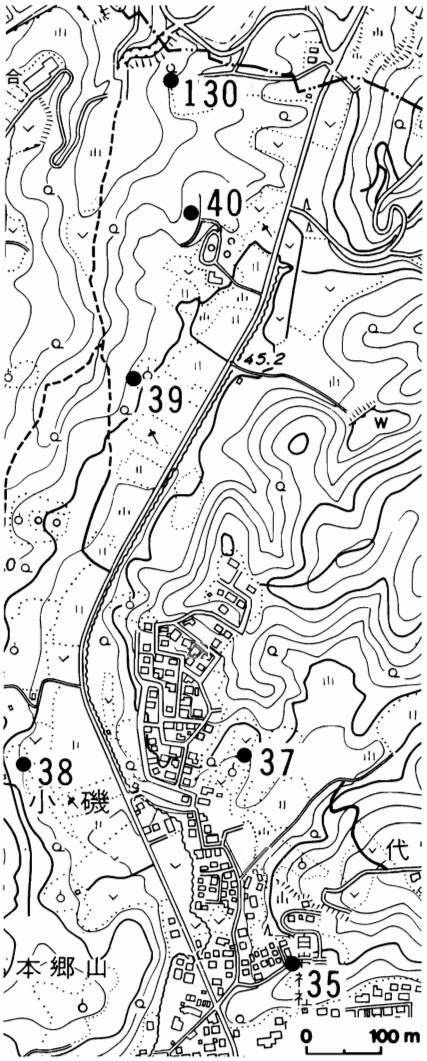
天井形態では，圧倒的にアーチ形が多く，ドーム形は僅かに１基だけである。平面形態では，矩形が全く見られず，逆台形のみで構成されている点が特徴としてあげられる。中でも逆台形１よりも２が多く見られる点は，他のグループには見られないものである。

両形態の組み合わせは，やはり逆台形１及び２＋アーチ形だけである。もっとも明確に把握できるものが僅かに６基と少なく，しかも形態不明のものが全体の半数以上あるので，この結果をもって本グループの特徴と断定することはできないかも知れない。

なお，棺座及び線刻が１例ずつ見られる。

Ⅴグループ

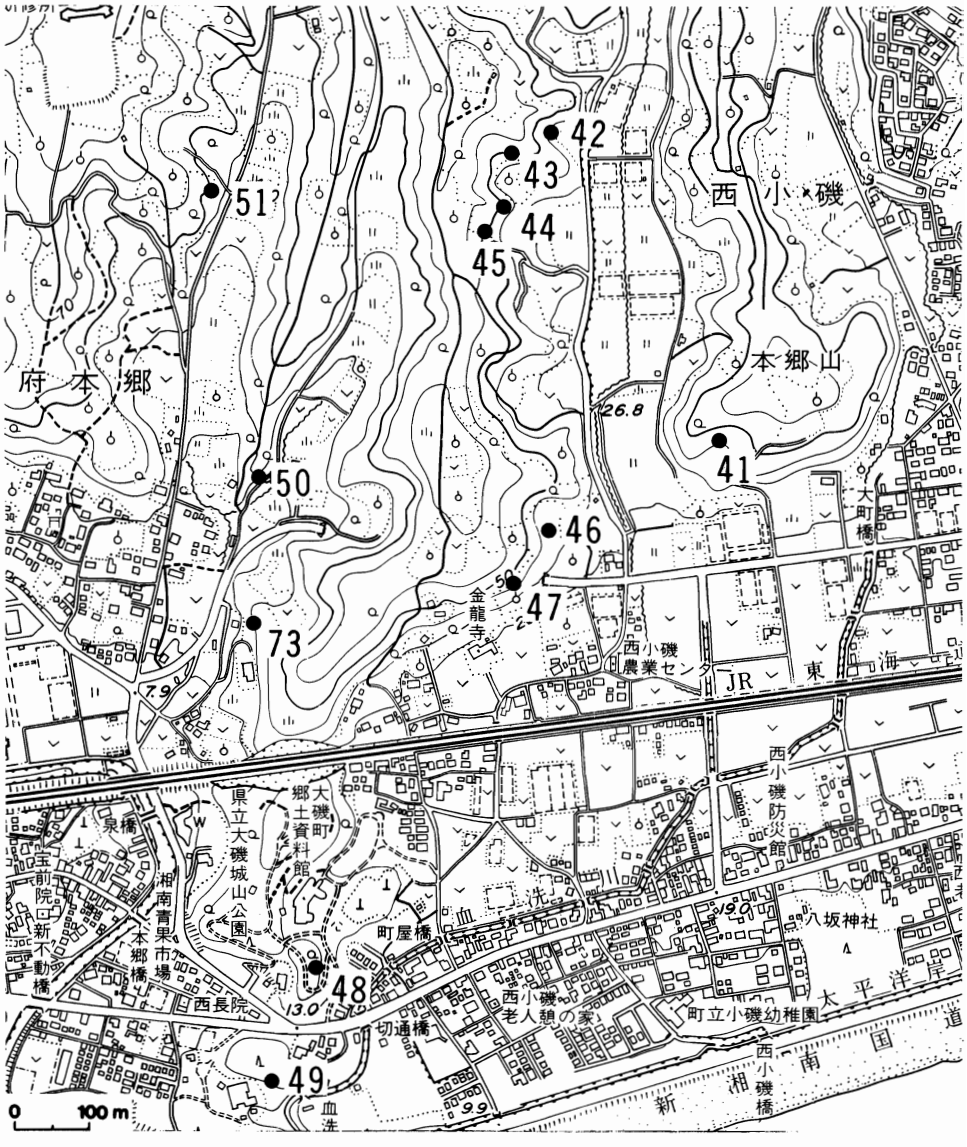
Ⅳグループの西側に位置し，12群131基で構成



第６図　Ⅳグループ全体図

されている。後述するⅥグループとは直線にして1km以上離れており，その間は空白地帯となっている。また他と比較して，少ない群の割に，基数が多い点を特徴としている。それは，本郷山や辻端，城山などいずれも20基を越す横穴墓群が存在するためである。さらに，庄ヶ久保や堂後下など学史的にも貴重な横穴墓群も含まれている。

全体的にみると，まず天井形態ではドーム形とアーチ形の比率は約1：3であり，これは総体的比率とほぼ同じである。平面形態では，矩形1を除く全類型が存在し，矩形と逆台形1の在り方は1：6とかなり懸け離れた数値を示している。



第7図　Vグループ全体図

両形態の組み合わせのうち，最も優位なのは，ここでも逆台形１＋アーチ形であり，対象基数（10群87基）の半数以上を占めている。矩形＋ドーム形や矩形＋アーチ形もⅡグループに次いで多く，類型として乏しい三角Ｆ＋アーチ形もやや多く存在する。

本グループもⅡグループ同様に南北に細長く，範囲が広いが，大凡４つに分けることができる。すなわち，Ａ谷奥（42～45），Ｂ谷出入口（41・46・47），Ｃ尾根先端部（48・49），Ｄ西側部分（50・51・73）である。

Ａでは，逆台形１＋アーチ形が主体を成し，棺座や石棺の付設は全く見られず，僅かに天井部を助骨状に仕上げている横穴墓が１基存在する。Ｂでは，逆台形１＋アーチ形に矩形＋ドーム形が入り込み，石棺の付設が見られ，肋骨状に仕上された横穴墓も３基と増加する傾向を示す。Ｃでは，Ｂとほぼ同様なことが言えるが，石棺は見られず，また肋骨状仕上げも存在しない。Ｄでは，堂後下においてのみ矩形＋ドームが目立つほかは，逆台形１＋アーチ形が主流を成す。また，線刻や肋骨状仕上げも見られる。

このように本グループ内では，その特徴として，谷奥では逆台形１＋アーチ形が主流を成すが，出入口等では矩形＋ドーム形もある程度存在すること，棺座や石棺は谷奥には見られず，むしろ出入口や尾根先端に散見できること，Ⅰ～Ⅳグループでは稀な肋骨状仕上げが幾分存在すること，線刻がやや多く見られることなどがあげられる。

また，全グループを通じて付設の割合が少ない龕が２基存在する点も注意を要する。

Ⅵグループ

大磯町の西部に位置し，23群138基で構成されている。本グループは，56と58を結ぶ線で大きく二分される。すなわち，県指定史跡であるたれこ谷戸横穴墓群を中心とする東側（52～54・69・163）と奥沢横穴墓群を中心とする西側（56～68・113）である。また，北側に位置する71，東側にやや離れて存在する166もある。なお，最北の55は踏査の結果，横穴墓ではないことが確認されている。

まず，全体的な特徴であるが，天井形態においては，ドーム形とアーチ形の比率が１:５となっている点に留意すると，Ⅱ・Ⅲグループではその比率が１：２，Ⅴでは１：３となっており，西に向かうほどドーム形が少なくなる傾向が読み取れる。事実，先に分けた東側ではドーム形が11基存在するのに対し，西側では７基しか見られないし，最東に位置する権現田もドーム形を呈するので，グループ内でも同様な傾向が読み取れるわけである。

一方，平面形態ではやはり天井形態を反映するように，逆台形１が圧倒的多数を占める。

また，逆台形２よりも三角Ｆが多く存在する点も一つの特徴かも知れない。

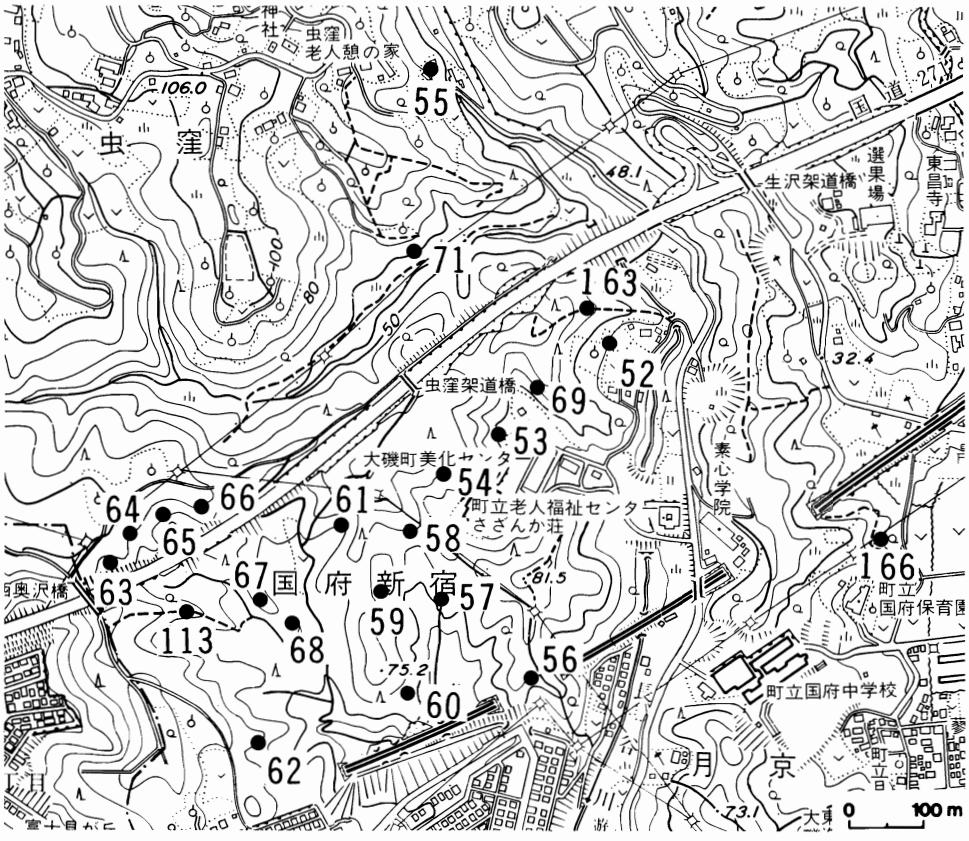
両形態の組み合わせは，判別可能な103基を対象に行った結果，半数以上が逆台形１＋アーチ形とⅤグループと同様な様相を呈することが判明した。ドーム形天井を有する場合の平面形態は，通常は矩形の場合が多いが，ここでは逆台形２や丸底Ｆの方が数値的には上回る結果となった。そして，アーチ形天井の場合，本来は逆台形１に集中するが，ここ

では逆台形２や三角Ｆの数値も高く，分散する傾向が読み取れる。また，矩形の中でも整然とした矩形１ないし２は全く見られず，コーナーが丸みを帯びたり，あるいはやや形の変形した矩形３がほとんどである。

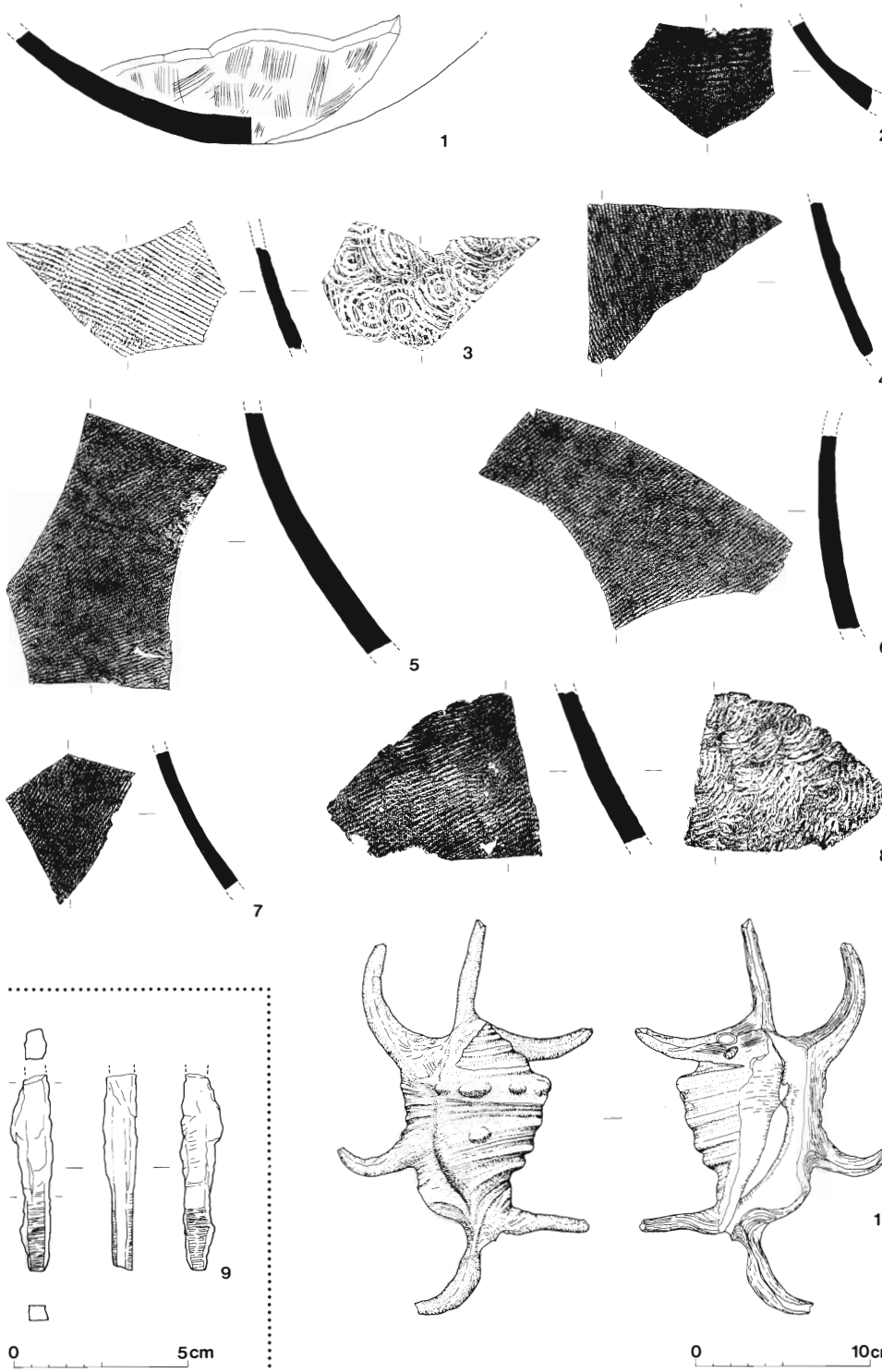
内部施設の特徴としては，棺座や石棺の付設割合が非常に少ないことである。特に石棺は皆無であるし，棺座にしても東奥沢で２基存在するだけであり，総基数を考慮すれば客体的な在り方を示しているものと理解される。その一方で，漆喰（白色顔料）は13基に施されており，全体の７割以上がここに集中しているわけである。中でも東側では，４群63基中約15％にあたる10基に見られ，しかも１群中４基にも及ぶ（たれこ谷戸西）ものも存在する。

また，線刻は４基で，数値的には全体の1/3に及ぶものである。なお，たれこ谷戸西では，奥壁に浅い龕に如来像か浮き彫りされているが，これは線刻欄には加えていない。

ところで，壁面装飾では何と言っても天井部を肋骨状に仕上げる技法の多さが群を抜いている。本グループのほとんどの横穴墓群（１横穴墓群で１～４基）で見られ，その数は25基にも達するが，この数字は，全体の８割以上に及ぶもので，如何に集中的に存在しているかを如実に物語るものである。



第８図　Ⅵグループ全体図



第９図　採集遺物拓影・実測図

採集遺物

横穴墓の詳細分布調査においては横穴墓群の現況を把握することを本旨としたため，表面採集によってのみ遺物を採集した。遺物は7横穴墓群から採集されている。

第4表　採集遺物

No.	横穴墓群名	採集位置	種　類　及　び　点　数	図中番号
12	楊谷寺谷戸	——	須恵器甕 3	第9図1，2
19	坂田山付	第2号墓	須恵器甕 15，須恵器蓋 1，土師器甕 2	第9図3～7
41	本郷山	——	須恵器甕 1	第9図8
46	辻端東	第4号墓	鉄製品 1	第9図9
47	辻端	第10号墓	瓦器 5	——
56	権現入田	第6号墓	人骨	——
69	たれこ谷戸東	第1号墓	スイジガイ 1 *Lambis* (*Harpago*) *chiragra* (LINNE)	第9図10

小　結

詳細分布調査により判明した事実については，前章で詳しく述べたとおりであるが，その結果は，決して大磯町の横穴墓群の全容を表しているものでない。確かに分布や遺存状態はある程度正確に把握できたと考えられるが，重ねて述べるまでもなく，全体の約1/3は形態が不明であり，略測できた横穴墓についても流入土を除去して計測したものではない。したがって，あくまでも詳細分布調査の一つの結果にほかならないのである。

しかし，種々の制約があるにしても，そこから得られた情報を現在の横穴墓研究の現状の中で，試行錯誤しながら最大限活かしてみることもまた必要ではないかと考えるに至ったのである。横穴墓に関する課題は多く，すべてにわたって論ずることは，紙数の関係や焦点が惚ける可能性もあり，形態面と壁面装飾についてのみ述べ，これをもってまとめとしたい。

まず，形態面について述べることにする。大磯町は面積約17km²と決して広くないが，そこに造営された横穴墓には，天井・平面形態は勿論，内部構造に至るまで非常にバラエティーに富むものが多く，任意に想定したグループによっても，近似あるいは相違する点が多々みられたわけである。すなわち，前者は天井・平面両形態において，いずれも圧倒的に逆台形1＋アーチ形が多いと言う事実，後者は類型のバラツキと内部施設の割合，壁面装飾等の多少があげられよう（第5表参照）。

ところで，大磯町の横穴墓群については，既に1964年，赤星直忠氏により下田横穴墓群をはじめとする7横穴墓群の調査概要並びに分布，形態と時間的変化など詳細な報告がある（赤星1964）。その中で，大磯町内において最も数が多いタイプは，「断面アーチ形の膨

第5表　グループ別類型基数

グループ区分	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	合　計
群　構　成	2群13基	25群141基	9群35基	6群19基	12群131基	23群138基	77群477基
対象群・基　数	1群6基	13群77基	4群19基	3群6基	10群 87基	17群103基	48群298基
矩　形＋ドーム		18	1		8	4	31
矩　形＋アーチ		4			5	1	10
矩　形＋家　形		7	2				9
逆台形1＋ドーム		1	3		5	4	13
逆台形1＋アーチ	4	26	8	2	47	56	143
逆台形2＋ドーム					3	6	9
逆台形2＋アーチ		4	1	4	7	8	24
三角 F＋ドーム						1	1
三角 F＋アーチ		2	2		6	14	24
丸底 F＋ドーム	2	5			4	6	17
丸底 F＋アーチ		2			1	2	5
羽子板＋ドーム		2	1				3
羽子板＋アーチ		6	1		1	1	9
合　計	6	77	19	6	87	103	298

張筒形のもの」で，「幅も高さも奥が最大で，羨門部が最小」のものであるとされている。これは，今回類型化した所謂，逆台形1＋アーチ形に該当するものであり，赤星氏の見解を再度証明したものと言えよう。

また，杉山博久氏は，神奈川の横穴墓群を素描されているが（杉山1980），形態について「アーチ形天井の系統に属する横穴墓の検出例は極めて高く‥‥ほぼ71％という高い比率を占めている」と具体的数値をもって述べられている。今回の調査では，約74％がアーチ形天井であり，県内における数値よりやや上回る結果となっている。

手元にある相模川以西の主要な横穴墓群を類型化してみると（第6表），二宮町諏訪脇横穴墓群（三上1972・赤星1973）は別にして，逆台形1＋アーチ形の横穴墓が如何に多く検出されているかが容易に理解される。このタイプの横穴墓がどの程度まで空間的に分布しているか，詳細に調査する必要があるが，これほど集中して存在する点を考慮して，これを大磯型と呼称したい。ただ，課題とすべき点が若干ある。それは，横穴墓の全長である。同形態の横穴墓でも，全長が3m以下のもの，例えば平塚市高根8号墓（杉山1976・1977），同宮ノ入4号墓（杉山1987），大磯町北中尾10号墓（鈴木1992），二宮町大日ケ窪8号墓（杉山1988）等と，逆に4mを超すもの，例えば平塚市万田八重窪18号墓（杉山1987），北中尾4号墓，大日ケ窪6号墓等がある。これらを同一に扱うべきかどうかと言う点と，大局的には，直線的な逆台形1と曲線的な逆台形2の取り扱いをどうするかと言う点が課題として残る。

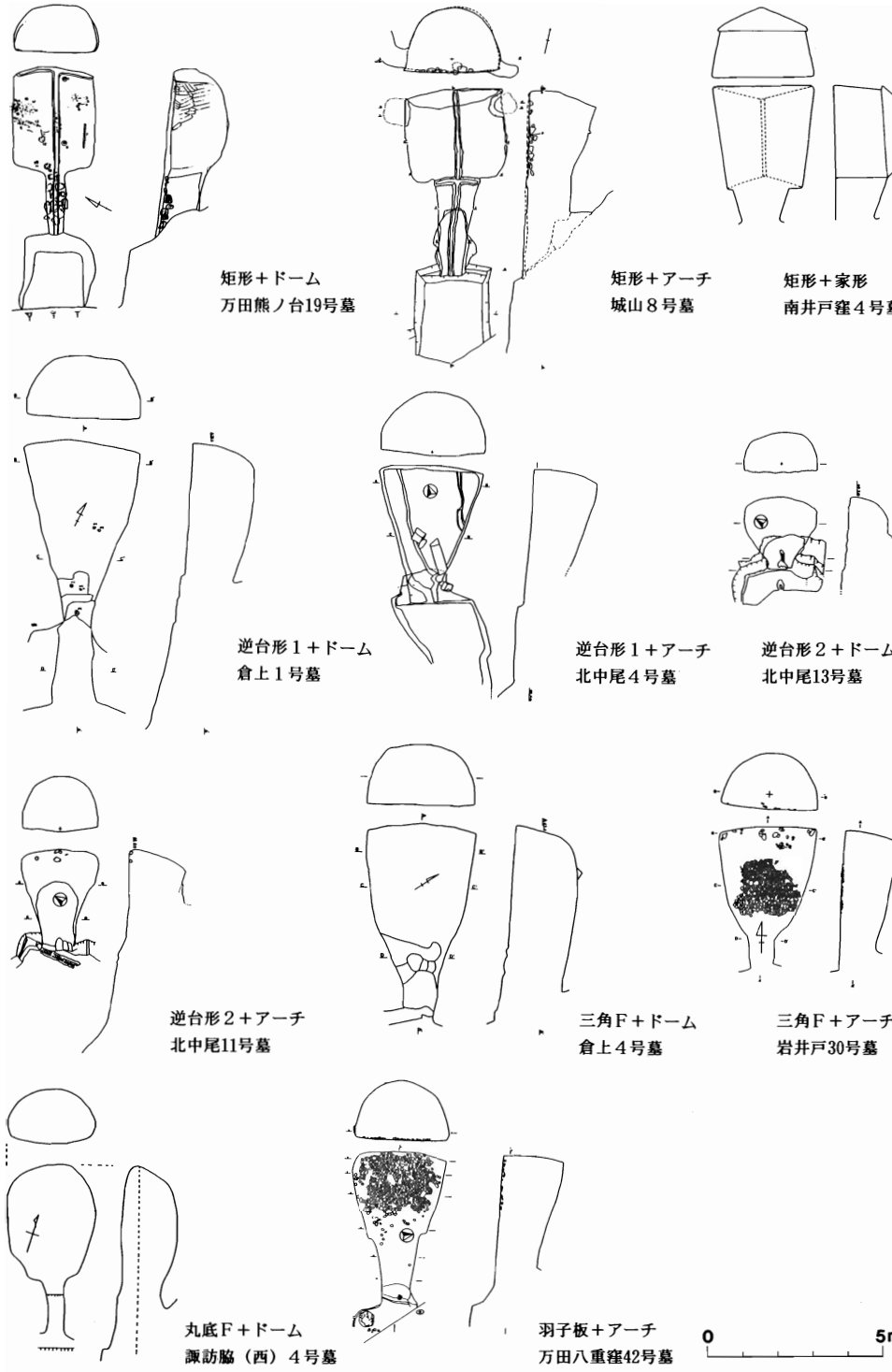
第10図に今回類型化した各タイプに該当する横穴墓を当て嵌めてみた。こうした，形態を中心とした編年は既に赤星直忠氏が1964年に作成しており（赤星1964），その発生を竪穴住居に求めているため，初現形態が矩形＋家形になっている。一方，明石　新氏は，最近隣接する平塚市域について，遺物を交えながら４段階の変遷を提唱している（明石1990)。初現形態は，矩形＋ドーム形であり，時期的には６世紀後半としている。個人的には，地域により異なる場合も想定されるし，両者がさほど時間差なく構築されたとも考えているが，今回の調査で得られた成果では，時期決定の最大要素である遺物が欠落しているため，そうした先学諸氏の業績を操作することはできない。しかし，初現形態としての横穴墓がどのグループにみられるのか，換言すればいち早く造営された所はどこなのかを考えてみたい。

まず，矩形＋家形の横穴墓は，Ⅱ及びⅢグループに存在する。具体的には，南井戸窪（４基）と石切場（１基)，楊谷寺谷戸（２基)，清水北（２基）の４横穴墓群９基で，前三者（７基）は既に池上　悟氏により詳細な検討がなされている（池上1995)。すなわち，楊谷寺谷戸の１例が切妻妻入り型式の他は，すべて寄棟妻入り型式で，なおかつ，玄室平面の矩形の台形化による相対的変遷から石切場例をもって家形横穴墓の最古となし，その時期は６世紀後半代を想定している。清水北例は，共に切妻妻入り型式で，平面形は確かに整正な矩形を呈するが，報告者である赤星氏も「その一つ以前の祖形が妻入切妻造りであった」と述べているとおり（赤星1964)，天井形態はかなり簡便化されたものであり，明らかに前記したものより後出である。

一方，当地域周辺での初現形態である矩形＋ドーム形は，第10図に示した平塚市万田熊ノ台19号墓（明石1985）を最古とするが，平面形は類型化した矩形１がこれに該当する。大磯町で，矩形１に該当する平面形を有する横穴墓は，単純には先の家形例の幾つかがこれに該当するだけであり，大半は台形化の進んだ矩形２と隅丸方形の矩形３である。これらにドーム形天井が伴う横穴墓が果たして，いつ頃構築されたのか，基数の割りに調査例の少ない当地域では確かなことは言えないのが現状である。かつて，赤星氏は比較的古い形態と考えられる横穴墓を調査して，遺物からそれを証明しようと試みた。結果的に目的

第６表　周辺地域の横穴墓群

No.	名　称	基数	開口方向	天井形態				平面形態									内部施設					壁面装飾		
				ドーム	アーチ	家形	不明	矩形1	矩形2	矩形3	逆台形1	逆台形2	三角F	丸底F	羽子板	不整形	不明	排水溝	棺座	石棺	礫敷	龕	漆喰	線刻	肋骨仕上
1	岩井戸	12	南～南西		12						7		2		1	1	1	2	3	1	5				
2	諏訪脇東	17	東～南西	12	5			4	2	7	3							9	1	4	9			1	
3	諏訪脇西	16	東～南東	12	4					7	2	2	1	3	1			2	3	4	1			1	
4	根板間Ｂ	7	南東～南	2	4		1				3	1				2	1	2	4						
5	八重窪	18	南東～南		16		2				12		3		1	2		5	1	5	8				
6	宮ノ入	11	南東～南		11						11							3	4	2	3			4	1
7	大日ヶ窪	33	東～南西	4	26		3				27	2				2	2	7	3	3	12			2	
8	倉　上	18	南東～南西	3	12		1				12	1	2	1		1	1					1			


矩形＋ドーム
万田熊ノ台19号墓
矩形＋アーチ
城山８号墓
矩形＋家形
南井戸窪４号墓
逆台形１＋ドーム
倉上１号墓
逆台形１＋アーチ
北中尾４号墓
逆台形２＋ドーム
北中尾13号墓
逆台形２＋アーチ
北中尾11号墓
三角Ｆ＋ドーム
倉上４号墓
三角Ｆ＋アーチ
岩井戸30号墓
丸底Ｆ＋ドーム
諏訪脇（西）４号墓
羽子板＋アーチ
万田八重窪42号墓
0
5m

第10図　類型別横穴墓

を達せなかったが，既にそれから30年以上経過した現在でも状況はさほど変わっていない。最近，平塚市城山横穴墓群（明石1995）では図示したように矩形１＋アーチ形の横穴墓が検出され，７世紀前葉の須恵器が出土している。根拠は弱いが，当地の矩形２及び３＋ドーム形の横穴墓も７世紀前半代の所産ではないかと想定される。

もし，仮にこの推論が正しければ，矩形＋ドーム形で６世紀後半にまで溯る横穴墓は，現在までのところ，大磯町内では知られていないことになり，６世紀後半と推定される石切場例（Ⅱグループ）の家形横穴墓が当地域で最古の形態と言うことになる。この点は今後の調査の進展により具体的に明らかにされていくものと考えている[5]。

いずれにしても，先の類型にドーム形の天井部を有する横穴墓は，Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵグループに存在し，基数の相違こそあれ，時間差なく造営されたと考えられ，これを契機に以後大磯型が盛行するまで，脈々と続いたものと理解される。そして，中でもⅡグループが大磯町において先駆的な役目を果たしていた，換言すれば最も早く横穴墓か造営された地域であったと考えられる。

次に壁面装飾について，若干述べることにする。この項目には，漆喰・線刻・肋骨仕上げの３項目を設定したが，ここでは肋骨仕上げについて考えてみたい。確認された477基の横穴墓の内，天井形態が判明した343基の中で，この技法が見られた横穴墓は31基であり，数値的には約９％と非常に低い。しかし，グループ別にみてみると，東寄りのⅠ・Ⅱグループには全く認められず，Ⅲグループでも１基，Ⅳグループは無し，Ⅴグループで５基と西に向かうに従い数を増し，Ⅵグループでは全体の８割に及ぶ25基と，集中して存在する傾向を示しているのである。Ⅵグループは23群138基で構成されているから，２割近い横穴墓にこの技法がみられるわけである。また，１群に固まって存在するのではなく，多いもので１群４基，大抵は１群１～２基みられ，同グループ全体では６割近い14群にわたって確認されたものである。したがって，この技法は大磯町の西部地区に顕著に認められるものであり，かつて，この地が余綾郡余綾郷に属していたことを考慮し，余綾技法と命名したい。

この技法がみられる横穴墓は，逆台形１＋アーチ形の所謂大磯型としたものに多くみられる。すなわち，31基中19基と６割以上の数値を示す。そして，玄室と羨道がくびれることでそれが区別される三角Ｆ＋アーチ形にもある程度散見できるので，平面形態の変遷のみ考えれば，ある程度の時間差が指摘される。また，肋骨状の仕上幅であるが，太いもので14～16cm，細いもので４～５cmで，多くの例は６～８cmである。

近隣ではⅣグループ北方に位置する平塚市万田宮ノ入横穴墓群で１基（７号墓）検出されているが，逆台形１＋アーチ形であり，幅は８cmである。同位置関係にある万田八重窪や根坂間では全くみられず，Ⅵグループ西側に位置する二宮町大日ケ窪や倉上でも皆無である。

このように，今のところ特定地域に集中し，その周囲に若干類例がみられると言った状況であり，なおかつ平面及び天井形態から比較的後出の横穴墓に多くみられるもので，特殊な技術を有する工人集団の存在と同時に新しい掘削技術の導入背景等残された課題は非常に多いが，今後類例の追求に努め，僅かずつでも真相に迫りたいと考えている。

おわりに

前半は，詳細分布調査の成果について調査事実を，後半はそれに基づく私見を述べた。結果的には，課題を残す形となったが，足場作りだけはできたのではないかと思う。特にグループ分けについては，水系や尾根あるいは横穴墓群の位置により机上で行ったものであるが，個々の横穴墓群のデーター等から逆算してグループを設定することも可能であるし，そこから様々な要素を抽出して，更に小さなグループ（集団）に分けることにより，一つの支谷に造営された幾つかの横穴墓群の在り方を解明していく手立ての一つとしても利用できそうである。ただし，その前提として，必要十分な条件が揃っていなくてはならないことだけは確かであろう。そうした意味で今回の調査は，言わば条件整備の第１段階とも言えるのではないだろうか。

当面の課題として，横穴墓群造営の最も早かったと考えられる地域，その要因はなんであったのだろうか，社会的背景が気になるところであるし，また，各形態の変遷に遺物を交えた段階設定の見直しも必要であろう。ただ，横穴墓の性格上，造営当初の遺物の発見は中々難しく，多くは落盤により発見されるものと考えられるが，その場合は天井形態が把握できず，痛し痒しと言ったところである。

また，最も懸念しているのが，勝手に命名させてもらった大磯型や余綾技法が果たして成立するのかどうかと言うことである。時間的余裕もなく，県内をすべて網羅したわけではないので，今後類例等を追求し，今回触れることのできなかった部分，例えば内部施設や壁面装飾（漆喰や線刻）と併せて，再度発表したいと思う。

なお，詳細分布調査及び成果の公表については，立正大学池上　悟氏にお世話になると共にご快諾をいただいた。また，日頃横穴墓研究に精進されている平塚市博物館明石　新氏には，文献はじめ貴重なご教示を賜った。末筆ながら，記して感謝申し上げます。

註

(1)　近く刊行予定の大磯町史研究第４号に，「大磯町における遺跡調査の記録～先人達の偉業を振り返る～」と題する小論の中で，石野時代・赤星時代と呼称し，詳しく述べておいた。

(2)　池上　悟　1995　「南関東における家形横穴墓」の中では77群477基となっている。77群は遺跡台帳の群数である。

(3)　池田彦三郎・鈴木　昇　1964　『大磯町横穴墓および古墳地名表』による数値である。

⑷ 『新編相模國風土記稿』の淘綾郡大磯宿の項に「岩窟　本堂の北にあり‥‥」との記載がある。

⑸ 平塚市城山横穴墓群第７号墓は（明石1994），矩形平面で天井部が切妻妻入り型式をとる。明石氏は，万田熊ノ台19号墓と同時期もしくはそれを溯る可能性を指摘されている。大磯町で想定されている６世紀後半の家形横穴墓は，寄棟妻入り型式で，明らかに天井形態が異なる。工人集団の相違や地域差も指摘されるし，こうした新たな掘削技術の導入がどのような社会的背景のもとになされたのか非常に気にかかるところである。

参考文献

細木松之助　1886 「東海地方ニテ人類学ニ関スル略報」『東京人類学会雑誌』第６号

山崎直方　1887 「大磯駅近傍にある横穴塚穴の話」『東京人類学会雑誌』第20号

若林邦勝　1887 「相模國淘綾郡大磯及び山西村横穴実見記」『東京人類学会誌』第22号

中川成夫　1955 「相模愛宕山横穴調査報告」『史苑』第１６巻第１号

赤星直忠　1964 「神奈川県大磯町の横穴」『大磯町文化財調査報告』第１冊

三上次男　1972 「諏訪脇横穴群（東部分）」『神奈川県埋蔵文化財調査報告書』３　神奈川県教育委員会

赤星直忠　1973 「諏訪脇横穴群（西部分）」『神奈川県埋蔵文化財調査報告書』４　神奈川県教育委員会

杉山博久　1975 『岩井戸横穴墓群の調査概報』

杉山博久　1976 「平塚市内の横穴墓詳Ｉ」『平塚市文化財調査報告書」第12集　平塚市教育委員会

杉山博久　1978 「平塚市内の横穴墓群Ｉ」『平塚市文化財調査報告書』第13集　平塚市教育委員会

杉山博久　1978 『岩井戸横穴墓群の調査記録』

杉山博久　1980 「神奈川県の横穴墓群―その素描―」『古代探叢―滝口宏先生古稀記念考古学論集―』早稲田大学出版

明石　新　1985 『相模川流域の横穴墓』平塚市博物館夏期特別展図録

杉山博久　1987 『万田八重窪・宮ノ入横穴墓群』

鈴木一男他　1987 「愛宕山下横穴墓群」『大磯町文化財調査報告書』第28集　大磯町教育委員会

杉山博久　1988 『大日ケ窪横穴墓群』

杉山博久　1990 『二宮倉上横穴墓群』

明石　新　1990 「根坂間横穴墓群Ｂ支群」『平塚市埋蔵文化財シリーズ』14　平塚市教育委員会

鈴木一男　1992 「北中尾横穴墓群」『大磯町文化財調査報告書』第39集　大磯町教育委員会

國見　徹　1994 「金久保北横穴墓群」『大磯町文化財調査報告書』第41集　大磯町教育委員会

明石　新　1994 「岡崎城Ａ・城山横穴群」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書』７　平塚市教育委員会

明石　新　1995 「岡崎城Ａ・城山横穴群」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書』８　平塚市教育委員会

池上　悟　1995 「南関東における家形横穴墓」『王朝の考古学―大川清博士古稀記念論文集―』雄山閣

胞衣容器についての一考察

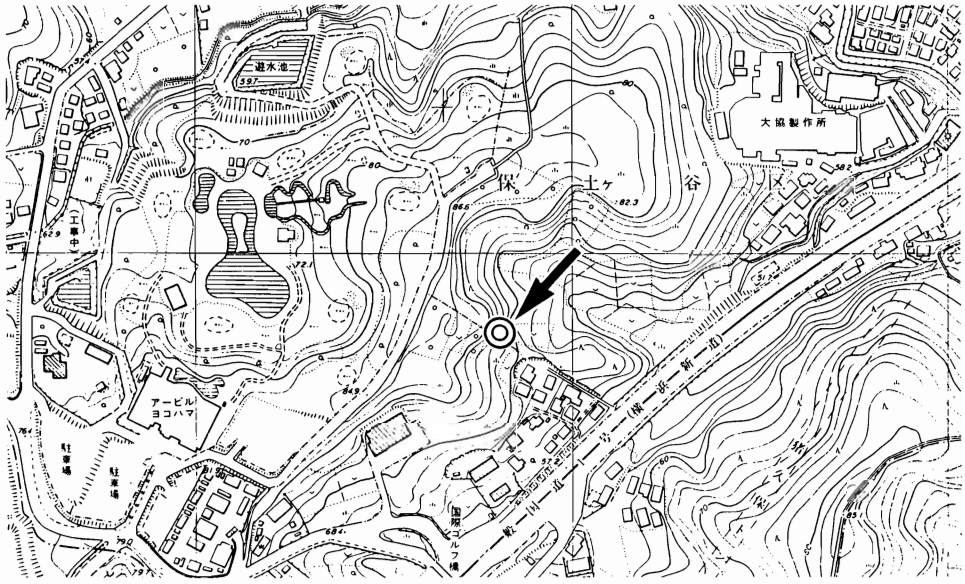
── 横浜市今井町出土土器を中心として ──

戸　田　哲　也・小　松　　清

1．調査経緯と出土状況（戸田）
2．整形技法と型式分類（戸田）
3．他遺跡資料との比較分析（戸田）
4．遺跡の性格と時期推定（戸田）
5．胞衣容器に関する考察（小松）
6．近世～近代における胞衣容器（小松）

1．調査経緯と出土状況

ここに紹介する資料は神奈川県横浜市保土ヶ谷区今井町1,328－2から大量出土した胞衣容器群である。平成3年4月，市内在住考古学研究者である田代昭夫氏から玉川文化財研究所にカワラケ類の大量出土の情報がもたらされた。資料の一部を実見した段階で胞衣容器類と判断され，直ちに現地に赴きその状況を調べたところ，仮設道路の工事によって丘陵部下端の表土下から採集品と同種の資料が大量出土している状況が確認された。この事から埋蔵文化財包蔵地として緊急発掘の状況も考えられたが，横浜市教育委員会と工事を施工する熊谷組を交えた協議により，表土下という出土状況から調査は大量に散布するカワラケの資料採集程度にとどめることとした。具体的には工事関係者との日程調整がととのった平成3年4月29日から3日間を要して行ったものであり，横浜市教育委員会須山幸夫氏・廣瀬有紀雄氏，財団法人横浜市ふるさと歴史財団安藤広通氏・平野卓治氏，玉川文化財研究所呉地英夫・秋山重美・小山裕之の参加協力を得た。



第1図　遺跡位置図（1：5,000）

調査は表土下より出土する胞衣容器の破片を採集しつつその範囲を調べたところ，丘陵部下端の傾斜部で約100m²に分布し，うち２ヶ所の集中個所が確認された。なお分布範囲の一部は仮設道路等によって既に失われている事も判明した。１号集中区では長軸約3.2m，短軸約2.1m，最大壁高約60cmの略方形状を呈する掘込みが存在し，それより東側の若干高い所に位置する２号集中区では長軸約1.3m，短軸約１m，最大壁高約40cmを測る浅い掘込みが確認された。掘り方はいずれも傾斜部の山側を基盤層まで掘込み，底面が平らになるように作られている。

１号集中区では土圧で割れた破片類を取り除いていったところ，堀込みの底面近くで皿碗形の胞衣容器が積み重ねられるようにして置かれている状況が観察でき，その周辺部と覆土上面からは後述する陶磁器類，煉瓦片が出土した。２号集中区では陶磁器類等の出土はなく，また１号集中区に比べて胞衣容器の出土量も少なかったが，底面で専用の蓋を持つ壺形の胞衣容器２件が埋納の状態で検出された。

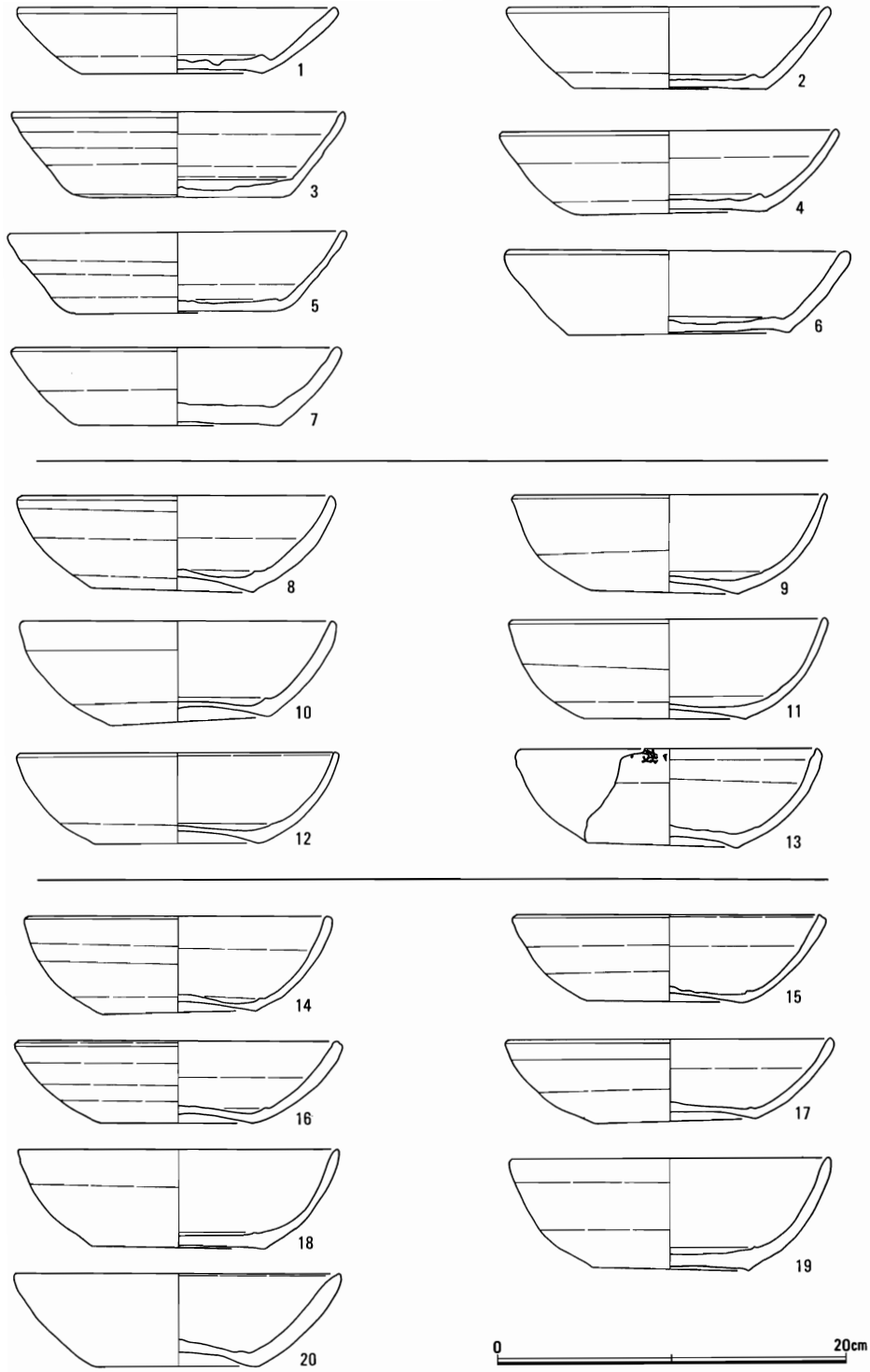
カワラケを用いた胞衣容器の研究は，近年，東京とその周辺における近世・近代の遺跡調査の増加とともに，資料の集成，分析，研究が試みられているが，一般的に胞衣容器の処理についてはあまり人目に触れない場所に埋納するために，時期の限定，製作地，流通など不明な点が多いと言える。今回の出土資料はそのような意味において，民俗学，考古学的に新例を加えることとなり，特に出土点数の多いことから型式学的分類，埋納，廃棄の実態，そしてその年代を考える上で良好なデータを提供し得るものと考えられる。なお，本稿は呉地英夫の調査データをもとに１～４戸田哲也，５・６小松清がそれぞれの分野から分担執筆した。図版作成には玉川久子・木村百合子・中村美江の協力を得た。

２．整形技法と型式分類

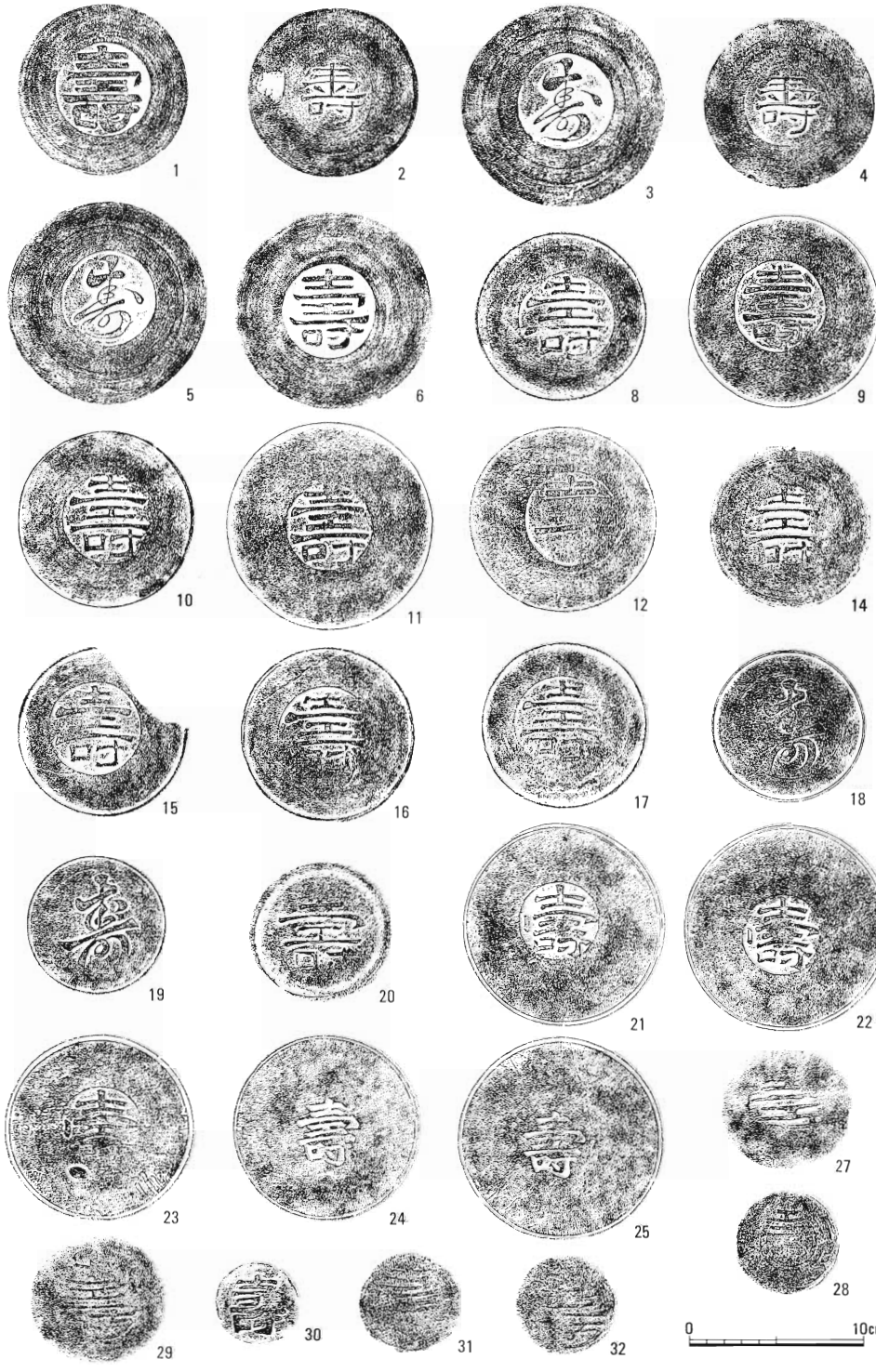
出土資料は小・中破片のものも含めれば大型テン箱で約30箱を超える量が出土しているが，完形もしくは1/2個体以上残存するものは約100個体を数え，本来はこれら資料の大部分が完形であったと考えられる。いずれも胎土・焼成が極めて類似することから接合による個体数の掌握が十分には行えていないが，おそらく500個体は超えるものと推定される。資料の大量出土に関する意味は後に考察するとして，この多くの資料を整理する中で型式学的なあるまとまりが看取されるに到った。分類にあたっては法量，器形，整形技法等に主眼を置き，完形度の高いものを中心に以下のように型式分類を行うが，型式変異は網羅されていると見てよい（第２図～第５図）。

今井町第Ⅰ型式　器高が低く平底状の底部から体部が直線的に開く皿形を呈するもの。

今井町第Ⅱ型式　上げ底状の底部から体部が緩く内湾して立ち上がり深味のある碗形を呈するもの。底部内面の整形の違いからＡ～Ｄ類に分けられる。



第2図　第Ⅰ型式（1～7），第Ⅱ型式A類（8～13）・B類（14～20）



第３図　内面刻印拓影（第Ⅰ型式～第Ⅲ型式）

A類　底部内面がわずかに低くなるように作られ区画隆帯が段状かつ細隆帯となるもの。

B類　底部内面の区画隆帯に段を持たず区画隆帯が太くなるもの。

C類　底部内面の区画帯が沈線となるもの。

D類　底部内面に区画帯を持たないもの。

今井町第Ⅲ型式　専用の蓋を持ち口縁部に合子状の蓋受けが作られる壺形のもの。

次に各型式別に分類した胞衣容器の内容について簡単に特徴を述べることとする。

第Ⅰ型式（第２図１～７）

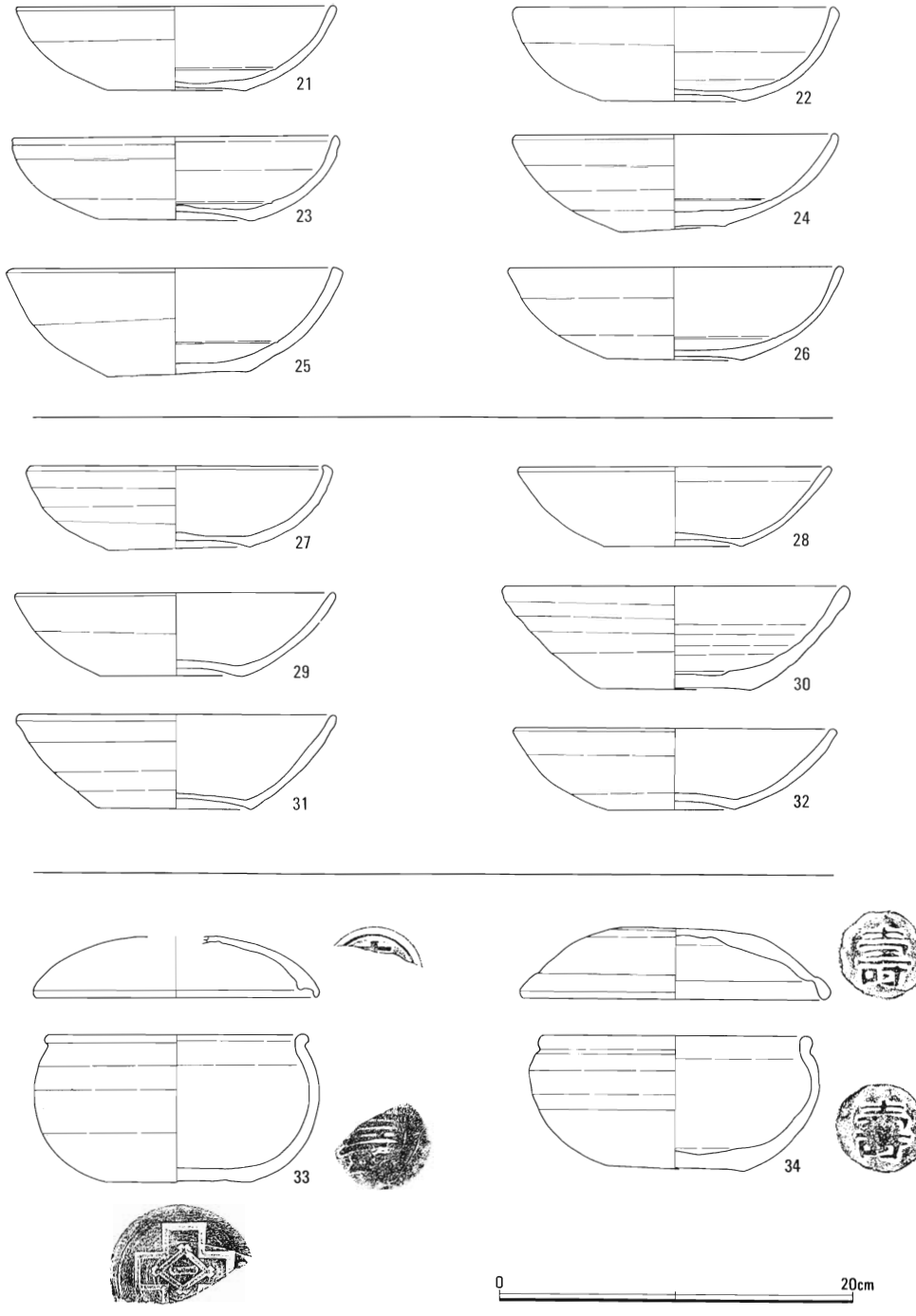
浅い皿形を呈するものであり，口縁部は直口する。厚さ７mm前後の厚手な作りである。口径17.8～19.1cm，底径10.3～12.5cm，器高3.8～4.9cm前後を測る。平均値－口径18.5cm，器高4.5cmとする。胎土・焼成は，出土資料の全てに共通して細砂粒，赤色粒子，金雲母等の混入が目立ち，色調は赤味を帯びた橙色を呈する。調整は内・外面でロクロ回転ヘラケズリ，ヘラナデ，ナデ調整等を施すものであり，やはり全ての資料に共通性が認められる。１～７の底部はロクロ回転糸切り後，外周部ヘラナデを施すが，１，２はすのこ状痕，５，６にはむしろ状痕が認められる。１～６は底部内面に壽文字が刻印されており，２と４，３と５はそれぞれ同一版刻印である。１，２，４～６には刻印の中に銀色の顔料が施されている。

第Ⅱ型式A類（第２図８～13）

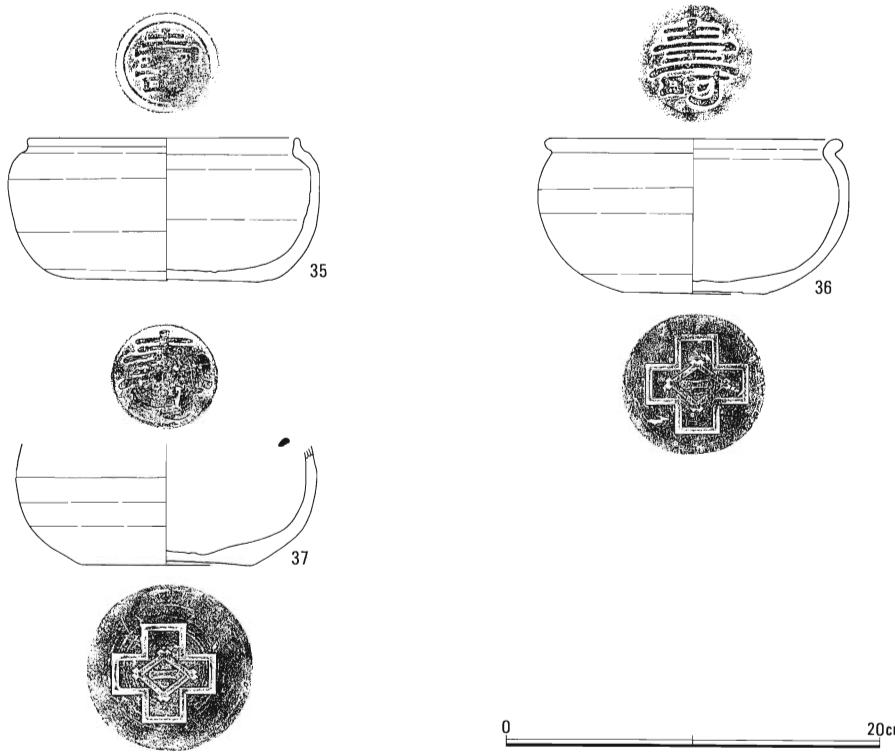
碗形の器形を呈し，底部内面が１～２mm程度低くなるように段状に作られ区画帯が段状かつ細隆帯となる。口縁部は緩く内湾する体部から直口して立ち上がり，厚さ５mm前後の薄手な作りのものが主体となる。口径16.7～17.9cm，底径8.3～9.4cm，器高5.3～5.9cm前後を測り，法量的には口径17cm前後を測るものが多い。体部の作りが厚手である８，10は器面調整が粗くザラついている。８～12には底部内面に壽文字が刻印され，８と10は同一刻印である。また13の口縁部の割れ口には小さく「一枚」と書かれた墨書が認められ，この意味については後に考察する。

第Ⅱ型式B類（第２図14～20）

碗形の器形を呈し，底部内面が平らに作られ区画隆帯が太くなる。口縁部は緩く内湾する体部から直口して立ち上がり，厚さ５mm前後の薄手な作りのものが主体となる。口径16.9～18.4cm，底径7.8～9.1cm，器高4.8～6.5cm前後を測り，法量的には口径18cm前後を測るものが多い。平底状を呈する18，19はロクロ回転糸切り後，外周ヘラナデを施すが，19にはすのこ状痕が見られる。また，20は厚さ７～８mmとやや厚手な作りであり区画隆帯も太い。いずれも底部内面に壽の文字が刻印されており，14と15，16と17，及び18と19はそれぞれ同一の刻印となる。



第４図　第Ⅱ型式Ｃ類（21～26）・Ｄ類（27～32），第Ⅲ型式（33・34）



第５図　第Ⅲ型式（35～37）

第Ⅱ型式Ｃ類（第４図21～26）

碗形の器形を呈し，底部内面の区画帯が沈線となるもの。口縁部は緩く内湾する体部から直口して立ち上がり，厚さ５mm前後の薄手な作りのものが主体となる。口径17.7～18.5cm，底径5.8～9.3cm，器高4.8～6.1cmを測り，法量的には底径の平均値が7.7cmと小さくなる傾向が認められる。底部の調整が施されなかったと思われる24，25は回転糸切り痕が明瞭に残る。21～25には底部内面に壽文字が刻印されており，21～23及び24・25・43はそれぞれ同一の刻印となる。また，21，22，25は刻印の中に銀色の顔料が施されている。

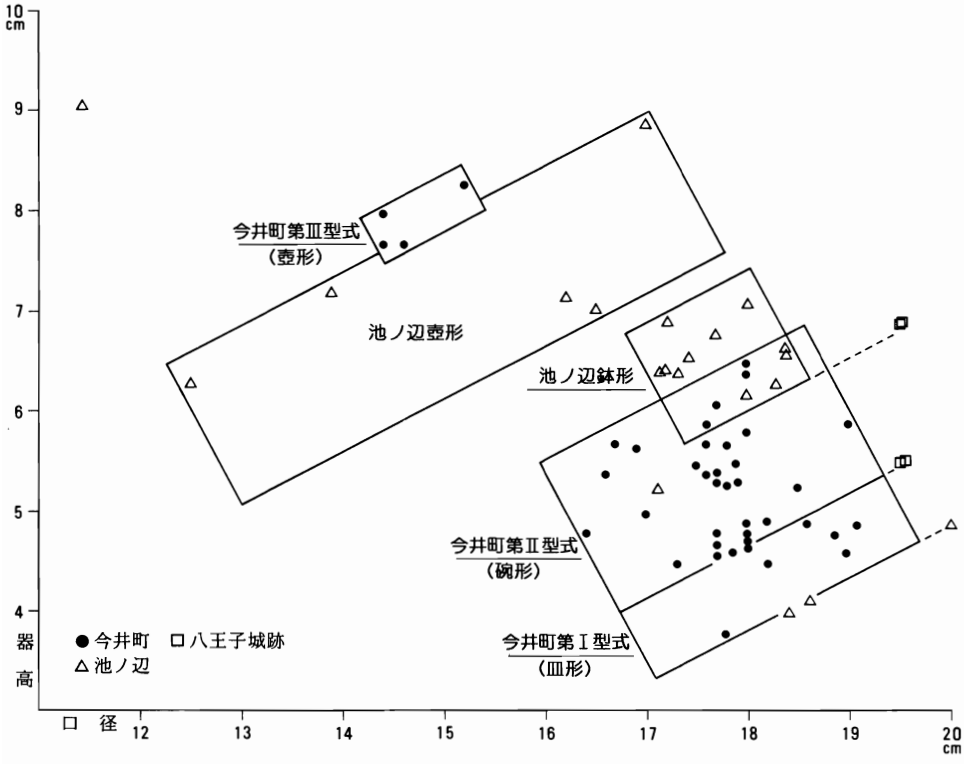
第Ⅱ型式Ｄ類（第４図27～32）

碗形の器形を呈し，底部内面に区画帯を持たないもの。口縁部は緩く内湾する体部から直口して立ち上がり，厚さ５mm前後の薄手な作りのものが主体となる。口径16.4～19cm，底径7.2～8.7cm，器高4.5～5.4cmを測り，法量的には底径の平均値が8.05cmとＣ類に近いものとなる。27～29，31～32は表面がザラついており，胎土に砂粒が多く含まれるようである。30の底部はロクロ回転糸切り後，外周部へラナデを施すがすのこ状痕が見られる。いずれも底部内面に壽の文字が刻印されており，28・29・31・32は同一の刻印となる。また，31は刻印の中に銀色の顔料が施されている。

第Ⅲ型式（第4図33～34・第5図35～37）

専用の蓋を持ち口縁部に合子状の蓋受けが作られる壺形のものである。このうち33，34は第2集中区の堀り込み底面より蓋付き正位の状態で検出された資料である。壺形を呈する身の口径14.4～15.2cm，底径7.4～10cm，器高7.7～8.4cmを測り，蓋の口径はそれぞれ16.9cm，15.6cmを測る。全体的にナデ調整が良く施されており，器面は滑らかである。いずれも底部内面に壽の文字が刻印されており，34の蓋と身及び36と37はそれぞれ同一刻印となる。なお，34～37は刻印の中に銀色の顔料が施されている。なお，掘り込みの中には土圧で割れてはいたが，同じようにして身と蓋を合わせ口にしたものが数点認められており，これらも掘り込みの中に埋納されていたと推定される。これら埋納容器の内容物については，覆土と変らない粘性に富んだ茶褐色土が入っており，他の内容物は見られなかった。なお，33・36・37の底部に見られる刻印は，十字の内に井桁の中一と見られる。おそらく窯印を示すものと思われるが，その点は後述したい。

今井町資料の径高比は第6図に示すように，各型式とも同一の比率を持って変化することが判る。第Ⅰ型式と第Ⅱ型式の接点は連続的ではあるが，各範囲を超えるものはなく分離される。



第6図　胞衣容器径高比

なお第Ⅰ型式の変差に対して，第Ⅱ型式の変差の方が大きい。A～D類の分類についても径高比による方法があろうが，内面の整形差がより明確に製作者の技術を示すと考え分類を行った結果に，壽刻印を照合してみると，すべての分類範囲内に同一刻印例が認められることが明らかとなり，改めて内面整形差による分類の有効性が確認された。

3．他遺跡資料との比較分析

今井町例と出土数量的に近く，時期，型式内容共に充実している資料として，藤沢市池ノ辺遺跡例がある（越川ほか1980)。池ノ辺例では500点を超える資料の中から，セット関係の明らかな資料を中心に15例が図化されている（第7図参照)。

池ノ辺例で特徴的な点は，直口外反する鉢形器形の存在であろう。口径，器高比から見れば，今井町碗形よりもやや器高が高く，第6図では明瞭なまとまりを示している。壺形の出土量も多く特徴的ではあるが，口径に変化が大きい。しかし径口比は1点を除いて他型式と同様の変化比率を示している。なお池ノ辺例の壺形は口縁部に蓋の受けを作る点において今井町例と明確に異なっている。また池ノ辺の専用蓋は器高が低いことを特徴とするが，グラフには加えていない。第7図2・12では身と蓋にそれぞれ同一壽印が打たれており，セットとして作られていたことがわかる。

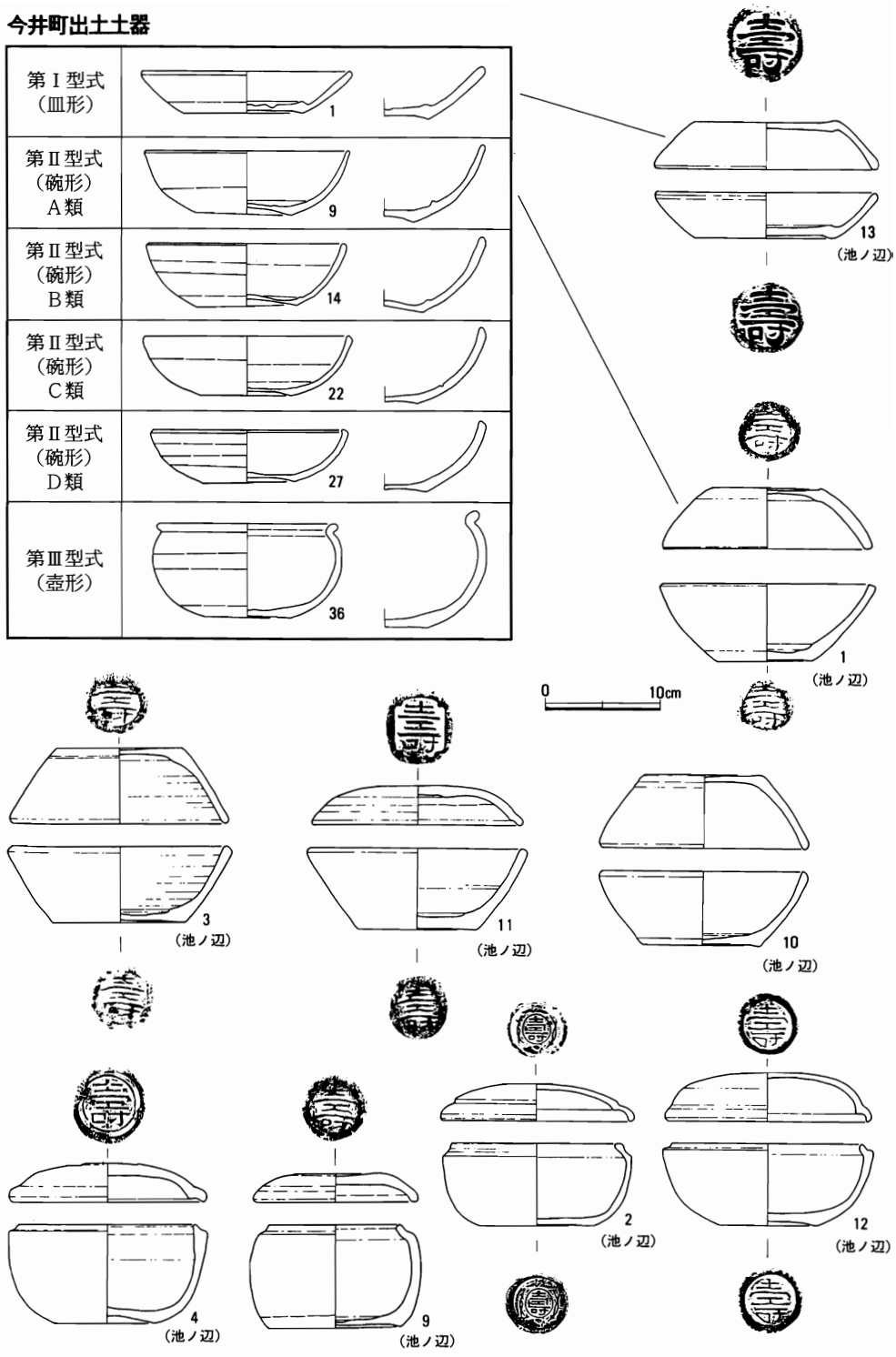
池ノ辺では第7図13例ほか1点が皿形として分離される。第7図13の例は身と蓋に同一の壽印を持ち，同一製作地（者？）の合口兼用品であろう。

第7図1の蓋に使われている例は，体部が湾曲する碗形と考えられ，径高分布も今井町第Ⅱ型式の範囲に属する。身と同一の刻印が認められ，同一の製作地と考えられるが，碗形器形が蓋として作られたものか，兼用品であったかが問題となろう。この点に関して今井町の碗形は出土量から見て身と蓋の兼用として作られたことが推定される。

池ノ辺例は埋納状態を示すものが多い点でも注目されるが，身と蓋の組み合わせで5種類のバラエティがある。壺形は専用蓋とのセットが確立しており，皿形，鉢形も兼用品として合口となる。この他に専用蓋と鉢形，碗形の組み合わせが各1例ずつあるが，転用例と考えられよう。

池ノ辺と今井町の壽刻印はそれぞれバラエティを持っており詳しくは後にふれるが，両遺跡間で同一となる例はない。横浜・藤沢という近接した地域で，また時期的にも比較的近い例ではあるが，製作地が異なっていることを示している。

なお，無刻印例は，今井町で約2割と推定され，池ノ辺例の実数は不明であるが，図示された中で，専用蓋を除いた20点中8点が無刻印であり4割と高率になる。今井町例から見れば，無刻印のものに墨書（壽）が認められ，あらかじめ墨書用として無刻印のものが用意されたと考えられるが，池ノ辺例では身が無刻印でも刻印付蓋がセットとなる場合が



第７図　今井町出土土器と池ノ辺出土土器

多く，そのような使い方も考慮されねばならないであろう。

次に八王子市東京造形大例（土井ほか1986）ではそれぞれ同一刻印を持つ合口鉢形と合口碗形の２例が出土している。第６図に示すようにほぼ同一の大きめな口径が特徴となる。鉢形は池ノ辺例に類似し，比率延長上にある。碗形は今井町第Ⅱ型式に比べより湾曲が強く，口径に対して器高が低いものであり，碗形型式の新類となり，碗形が他の製作地においても作られていたことが指摘されよう。

墨書と刻印について

第８図38～44は今井町出土例の中で墨書の認められる全てを示した。墨書の壽文字は全て草書体であることが特徴となる。型式的には，第Ⅱ型式Ｂ類３点と同Ｃ類３点に分類される。

今井町壽刻印（第３図）では，陽刻印が32点，陰刻印は３点と少ない。この傾向は池ノ辺でも共通し，陰刻は19点中１点みられるのみである。造形大例では４点中２点（同一刻印）が陰刻であるが，陽刻印が主体となる傾向は間違いないであろう。

書体については，先に墨書例が全て草書体となることを述べたが，刻印例では今井町出土の４点（２種）以外に他資料に類例を見ない。ちなみに今井町例では35点中隷書的特徴をもつ文字が25点（14種）と主体を占め，次いで楷書３点（１種），草書４点（２種）の合計17種類の印が用いられていることがわかる。

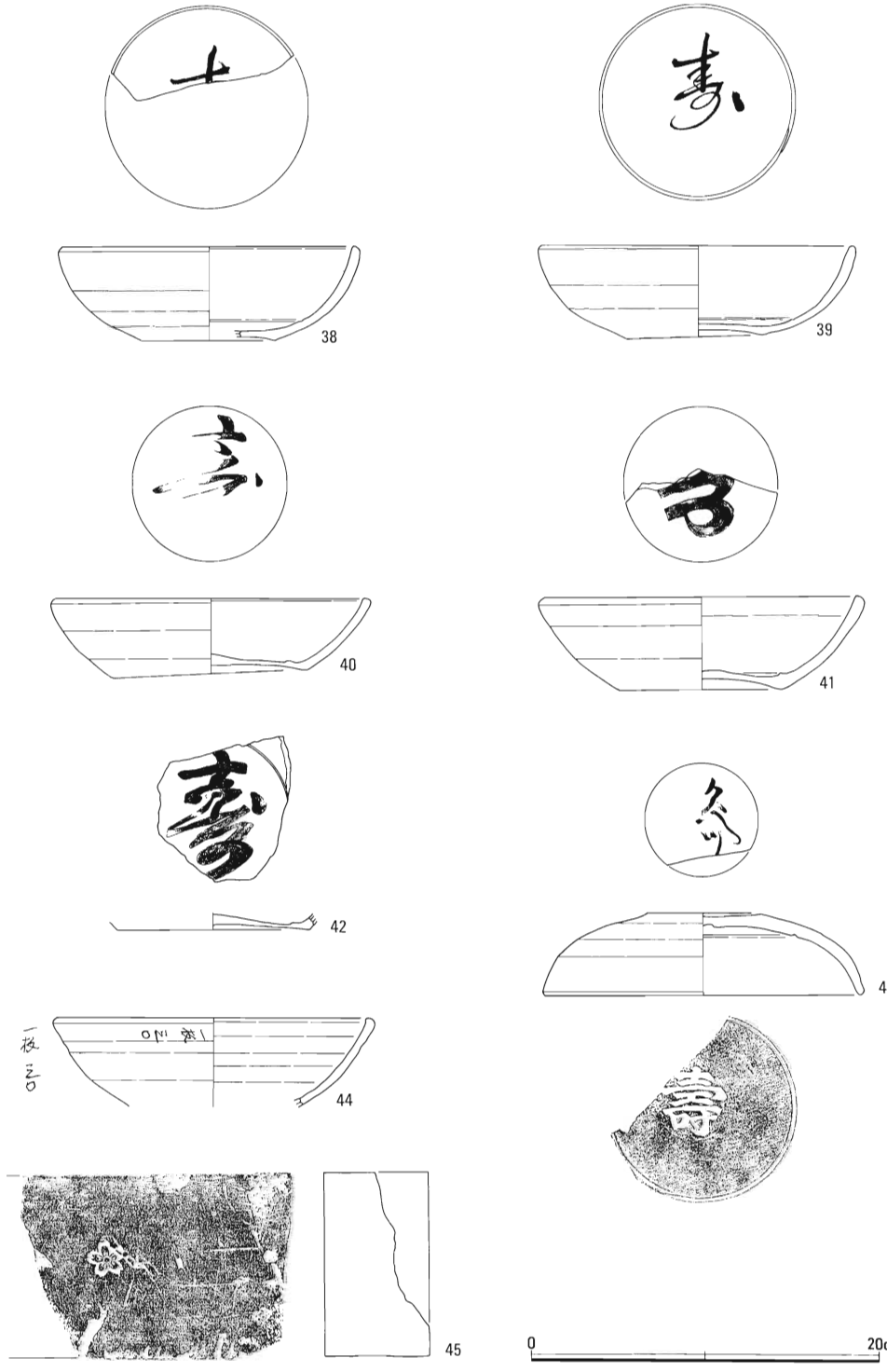
池ノ辺では図示された20点中８種類の印が用いられている。しかし各地出土例の中で，他遺跡間で共通する刻印例は現在のところ認めることはできず，かなり多くの製作者（製作地？）を想定することができる。今井町の内面整形技法と同一刻印の関係から，作者一人ごとに刻印を持っていた可能性もあろう。

なお第４図33，第５図36・37の底部に見られる印版は明らかに同一生産地の製造印と考えられ，十字の囲いの中に井桁の中一印が入る。十字の囲いは「赤十字」の意味を推定させる。内面の刻印は，同一刻印と見ることができる。この特徴的な製造印については，今井町以外現在のところ他に出土例はない。

墨書の文字例では，第８図43の外面に「久□」の文字が見られるが判読できない。名前の可能性も考えられ，碗形を蓋として兼用していた使用例と見ることができる。第８図44及び第２図13には，「一枚三〇」の墨書が見られる。おそらく価格単位を示すものと考えられよう。なおこの墨書の意味については後にもふれる。

４．遺跡の性格と時期推定

１号集中区付近より出土した陶磁器類（写真１）は，鉄釉蓋付行平鍋１点，印版手染付皿２点，片口１点，蓋付土鍋１点，蓋付水指１点，蓋付ちろり１点，火消壺１点，極薄手



第8図　墨書土器　その他

酒杯１点，蓋付唾壺１点であった。村落より離れた「エナ場」と考えられる地区であることから，エナ埋設と何等かの関係があったことを考えねばならない。皿２点を合口形とすればいずれも蓋付容器形となるものであり，胞衣壺の代用品として持ち込まれた可能性が指摘される。なおこれら陶磁器類はそれでも明治前半代までさかのぼらず，明治後半期からの年代が求められる。

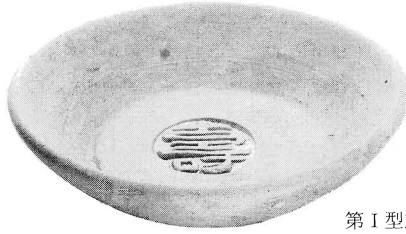
年代を推定する資料として１号集中区周辺部より煉瓦破片２点が出土している。持ち込まれた時期と目的は不明であるが，単弁の小さな桜マークの刻印が付されている（第８図45)。同一例は小菅集治監製とされるものに見られる（水山ほか1992)。水山昭弘氏の教示によれば，小菅集治監製は分銅から桜への転換が明治20年頃，また一般に機械成型の出現が明治22年頃とのことであり，本資料はその機械成型に該当しており，明治22年以降の年代が求められてくる。先の陶磁器の年代とも矛盾しない年代である。

このように今井町出土資料は，明治後半～大正期の蓋然性が高く，壽刻印を持つ胞衣壺の年代推定に一つの基準を与えるものとなろう。

本地区は埋納状態の胞衣壺，そして使用されたと考えられる墨書類，容器形の陶磁器の存在等からエナ埋設地（エナ場）であったと考えて良いであろう。出土点数と型式差から見て，明治22年以降，明治後半期をへて，大正期までの期間内と推定されてくる。

本地区と類似する様相を示す池ノ辺では，昭和初期までの使用が指摘されている。そして伴出物に洗面器（アルミ製)，ガラス薬瓶，し瓶，ガーゼなどが見られることから病院回収という状況も存在したことを推測させる。今井町例にはそのような病院（産院）的資料は見られず，蓋付土鍋類の転用と推定される例，墨書の存在など，より民俗色が強いといえる。病院回収システムという，現代的あり方を示す池ノ辺例に比べ，今井町例が多少古い時期の「エナ場」として考えられてくる。そのような時期差を推定した場合，カワラケ類的性格を残す皿形器形と碗形が主体となる今井町例と，鉢形，壺形が主体となる池ノ辺例とのあいだに時期的器形推移を見ることも可能となろう。

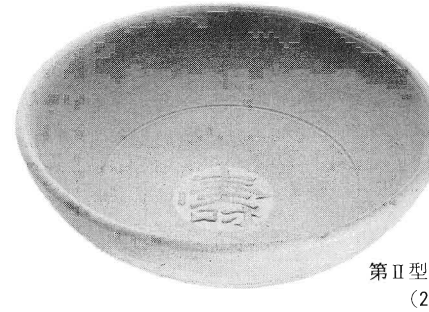
最後に今井町に見る碗形の集積出土状況が注意される。この集積は本地区最終時期に関わる未使用品の一括廃棄を推測させ，特に小さな墨書で「一枚三〇」と書かれたものが価格であるとすれば胞衣皿の束の一番上に重ねられていたあり方が浮んでくる。谷川章雄（谷川ほか1989）によれば，昭和３年前後胞衣納器の価格は１個５銭５厘との指摘があり，三〇の〇は銭の省略形と解せば３銭と見ることができる。３銭は明治期ではやや高価すぎる観があり，本地区最終時期に関わる大正期の価格と推定されてくる。未使用の胞衣皿を，それでもエナ場に捨てていく状況，そこには大正期以降の胞衣壺行商・回収業者が，病院（産院）回収の新システムに取り残されていく姿を見ることができる。（戸田）



第Ⅰ型式
（6）

第Ⅱ型式Ａ類
（9）

第Ⅱ型式Ｂ類
（17）



第Ⅱ型式Ｃ類
（22）

第Ⅱ型式Ｄ類
（29）

第Ⅲ型式
（34）

写真１　今井町出土胞衣容器（上）・陶磁器類（下）

5．胞衣容器に関する考察

今井町出土の資料は何か。これは，出産後二次的に娩出される胞衣（胎盤を主とする組織）を入れるための胞衣容器であろうということは現状間違いのないところであろうが，本節では改めて，他地域出土の類例・民俗・文献等を検討することによって胞衣容器に関する検証を進めてみたい。

容器と胞衣の整合性・民俗による傍証

近世～近代と見られる胞衣容器について考古学的に論じた代表例としては，土井義夫・紀野自由の論考がある（土井・紀野1978)。さらに，壽印の無いかわらけ→壽印のあるかわらけ→壽印のある蓋付容器という変遷の理論等を述べた谷川章雄（谷川ほか1989)，関西出土の土師質火消壺形容器の変遷等を述べた川口宏海（川口1989)，多摩ニュータウンNo.105Ａ遺跡出土資料の解釈から胞衣習俗が持つ境界性等を述べた伊藤敏行（伊藤1991）の論考がある。

胞衣容器であろうということについては，まず，その容器が胞衣（胎盤）を納めるのに適当な容量を持つという整合性が必要であろう。胞衣の大きさについては，産婆からの聞き取りを引用しておきたいと思う。すなわち「胎盤の大きさは，一般に小が 400ｇ，大が600ｇほどで，体重2,430ｇの出産児の場合，胎盤は430ｇで（中略）これを産婆が油紙に包んだ場合，縦16cm，横14cm，厚さ1.6cmほどの包みにおさまった。」（木下1981 75p）という。本稿に取り上げる事例（第１表）はこのような胞衣との整合性があろうと判断する素焼きの土器である。さらに，出土状況が，皿状・浅碗状・浅鉢状のものならば２枚を上下合わせ口にした状態で，単独ピットから出土という状況，またはあるいはそうではなかったかと思われる事例である，さらにまた民俗や土地の人の説明・述懐などである。

これを前提として類例の考察を進めたいが，まず，東京都八王子市元八王子町志村邸跡（第１表No.10）の建物範囲内から出土したカワラケについての報告があり（土井・紀野1978)，「戦前までエナ処理用に八王子の瀬戸物屋で市販され，『オカワ』と呼ばれていたこの種のカワラケを購入して，屋敷内に埋納することが一般的に行われていた」という土地の人の話を得ていることと，土器内共伴の墨片と胞衣習俗の一致，すなわちこの土地で男児の場合に墨や筆を入れる民俗があり，その関連を指摘されたことは学史的に重要であった。ここではさらにこの事例が保有する資料と民俗との関連の考察を行ってみたい。まず，出土地点は「奥座敷床下と推定」されており，この推定を前提にした上で，民俗から奥座敷床下は産所床下でもあったと推察できる。産所床下は民俗で胞衣埋納場所の代表的種類（木下1981 6～7p）であり，元禄５年(1692)刊『女重宝記大成』にも「俗には（中略）『産したる居間の下に埋む』ともいうなり」(『子育ての書１』258p）とある。次に，「石を載せた」とは，『大江俊迪記』に「ゑな壺ヲ（中略）穴ノ底江納メ其上ニ大成白川石ヲ

第1表　胞衣容器一覧表

No.	地名・遺跡名	出土位置	共伴遺物	装飾	点数・器形	時代	出典
1	東京都新宿区北山伏町遺跡	屋敷地北東隅より5点	無	無	5点 皿	18c末～19c	北山伏町遺跡 1989
2	新宿区内藤町遺跡	内藤家四谷中屋敷→1792年～幕末旗本屋敷地	無	無	2点 皿	1680年～	内藤町遺跡 I・II 1992
3	港区白金5丁目白金館址遺跡	書院番組屋敷跡	高田徳利1個体	無	1点 皿	18c中～	中西ほか 1988 森本 1989
4	中央区京葉線八丁堀遺跡	17世紀中葉～幕末武家地町地	無	無	3点 皿	18c中～19c	野沢・松本ほか 1990
5	台東区東叡山寛永寺護国院址		無	「壽」字　胡粉雲母	1点 皿		寛永寺護国院 I 1990
6	北区中十条1丁目南橋遺跡		無	「壽」字　銀粉	1点 皿		陣内ほか 1987
7	練馬区桜台6丁目高稲荷遺跡		無	「壽」字と松竹梅の図柄の組合せ。錫箔	1点 蓋付専用器		前地ほか 1989
8	杉並区大宮1丁目済美台南遺跡		無	「壽」字	1点 蓋付専用器		麻生ほか 1987
9	東大和市宮鍋作造家址	民家の大戸口	無	無	1点 皿		田村編 1987
10	八王子市元八王子町志村家址	1点は建物範囲内，もう1点は屋敷隣接地	土器内部に墨片 埋設土器上に石	「壽」字	2点 浅鉢1点・浅碗1点	近代	土井ほか 1978・1986
11	八王子市宇津木台遺跡	民家のアガリハナの小縁の下	無	無	1点 皿		梶原ほか 1987
12	八王子市南八王子地区No.12遺跡	丘陵上現況畑内	無	「壽」字 胎土雲母細粒多い	1点 皿		吉田ほか 1996
13	多摩ニュータウンNo.105A遺跡	民家の大戸口	無	墨書―「急々如律令」「胞衣祭」，九字。錫箔封	1点 皿	幕末～明治	伊藤 1991
14	多摩ニュータウンNo.57遺跡	墓地	無	「壽」字　銀粉	1点（他に身1個体出土） 蓋付専用器		舘野 1983
15	多摩ニュータウンNo.113・524遺跡		無	無	1点 皿		福田ほか 1989
16	埼玉県秩父郡皆野町	民家			1点 蓋付専用器	大正時代頃迄	木下 1981
17	神奈川県横浜市保土ケ谷区今井町	丘陵斜面	煉瓦・行平鍋・片口・土鍋・ちろり・水指・火消壺・唾壺・小皿・小猪口・やかん	「壽」字有，無し両者。「壽」字有大多数。銀色顔料 胎土金雲母	点数把握困難（計測完形品・復元品46枚，内セット2点）。 皿・浅碗・蓋付専用器	近代	本稿1～4
18	横浜市金沢区六浦北部遺跡	台状小丘頂部東側	無	「壽」字	1点 蓋付専用器		岡崎ほか 1982
19	藤沢市稲荷字池ノ辺	荒地の台地端部	ガーゼ等布片・脱脂綿・油紙・新聞紙（昭和初期）・ホーロー・アルミ製ボール・洗面器・ガラス製品・土鍋・瀬戸物類	「壽」字が有るものが殆どだが，無いものも有る。	500点以上 蓋付専用器・皿・浅碗・浅鉢	昭和初期頃迄	越川ほか 1980
20	厚木市東町	近世宿場町の町並みの中心地。6点は建物内の床下。1点は土蔵跡下。	無	土蔵跡下の蓋付専用器に「壽」字有り，銀色塗布。	11点 焙烙9点・皿1点・蓋付専用器1点	2点は宝永スコリア降砂（1707）生活面。8点は幕末以前。土蔵跡下の1点は大正12年以前。	山田 1994
21	厚木市飯山尼寺付近	飯山尼寺付近の山裾にある小祀近くで採集。	無	「壽」字	1点（但し皿型のもの1枚のみ） 皿		山田 1994

注：「点数」は，身部と蓋部のセットで1点。

置」(『古事類苑 禮式部一』399p),『伊勢家秘書誕生之記』には「地に穴を堀，四方石垣をつき，胎衣を納，石の蓋をしてかへるなり，虫などの不入様にするなり，蟲入ば兒煩物也，うごかぬ様に有べし」(胞衣を入れた胞衣桶に蓋をして釘で締め，これも桶の外家に入れて蓋をして釘で締め，これをこのように埋設する）とある（『古事類苑 禮式部一』393〜4p)。民俗でも，神奈川県津久井郡藤野町名倉で「狐が見つけると掘るので重い石をのせておく，狐が掘ると子が夜泣きする」(『神奈川県民俗調査報告１』119p)，同県伊勢原市高部屋西富岡でも「後産の埋め方が浅くて犬がひっかくと赤ん坊が泣くといって大きな石をのせておいた」(『伊勢原の民俗』198p）などがあり，その意味の説明も共通し，その共通性の根源として分身である胞衣がその本人に作用を及ぼすという感染呪術（フレイザー『金枝篇（一)』105p）の心理がうかがわれる。この元八王子町の事例は，共伴遺物・出土状況と民俗との一致が，土地の人の説明・述懐の確かさを裏付けたと考える。

東京都多摩ニュータウン№105Ａ遺跡の事例（第１表№13　伊藤1991）は，土器に「胞衣祭」の文字（墨書）が存在するので胞衣容器であったと判断できる。これの埋設場所の大戸口も胞衣埋納場所の代表的種類（木下1981 6〜7p）である。

神奈川県藤沢市稲荷字池ノ辺の事例は（第１表№19　越川ほか1980)，周辺地域での聞き取り調査の結果,「昭和初期頃まで，周辺地域の産院を回り，胎盤（えな）やお産時の汚物を集めてきて，この地で処理していた」という話を得たと報告されている。つまり，胞衣等を集めて処理していた（これを行ったのは胞衣業者と考えられる）という土地の古老の話がある点のほか，土器の内部に胞衣を包んだと考えられる油紙等の痕跡があった点などからして，この素焼きの土器は胞衣容器として使われたものであったと判断できよう。なお，池ノ辺遺跡の調査区域外の南側台地端部にも，この素焼きの土器を出土する場所があると当報告書にある。また，藤沢市の民俗調査報告には，市域のどこであるか不明であるが「大正半ばごろからエナ屋が取りに来て，エナヤキバに持って行くようになった」という記事と，池ノ辺が含まれる地名である「稲荷」には「胞衣ヤブという所があって，そこへ持って行って捨てた」という記事があり（『藤沢市史第７巻』651〜2p)，当遺構とのかかわりが課題として残ろう。

埼玉県秩父郡皆野町（第１表№16　木下1981 75p）の民家で発掘された口径17cm，底径5.2cm，高さ8.5cmで高さ３cmの蓋があるロクロを使った赤い素焼きの「エナツボ」がある。また，厚木市飯山尼寺付近（第１表№21　山田1994）で昭和40年頃採集された径18.2cm，高５cm，見込みに壽の型押し文字のある皿形の土器に対して，当時付近の土地の人から「エナザラではないか」という答を得たという。いずれも土地の人の言葉が付随するものである。

一方，民俗調査では胞衣についての習俗は必ずといってよいほど資料が得られるものであり，もしそこに本資料類が見られれば，胞衣容器であるということが不動のものとなろ

う。民俗調査報告書に見られる焼き物（素焼き）としての胞衣容器の例は，埼玉県与野市の「胞衣ツボという直径５寸（15cm），深さ３寸（９cm）程の素焼きで共蓋の付いた壺に胞衣を入れて，男子は墨と筆，女子は針と糸，さらにそれぞれに米・鰹節を壺にのせて，男子はトバグチ（玄関）の敷居の内側，女子は外側へ30cm程の穴を掘って埋めた。女は家を出ていくから外側に埋め，男は家にずっといるから内なのだという。女は裏口の敷居の下に埋める家もあった。」（『与野市史民俗編』215p）という事例，埼玉県川口市の「ノチザンは，またぐと同時に踏まれるようなところに埋めるのがよいと考えられていた。泥を焼いて作った『胞衣を入れる鉢』というのが売っているので，それに胞衣を入れて玄関の敷居の下に埋めた。これは父親の仕事である。生まれた子が男の子である場合には敷居の内側に，女の子である場合には外側に埋めるのが慣わしである。」（『川口市史民俗編』469p）という事例，東京都荒川区町屋の「胎盤は，泥でできている（素焼きか？）10cm四方くらいの容れ物が薬局で売られており，それに入れておくと２，３日後に町屋地区内にあった通称『胞衣社』が取りに来た。出産があれば必ず取りに来た。」（『町屋の民俗』135p）という事例がある。以上の民俗資料は，器形の把握に難点があるものの，考古資料との関わりがあると思われる。

松竹鶴亀・雲母等・壽

松竹鶴亀の図柄を描くことや，雲母等何かきららかなものが付加されること，また壽文字は，胞衣容器の特徴のように思われる。

まず，松竹鶴亀については，室町時代末期の武家故実書『産所之記』，『伊勢家秘書誕生之記』，江戸時代の『女重宝記大成』，に「胞衣桶に松竹鶴亀を書く」旨あり（『古事類苑 禮式部一』392～3p 『子育ての書１』256p），旧仙台藩伊達家墓地出土の胞衣容器（後述）に鶴亀松竹の図柄の装飾が施され（『月刊文化財発掘出土状況95.11』11p），明治期の日本胞衣納器商会製造の胞衣容器（後述）に「鶴亀松竹梅を画く」（土井1995）とあり，これが本資料類では練馬区高稲荷遺跡出土例（第１表№７）に松竹梅の図柄が見られるので，胞衣容器であるとの傍証になろうと思われる。

雲母等については，『伊勢家秘書誕生之記』に「胡粉にてぬり，雲母にて松竹鶴龜を繪にかく」（『古事類苑 禮式部一』393p）とあり，旧仙台藩伊達家墓地出土の胞衣容器に「図柄を彫った溝に銀色の金属を流し込む象眼」（『月刊文化財発掘出土状況95.11』11p），日本胞衣納器商会製造の胞衣容器に「七宝ノ模様ヲ鏤メ」（土井1995）とある。これが本資料類では，台東区寛永寺護国院址（第１表№５）で「胡粉雲母」，北区南橋遺跡（第１表№６）・多摩ニュータウン№57遺跡（第１表№14）・厚木市東町（第１表№20）・横浜市今井町（第１表№17）で「銀（銀色）の粉（顔料）」，練馬区高稲荷遺跡（第１表№７）で「錫箔」が，それぞれ壽文字（高稲荷では壽文字と松竹梅の組み合わせ）に施され，これは歴史的脈絡があるのではないかと思えるわけである。また，今井町出土例（第１表№

17）には胎土に金雲母の混入が目立つものがあり，南八王子地区遺跡№12遺跡出土例（第１表№12）も胎土に雲母の細粒を多く含んでいるということであるが，これもあるいはこれに関連することであったかもしれない。

壽の文字は本出土資料類には多く見られるが，文献（『古事類苑 禮式部一』禮式部六誕生祝上下）には見られない。壽文字のないものが古く（江戸時代），壽文字があるものが新しいのであろうということは，既に谷川章雄（谷川ほか1989），伊藤敏行（伊藤1991）が考察しているが，壽文字のあるものの上限を述べられる資料提示がない。そこで私は次のように考える。壽文字がある第１表№17今井町の事例は，明治20年以降と考えられる（明治20年日本赤十字社誕生）十字の中に井桁の中一が配された商標が壽文字のある容器の底に陰刻され，そして明治22年以降製造の煉瓦及び明治20年代以降製造とされる銅版転写染付陶磁器が共伴し，また，同じく壽文字がある第１表№19池ノ辺の事例は昭和初期の新聞紙が共伴する。他方，江戸期であろうと受け取れる第１表№１・№２・№３・№４・№20（№20は合計11点のうち10点）には壽文字が見られない。よって，壽文字のないものが古く，壽文字のあるものが新しいと把握する。

壽文字の墨書と刻印の関係については，谷川章雄（谷川ほか1989）は，港区芝神谷町町屋跡遺跡19～20世紀初頭の土層から出土の，中にかわらけが２枚重ねで正位に納められていた木箱の蓋に墨書された「壽」の字をもって，壽の墨書→壽の刻印という変遷を推定した。なお，この神谷町の事例は谷川が解釈するように，特に法量の点で胞衣容器の可能性があるが，容器だけを廃棄したと見られる（谷川ほか1989）ので今回第１表には取り上げなかった。また，伊藤敏行(伊藤1991)は，墨書→刻印の図式はなかったと考えるという。ところで，本資料類に壽文字の墨書が見られるのはこの今井町の報告（５例）が初出である。その器形は壽の刻印のあるものと同じ（今井町ⅡＢ・ⅡＣ）であり，出土状況も同じなので，ここでは同時期と把握しておく。

壽文字の発生については，谷川章雄（谷川ほか1989）は，「壽文字発生の理由はわからないが，壽の刻印の段階は胞衣容器としての専用器の成立の段階」と考え，伊藤敏行（伊藤1991）はこれにさらに推測を重ねた形で，「推論ではあるが，胞衣カワラケを製造するさいに易者等の関与が薄れ，単に埋納するといった行為のみに儀礼がなってきた以降，『これがその為の容器ですよ』といった意味合いで“壽”の刻印が採用されるようになったのではないか。その時期は“胞衣産穢物取締規則”施行以降表立ってこうした儀礼が行われなくなり，一般的にはこのような明確に胞衣という意識が反映された容器のみが使われるようになったのではないか」と述べる。また，江戸時代の胞衣容器ではない容器に見られる壽文字と本資料類の壽文字との関係について，伊藤敏行（伊藤1991）は「直接の接点はない」と見ている。

壽の文字について私が述べたいことは，壽文字の性格は「めでたい」「祝い」であり，

『御産所日記』1434年の記録中に「御胞衣藏。御祝下行」(『古事類苑 禮式部一』398p)とあり，胞衣納めは祝いであるということがうかがわれ，また上述の松竹鶴亀や，あるいは何かきららかなものということからも，めでたいものの意識があることが感じられ，壽文字と胞衣容器は結びついてくると考えることである。よって，その契機はそれを説明できる資料が得られないので解らないが，本資料類に壽文字が使われることにもなり，現在の資料からは明治20年以降のある時から特徴的なものになっていったと把握しておく。

今井町出土の土器

今井町出土の土器類は，胞衣容器であると判断できる傍証を有する八王子市志村家跡出土品，東京都多摩ニュータウン№105A遺跡出土品，藤沢市稲荷字池ノ辺出土品等と器形・法量が類似し（特に池ノ辺のタイプ13と今井町第Ⅰ型式，池ノ辺のタイプ１のセットの上部の土器と今井町第Ⅱ型式Ａ類は器形・法量が同じ)，壽文字が存在し，また，壽文字に銀色顔料塗布が残存することなどから，今井町出土品も胞衣容器であると考察したわけである。

６．近世～近代における胞衣容器

まず，本資料類の時期を17世紀から昭和初期までと把握しておきたい。上限の根拠は，『後水尾院宸記』(後水尾天皇(1596－1680)）に記述される「御ゑな（中略）あいのかはらけに入，二まいにてふたをいたし（後略)」(『古事類苑 禮式部一』391p）を本資料類に該当するものと解釈することにある。出土事例からは，第１表№２の事例である同形の２枚の皿状かわらけを合わせ口にしたもの２点の製作年代が1680年以降とされる。また，第１表№20の事例の内合わせ口にした焙烙２点は18世紀初頭あるいはその前後であるかもしれない。下限の根拠は第１表№19藤沢市池ノ辺の共伴遺物の昭和初期の新聞紙である。

次に，本資料類の地域性は，ここで扱った資料は武蔵・相模であるが，さらなる地域的広がりは報告書類を広く渉猟する余裕がなく未知であるということ，『後水尾院宸記』の記事は京都であろうということ，また，詳しくは未知であるが民俗資料で奈良県下にかなり普遍的・他に山口県久賀に事例があるという直径５寸ぐらいで二重に合せた胞衣容器として使われた焙烙が存在する（木下1981 8p）ということぐらいを述べるにとどまる。

三番目に述べることは，本資料類と同時期である近世～近代における他のタイプの胞衣容器である。

兵庫県伊丹市では本資料類とは器形がかなり異なる胞衣容器が江戸時代中頃から明治初期頃までの間展開していたことが，川口宏海の論文（川口1989）から知ることができる。これは伊丹市伊丹郷町の町家跡から出土した「土師質土器壺」の胞衣容器についての発掘調査報告ならびに当該壺の研究である。この壺は全部で17例あるということであり，18世

紀中頃から後半の共伴遺物を持つ例に始まり，幕末～明治（19世紀中頃前後）の共伴遺物を持つ例を最後とすると時代考察されている。この「土師質土器壺」の器形は，「口縁部が短く直立し肩の張った小型の壺」で，「蓋があり」，「火消壺によく似ている」，「法量は，最古の18世紀中頃から後半の共伴遺物を持つ例が口径11.4cm，器高16.7cmを測る」，というものであり，東京及びその周辺地域出土の本資料類とは違いが目立ち，本資料類と脈絡はないと思われる。出土場所は「主屋建物の中　11例」「主屋建物の入口　2例」「裏庭　4例」であり，埋納する深さは壺の上部がわずかに隠れる程度であるという。そして，「茶褐色の固形物と墨・筆が遺存していた」という1例，「茶褐色の固形物のみが遺存していた」という2例，「硯・墨・筆を硯箱に入れた状態をあらわしたミニチュア土製品と実物の墨を入れた」という1例がある。また，この「土師質土器壺」の分布・性格・変遷が論じられ，分布は「大阪府下の都市を中心としており，例外的に姫路城下町で出土している」ということであり，性格は「圧倒的に多いのは蔵骨器であり，これは墓地から出土する。また，火消壺として用いられたものや，この伊丹市のように胞衣容器として用いられたものもある」という。変遷については，紀年銘・器形・技法・共伴遺物等から，最古の例は大坂城跡出土のもので，その時期は「16世紀第4四半期」，最も新しい例は伊丹郷町出土の内の「幕末～明治（19世紀中頃前後）」のものとし，この間をまず大きく二つに区分し，古い時期をⅠ，それに続く時期すなわちロクロを使用し量産化される段階を一大画期としてそれ以降をⅡとし，さらにⅠの内を古い時期から順に1・2・3，Ⅱの内を4・5と区分している。

民俗調査によって得られた胞衣容器の種類は，全国的に報告資料をあたった木下　忠の論文（木下1981）によれば，「かめ・つぼ・底なしがめ・ハンド（土壷）・たこつぼ・とっくり・どびん・ほうろく・胞衣桶・曲物・メンパ・柄のとれたひしゃく・わん・さんだわら・こも・むしろ・馬のくつ・わらづと・あわび貝・芭蕉の葉・白紙・油紙・ぼろ」（木下1981 8～9p）である。このように農山漁村では胞衣容器はいろいろあり，生活に関連したものを利用したり，また，特に容器といわれるほどのものを使用しないという民俗は多い。また，東京都については，伊藤敏行が『東京の民俗』1～6の資料から，「胞衣を包む物は紙や油紙・ボロ布がほとんどで，容器に入れて埋めるのはわずかに4例に限られる」（伊藤1991），とまとめている。

文献に見られる江戸時代の胞衣容器としては，元禄5年(1692)初版の『女重宝記大成』に，「押桶（おしおけ）は，常にいう胞衣桶（えなおけ）なり。さしわたし7寸・9寸・6寸，高さ6寸・7寸，または8，9寸にもするなり。蓋あり」（『子育ての書1』256p）とある桶が知られており，この胞衣桶は，室町時代末期の武家故実書『産所之記』の「ゑなおけ（中略）ゑなおけのはこ，びやうぶばこのやうにさゝせ候，足を六ツ打申候，はこのながさたかさ，おけのかつかうによるべし」（『古事類苑 禮式部一』392p）という記事，『伊勢家秘書誕生之記』

にある，「胞衣桶は曲物也，高サ八寸程，口ノ廣サ七寸程に，あつくいかにも丈夫に二重のかはにする也，そことつよくあるべし，切ふたなり，蓋は釘にてしめてよし」，さらにこの「胞衣桶」を「外家」に入れる，「外家杉にて輪を入，桶にしたる吉なり，切蓋にして，釘付にする也，此の桶の足は六ツ也，くれ木を足に用なり，外家は胎衣桶の大サによるべし，是は桶にゆひたる物也，箱にさしたるも不苦，箱も桶の大サにより拵べきなり，同じくは杉にてさしても，桶にゆひても，木あつに有べし，桶のわもしげく入べし」という記事（『古事類苑 禮式部一』393p）の胞衣桶と脈絡があろう。『親元日記』にも，寛正6年(1465)，胞衣を土中に埋納するときに，まず壺を穴の中に据え，「御胞衣の桶（白赤絹にて，二重につゝむ)」をその壺の中へ入れて蓋をする，という記事（『古事類苑 禮式部一』399p）がある。東京都港区白金台の瑞聖寺にあった旧仙台藩・伊達家墓地の第4代仙台藩主伊達綱村の長男・扇千代（1685年に5歳で死去）の墓の跡（墓石があった所の向かって右奥，深さ約1mの土中）から，胞衣容器と見られる極めて精巧な装飾のある青銅製の筒状容器が発掘された。専門家により最高級品と鑑定されている。容器は外側から先ず青銅製の直径28.2cmの円筒形容器，その内側にこれも青銅製の直径27cm，高さ26cm，厚さ6mmの円筒形容器，さらにその内側に木製の桶と伊達家の家紋が入った桶の蓋があった。精巧な装飾というのは一番外側の青銅器の外側にあり，その図柄は鶴・亀・松・竹で，彫った溝に銀色の金属を流し込む象眼が施されている（『月刊文化財発掘出土情報95.11』11p)。民俗でも前記のごとく胞衣桶・曲物がある。

江戸時代では，また，本資料類の類例かと推測される史料がある。すなわち，土器という言葉だけが見られるのであるが，江戸永田町の旗本屋敷所蔵の木版刷文書「安産之節心得之事」(『厚木の民俗8』166p）に，胞衣容器が「土器（かわらけ）」「胞衣土器（えなかわらけ）」と表記されている。また，「有限責任　日本胞衣納器商会定款」の「日本胞衣納器商会大意」(明治22年12月）文中に「近来多クハ『ごとうかわらけ』ニ盛ルニ上下二枚ヲ用ユ該『ごとうかわらけ』ニ於ケル葬儀新仏ニ線香ヲ供スル器ニシテ凶事ノミナラス之レニ胞衣ヲ盛ルトキハ（後略)」とあり，当該資料発表者土井義夫により本資料類の類例であると指摘されている（土井1995)。

つまり，上述の最後の部分は推定本資料類例であるが，その前の記述は，本資料類は，桶（円筒形容器）や，火消壺状土師質土器壺や，民俗資料に見られる他諸種胞衣容器などとは別の，近世〜近代における胞衣容器のひとつの類型のように見えるということを述べているのであるが，この類型をいまひとつはっきりさせるためにも，土井義夫による明治期の胞衣壺の報告（土井1994b）に触れたい。これは一つの宗教的・経済的動きであった。明治23（1890）年1月権大講義松本亥平と松本龍智は，当時東京府下で胞衣埋納産褥物焼却場として警視庁・東京府両庁によって許可されていた六社，すなわち南葛飾郡吾妻村吾妻社，北豊島郡雑司ヶ谷村貴子母社，北豊島郡中里村東京衛生社，北豊島郡中里村栄生社，

北豊島郡三河島村子安社，荏原郡大井町益人社を合併して，日本橋区に日本胞衣株式会社を創立し，北豊島郡道灌山に本部を置いた。胞衣埋納場所及産褥物焼却場は道灌山ほか上述の従前の場所であった。道灌山には胞衣守護ノ大神国常立大伊弉諾伊弉冉二柱ノ神を祭神とする胞衣神社を設け，業務の性格は胞衣埋納の動機付けが神道にあった。この様子がうかがえる次の二つの記事（土井1994a）がある。一つは京橋区日本胞衣株式会社八王子出張所が明治30年10月６日依頼者が生まれた日付けで出した「胞衣納祭證」であり，表面は「道灌山胞衣納祭地ニ鎮納シタル事ヲ證明ス」ものと，「胞衣納祭及産穢物除去手数料」（年２回大祭を執行）として20銭を受け取った領収証，裏面は納祭所を家族で占地したい人には貸地料を申し受けることで応じるとの記載がある。これにより経済活動面がうかがわれる。もう一つの記事はやはり道灌山のことで，「胞衣神社といって胎盤をまつる社があった。古い木の鳥居をくぐると両側は桜の木で，休み茶屋があって，右側にいく峰かの築山があり，そこにそれぞれ瀬戸物に入れた胎盤を木杭を立てて葬った。その隣が広場になってそこで花見をしていた。胞衣神社にいけるような家は裕福な家で（後略）」と，納祭所の有り様が見え，さらに納祭所を利用する家は裕福であるという階層差による利用の有無がうかがわれる。

さて，この日本胞衣株式会社の設立者は，設立と同時期に有限責任日本胞衣納器商会という独自の胞衣容器を製造・販売する会社を興した。本店は東京市日本橋区，製造所は東京市深川区であった。この容器の器形は「延命宝珠状ニシテ陰陽五行ノ運ニ象リ画クニ鶴亀松竹梅及七宝ノ模様ヲ鏤メ且其製造尤モ鄭重ニシテ容積部ト蓋トノ吻合ヲ緻密閉塞スルカ故少シモ臭気漏洩ノ患ヒナク仮令ヒ座床ニ備エ置クモ可ナルヘシ」であり，かつ上等（１個金50銭）・中等（25銭）・下等（６銭）という区別があった。販売は本支店及び販売取次所において行い，販売取次所は東京市各区内便宜の箇所に設け，及び地方便宜の地に支店を置くと定款に記された（土井1995）。

このような日本胞衣納器商会製造の胞衣容器は，時代は本資料類と重なりを持つが，上述定款記載の器形説明により本資料類の蓋付専用器とは別であろうと理解される。この定款記載の容器説明に該当する出土例は見られない。民俗調査報告書に見られる胞衣神社へ胞衣を納めたという事例がこれに該当すると思われる。例えば東京都台東区谷中（旧谷中真島町）で「大正初期以後はエナを処理する者に処分してもらう家が多くなり，このエナを処理する人はえな神社へ持参して，その境内の所定の場所に埋めた」（『東京の民俗１』97p）とか，台東区根岸（旧中根岸町）では「道灌山のえな神社に埋めた」（『東京の民俗１』114p）とはっきりしている。（小松）

引用文献

『古事類苑　禮式部一』（神宮司庁蔵版）禮式部六誕生祝上下　1927　古事類苑刊行会
フレイザー著・永橋卓介訳　1966 『金枝篇（一）』岩波書店

『神奈川県民俗調査報告１』 1968　神奈川県立博物館
『子育ての書１』 1976　平凡社
土井義夫・紀野自由　1978 「〔採集メモ〕いわゆる“エナ”処理用カワラケ」『貝塚18』物質文化研究会
『川口市史民俗編』 1980　埼玉県川口市
越川敏夫ほか　1980 『池ノ辺』池ノ辺遺跡調査会・日本考古学研究所
『藤沢市史第七巻 文化遺産・民俗編』 1980　藤沢市役所
『与野市史民俗編』 1980　埼玉県与野市
木下　忠　1981 『埋甕－古代の出産習俗－』雄山閣
岡崎文喜ほか　1982 『横浜市 六浦北部遺跡』六浦北部遺跡調査団
舘野　孝　1983 「多摩ニュータウン№57遺跡の胞衣容器」『東京の遺跡№２』東京考古談話会
『東京の民俗１』 1984　東京都教育委員会
土井義夫ほか　1986 『八王子城跡 東京造形大学構内地区発掘調査報告書』東京造形大学構内地区遺跡調査会
麻生順司ほか　1987 『東京都杉並区済美台南遺跡予備調査概要』済美台南遺跡調査会
梶原　勝ほか　1987 『宇津木台遺跡群Ⅸ』八王子市宇津木台地区遺跡調査会
陣内康光ほか　1987 『南橋遺跡』東京都北区教育委員会社会教育課
田村善次郎編　1987 『旧宮鍋作造家住宅解体調査報告書』東京都東大和市
中西眞也ほか　1988 『白金館址遺跡Ⅱ』白金館址遺跡調査会
川口宏海　1989 「胞衣壺考」『研究集録第９号』大手前女子短期大学
北原糸子・谷川章雄　1989 「胞衣納めをめぐる二，三の問題」『北山伏町遺跡』新宿区北山伏町遺跡調査会
『北山伏町遺跡』 1989　新宿区北山伏町遺跡調査会
福田敏一ほか　1989 「№113・524遺跡」『多摩ニュータウン遺跡 昭和62年度 第４分冊』東京都埋蔵文化財センター
前地ひろみほか　1989 『練馬区高稲荷遺跡』練馬区教育委員会
森本伊知郎　1989 「遺構・遺物の考察」『白金館址遺跡Ⅲ』白金館址遺跡調査会
『東叡山寛永寺護国院Ⅰ』 1990　都立学校遺跡調査会
野沢　均・松本吉和ほか　1990 『京葉線八丁堀遺跡』京葉線八丁堀遺跡調査会
『伊勢原の民俗－高部屋地区－』 1991　伊勢原市
伊藤敏行　1991 「胞衣習俗と胞衣容器－東京都内遺跡出土の考古諸例を中心として－」『学芸研究紀要第８集』東京都教育庁生涯学習部文化課
『内藤町遺跡 第Ⅰ分冊』『内藤町遺跡 第Ⅱ分冊』　1992　新宿区内藤町遺跡調査会
水山昭宏ほか　1992 『菅谷遺跡 都立荒川工業高校内遺跡調査概報』都立学校遺跡調査会
荒川区民俗調査団　1993 『町屋の民俗』東京都荒川区教育委員会
『厚木の民俗８』 1994　厚木市教育委員会
山田不二郎　1994 「胞衣処理に関する資料」『厚木の民俗８』厚木市教育委員会
土井義夫　1994a「〔採集メモ〕道灌山胞衣神社と日本胞衣株式会社」『貝塚47』物質文化研究会
土井義夫　1994b「〔採集メモ〕日本胞衣株式会社の設立」『貝塚48』物質文化研究会
土井義夫　1995 「日本胞衣株式会社と日本胞衣納器商会」『貝塚49』物質文化研究会
吉田浩明ほか　1996 『南八王子地区遺跡調査報告10(郷田原遺跡)』八王子市南部地区遺跡調査会

原 稿 の 募 集 !!

『考古論叢 神奈河』は，みなさまで育てる会誌です。

考古学界に衝撃を与えるような論文も歓迎しますが，身近かにある資料の紹介や，研究ノートも気楽に投稿してください。

第６集の締切は，平成８年12月末日を予定しております。ふるっての投稿をお待ちしております。

編集委員　岡本孝之　鈴木重信　川口徳治朗

問い合わせ先　川口徳治朗　Tel　045－201－0926（勤務先）

『考古論叢 神奈河』の寄稿要綱

1. 神奈川県考古学会の学術研究会誌として『考古論叢 神奈河』を刊行する。
2. 発行は，年１回とする。
3. 会誌の内容は，原則的には神奈川県及びそれに関連する主題についての論文，資料・研究ノート等の発表の場とする。
4. 原稿の採否等，編集・刊行上の業務は，編集委員会を設けて，実施する。
5. 会誌に寄稿することができる者は，次のとおりとする。
   (1) 神奈川県考古学会の会員。
   (2) 編集委員会から調査・研究上に必要があって寄稿の依頼がなされた者。
   (3) その他，編集委員会で適当と認めた者。
6. 寄稿する原稿の枚数は，原則として制限しない。ただし，編集委員会の判断で，紙数等の関係から分割して掲載することもありうる。
7. 原稿料金の支払い，掲載料金の徴収は行わない。

資料紹介

藤沢市№220遺跡Ｂ４層出土の石器について

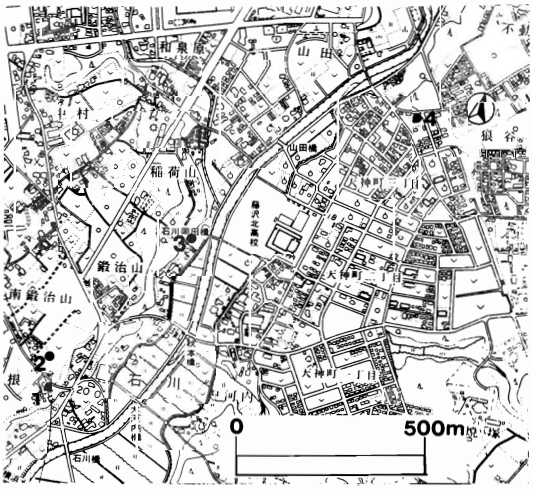
加　藤　信　夫・安　達　尊　伸

はじめに

ここに紹介する資料は，1995年10月13日に発見された藤沢市№220遺跡の先土器時代の資料である。本遺跡は藤沢市石川 403―１番地に所在し，現在区画整理のための工事が進行中である。遺物が出土した地点は既に元の地表から４～５ｍほど削平され，高さ約１ｍの宅地に成形されていた。その南西コーナーの法面に遺物が露出しているのを発見したため，放置すると遺物が散逸する恐れがあったので簡単な調査を実施した。後に出土層位を確認したところ，Ｂ４層上面に位置することが判明した。県下においてはＢ４層中から遺物を出土する遺跡は稀であり，本遺跡例のように石皿・磨石と考えられる石器がまとまって出土したことは，先土器時代研究にとって貴重な資料と言えよう。

１．遺跡の位置（第１図）

本遺跡は，小田急線六会駅の南西方約 1.9kmの相模野台地南東部に位置する。引地川の右岸，標高約30mの台地斜面部にあたる。古くは相模考古学研究会の踏査によってその存在が知られた遺跡である。北側に隣接する２の南鍛冶山遺跡・３の藤沢市№399遺跡とは一連の台地上に立地することになる。周辺の同時期の遺跡としては，引地川の右岸では約600m上流に３の藤沢市№399遺跡が在り，Ｂ４層中間部より局部磨製石斧２点他が出土している。約 4.7km上流には代官山遺跡が在り，Ｂ４層下部より錐器，剥片類が出土している。約２km下流の低位段丘上には大庭根下遺跡が在り，Ｂ４層上部よりナイフ形石器と打製石斧が出土している。本遺跡から約1.2km上流の左岸には４の藤沢市№269遺跡が在り，Ｂ３層下部～Ｂ４層上部とＢ４層下部～Ｂ５層の２枚の文化層が検出され，ナイフ形石器，ハンマーストーンなどが出土している。

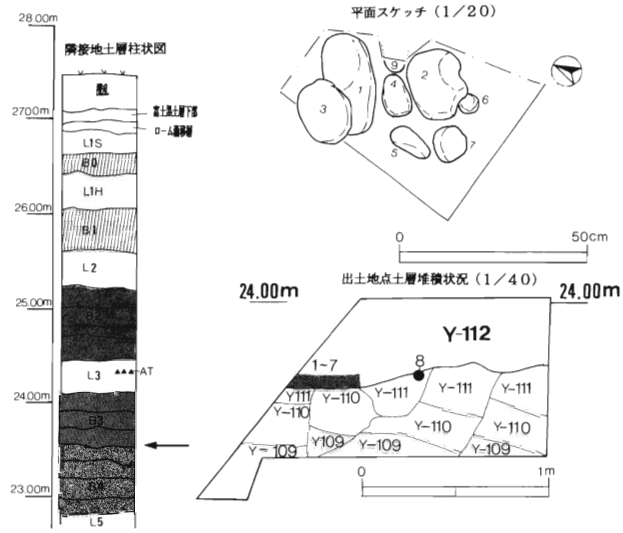


第１図　遺跡位置図（1／20,000）

この様に本遺跡は県内でも最古段階の遺跡が集中する地域に存在している。

2．出土状況（第２図）

遺物出土地点の法面では，立川ロームのＢ３層・Ｂ４層が見られＢ３層中にはＹ―112が，Ｂ４層中にはＹ―109～Ｙ―111の各層を確認した。遺物出土地点は地殻変動により土層のずれが生じているが，いずれの遺物も底面がＹ―111の上面にのり遺物をＢ３層（Ｙ―112）が覆うような状態であった。よって当時の生活面はＢ４層上面であると考えられる。１～７は約50cmのせまい範囲に集中していた。特に３は１の上に立て掛けられたような状態で重なっていた。崩落による散逸の恐れのあるもののみを採取してきたため，第３図９など比較的小形の磨石と考えられる石器が３点残っているが，その内の１点も１の上にのっていた。６は２の下側の凹みに入り込むような状況であった。全容が知りえないので断言できないが，採取してきた遺物の出土状況と現地に残してきた遺物が１の上にのっていたり２の北や東に位置していたことを考えあわせると，１・２・３の石皿と考えられる大形の石器の周辺に磨石などと考えられる小形の石器が添え置かれているような状態が想定される。８のみは１～７から30cm東に離れていた。また，遺物の周辺ではその広がり等は確認していないが，同一層位で炭化物を確認した。

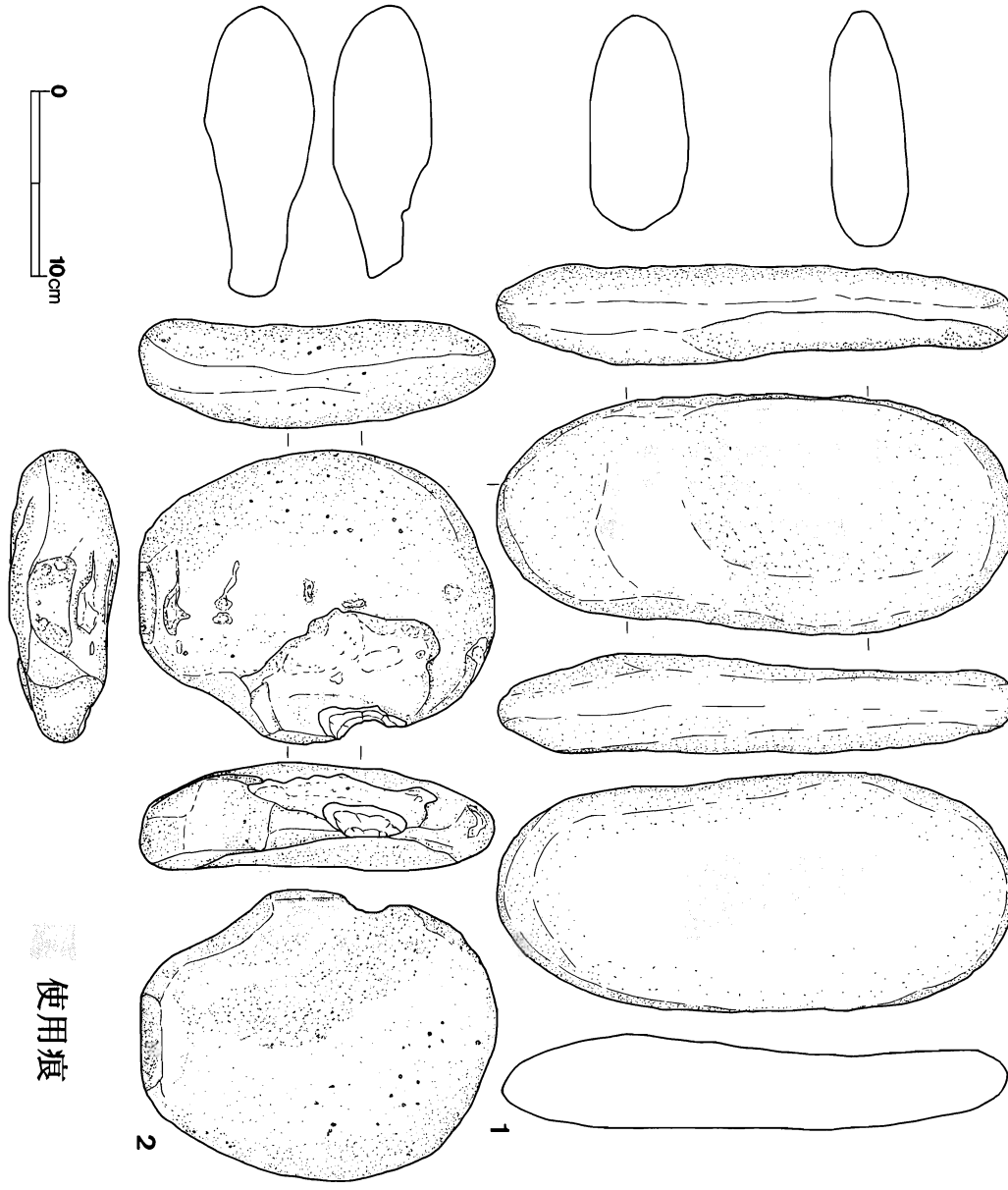


第２図　遺物出土状況

3．遺物について（第３・４図）

１は今回採取した遺物のなかで最大のもので，長楕円形を呈する。実測図正面の左上半部では明瞭な磨痕等は確認できないが，広い範囲で平面半円状に緩やかに左側縁に向かって凹み薄くなっていく。その凹み部の左側縁は，他の側縁がなめらかな曲線で稜が不明瞭であるのに対し明瞭な稜をもっている。また，下半部の凹みのない厚みのある部分や裏面には，摩耗によると考えられるなめらかな面を持つ。表面は鉱物の抜けたような小さい穴が多少見られる。

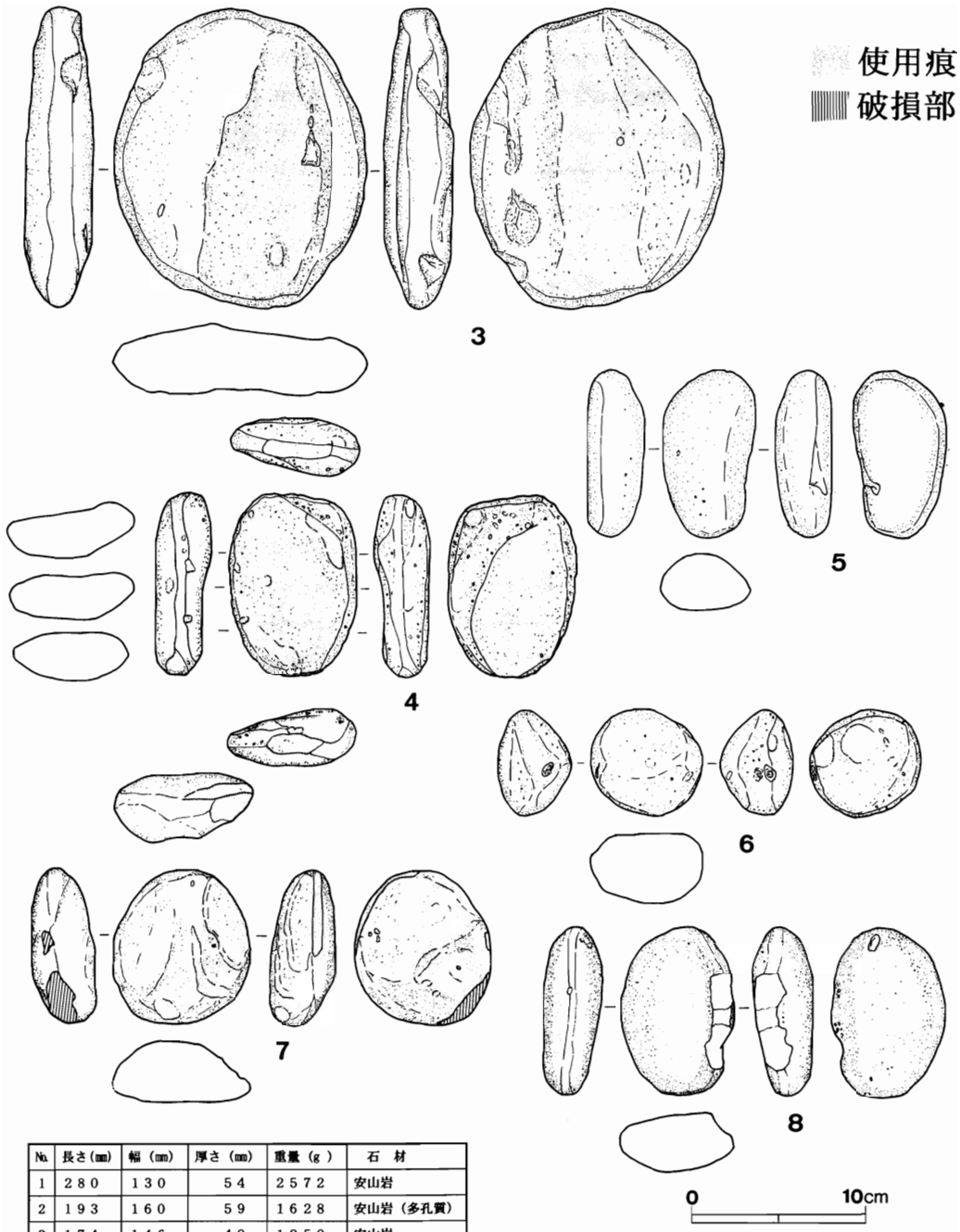
２は不整円形を呈する。表面は多孔質で非常に粗い。右側縁に剥離面を持ち，右半部には広い範囲で凹凸の激しい不自然な凹みを持つ。裏面の左半部は，側縁に向かって薄くな



第3図　出土遺物1（1／4）

り平面が縦長で断面が弧状の凹んだ面を持つ。見た目の印象こそ異なるが，側縁に向かって不自然に薄くなる凹みの在り方は1に類似する。また，下面には幅5cm程度の不自然な凹みを持っている。

3は板状の不整楕円形を呈する。正面右半部には，平面縦長で不整形の浅い凹みを持つ。その範囲の小さな凸状部分では非常になめらかな摩耗の痕跡が認められる。裏面も同様な



No.	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石 材
1	280	130	54	2572	安山岩
2	193	160	59	1628	安山岩（多孔質）
3	174	146	40	1250	安山岩
4	104	74	32	266	安山岩（多孔質）
5	95	54	33	2123	安山岩（多孔質）
6	97	66	34	267	安山岩（多孔質）
7	60	64	42	199	安山岩
8	88	80	38	288	安山岩

第4図　出土遺物2（1／4）

凹みを持つ。表面は1と近似するが多少なめらかである。

4・5・6は，表面が2に類似し多孔質で凹凸が激しく線状痕などは観察できないが，4・6は摩滅したように凹凸が少なくなっている面（トーン部分）が顕著に認められ，また，4の上下面は面取りがなされていることが明瞭に観察できる。5は確実な摩耗痕は観察できないが裏面に比較的平坦な面を持っている。また，裏面下部の左側端には，剥離されたような鋭い窪みを持っている。6の両側面には小さな窪みが存在し，敲打痕の可能性もある。

7・8は，表面が比較的なめらかな材質である。7の裏面には，明瞭な磨痕が認められ右側縁に面取りがなされている。また，正面右半部には岩脈と思われる細い稜が存在するが，摩耗により非常になめらかになっている。8の右側縁には剥離痕が認められるが，風化とロームの付着により人為的なものかどうかは確認できない。正面・裏面ともに凹凸が少なく非常になめらかになっている。

出土した遺物は，いずれも磨痕・不自然な稜や凹みを有し面取りが行なわれているものも存在した。これらが，人為的なものかどうかは今後さらに検討を要するが，あたかもセット関係を示すかのような出土状態とを考え合わせると，石皿や磨石のような石器として使用されたものと考えられる。また，磨石と考えられる石器は既に敲石に分類され，植物質食料の調理加工具として捉えられているが（黒坪1983・1984），石皿はほとんど例が見られない。

おわりに

先土器時代のこのような事例は少なく，県下では大庭根下遺跡（麻生1987）・栗原中丸遺跡（大上・鈴木1984）で各1点の磨石が出土しているのみであり，また，このような出土状況を呈する例は，非常に稀でその評価の仕方によってはこれまでの先土器時代の認識を変えかねない程に重要な資料である。

最後に本資料を紹介する機会を与えて下さった編集委員の方々，上本進二，織笠　昭，織笠明子，桜井準也，柴田　徹の各氏に貴重な御教示を頂いた，記して謝意を表します。

参考文献

大上周三・鈴木次郎　1984　『栗原中丸遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告3
黒坪一樹　1983・84「日本先土器時代における敲石類の研究（上・下）」『古代文化』35—12・36—3
相模考古学研究会　1971　『先土器時代遺跡分布調査報告書　相模野篇』
砂田佳弘・上田　薫　1986　『代官山遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告11
関根唯充　1995　「No.399遺跡」『藤沢市文化財調査報告書』第30集
戸田哲也・麻生順司　1987　『大庭根下遺跡』大庭根下遺跡発掘調査団
浜野洋一・上本進二・桜井準也　1996　「藤沢市No.269遺跡」『湘南考古学同好会々報　60』

執筆者紹介　桜井準也（慶応義塾大学文学部講師）
坂本　彰（(財) 横浜市ふるさと歴史財団
埋蔵文化財センター）
釼持輝久（横須賀市立津久井小学校教諭）
鈴木一男（大磯町教育委員会）
國見　徹（大磯町郷土資料館学芸員）
戸田哲也（玉川大学文学部講師）
小松　清（成城大学民俗学研究所）
加藤信夫（藤沢市教育委員会）
安達尊伸（東海大学卒）

目次英訳　近藤英夫（東海大学文学部教授）
西秋良宏（東京大学総合研究博物館助教授）

考古論叢 神奈河　第5集

平成8年4月10日　印刷
平成8年4月15日　発行

編集・発行　神奈川県考古学会
事務局　東海大学文学部考古学研究室内
〒259-12　平塚市北金目1117
郵便振替　00240－9－71208
神奈川県考古学会

印刷　文昭堂印刷株式会社
〒210 川崎市幸区南幸町3－20
電話　044－533－2121（代表）

KOKO-RONSO KANAGAWA vol.5

CONTENTS

Articles

Junya SAKURAI — Incipient Jomon sites in the Sagamino region —Interpretation of the settlement system of the Ryusenmon phase—

Akira SAKAMOTO — Point and pottery —The Hanamiyama site and its surrounding Incipient Jomon sites in the Tsuzuki (都筑) area, Tsurumi valley—

Teruhisa KENMOTSU — Cave occupations on the southern coast of the Miura Peninsula —Consideration of their relationship with settlements and cemeteries in the hinterland—

Kazuo SUZUKI, Toru KUNIMI — Tunnel tombs in Oiso town —Results of the site reconnaissance survey—

Tetsuya TODA, Kiyoshi KOMATSU — A study of the jar for placenta —analysis of the pottery assemblages from Imaicho, Yokohama—

Materials

Nobuo KATO, Takanobu ADACHI — Late Palaeolithic stone artifacts from Layer B-4 of the Fujisawa No.224 site

1996.4